令和元年8月1日発行第16巻第4号通巻120号

cover illustration by 孫陽州

二次元ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

2019 08 Volume.107 DIGITAL EDITION

18 未満

今号の特集 Special Fetishism Series

性転換孕ませ

女にされた体に後戻りできない快楽と絶望を叩きつけられる！

カラーピンナップ COLOR PINUP

孫陽州
うるし原智志
sage・ジョー
ミサカ12003
みれい　ボリス

表紙&ピンナップ テレカ・タペストリー 応募者全員サービス

試し読み版

【えっちマンガ&4コママンガ】
ばふぇ
ナギヤマスギ
白う～凪い
嘉納あいら

【連載&読み切り小説】
089タロー×孫陽州
089タロー×三星遥
上田ながの×ミサカ12003
大角やぎ×sage・ジョー
き一子×綾枷ちよこ
上田ながの×弥弛
狩野景×爺わら
千夜詠×みかん。
木森山水道×きばすけ
磯貝武連×かん奈
淡海翁人×むらさき朱

『sin光臨天使エンシェル・レナFD』最終回
小説：黒井弘騎　挿絵：三色網戸。　原作：Triangle

『変幻装姫シャインミラージュ外伝』最終回
小説：でいふぃーと　挿絵：高浜太郎

Hisasi先生抱き枕カバー
応募者全員サービスも実施！

女体化士官
クレイン
～雌犬に成り下がった軍将校～
快楽尋問に屈するTS軍士官！
小説／上田ながの
NOVEL
挿絵／ミサカ12003
ILLUSTRATION

「フィガロ協商連合軍情報士官――クレイン・ローガン中佐ですな？」
黒を基調とした軍服に身を包んだ男がニヤつきながら囁きかけてきた。男の周囲にはやはり軍服を身に着けた男達が十数人――彼らの手には自動小銃が握られていた。
それに対し赤い軍服に身を包んだクレインは一人である。いや、実際には五人ほどで行動していたのだが、護衛役だった四人は既に事切れていた。
「貴様ら……スヴェリアの連中か？」
スヴェリア――最近フィガロ協商連合内で行動しているテロ集団である。現政権を転覆させ、神スヴェルの教えの下に国を宗教国家化させることがスヴェリアの目的だ。
「流石は連合軍次期幹部候補――なかなか話が早いようで助かります」
「それくらい誰だって分かるさ。で、貴様ら……俺になんの用だ？」
静かに語り掛けつつ、クレインは男達の様子を観察する。
（……隙は……流石にないな。この人数が相手では。だが……）
既に緊急時用のコールは発信している。軍本部も異変には気付いているはずだ。
（GPSで位置の把握も問題は無い）
つまり、すぐに救出部隊は動いてくれる。時間さえ稼げば……。
「貴方に聞きたいことはもちろん一つです。国防省のセキュリティ情報……。そのすべてを我々に教えていただきたい」
「なるほど。だが、そんな重要機密を貴様らのようなテロリストに俺が話すとでも？」
「もちろん、簡単に話していただけるなどとは思っていませんよ。だが、貴方はじきに話すことになる」
「拷問でもする気か？　悪いが無駄だぞ。その手の訓練は受けているからな」
「情報士官が受ける対拷問訓練の厳しさは私もよく知っています。痛みを、恐怖を与えたところで貴方達は情報を話してはくれない。そのことはたっぷり経験させていただきました」
たっぷり経験――事実だろう。実際半年の間に情報士官が三人ほど死体で見つかっている。その身体には拷問の後がたっぷりと残っていた。
「なら俺から情報を聞き出すなんてことは諦めた方がいいと分かると思うけどな」
「その点なら問題ありません。今回は確実だ。クレイン中佐――必ず話していただきますよ」
不敵な笑みを浮かべつつ男はそう口にすると、一本の注射器のようなものを取り出してきた。
「……自白剤か？　無駄だぞ」
薬に対する耐性訓練も受けている。
「そんな無粋なものではありませんよ。これがなんなのか……すぐに貴方は理解することになる」
言葉と共に男は躊躇することなく、注射器をクレインの首に刺してきた。
「うぐっ！」
痛みが走る。同時に注射器のピストン部が押された。薬が身体に流し込まれる。
「あっぐ……くううう」
薬が染み込んでくるのが分かる。それと共に――
（駄目だ……いし……きが……）
自分の意識が遠のいていくのが分かった。
（きゅう……じょが……くる……まで……）
耐える。何をされても。たとえ殺されそうになったとしても……。この国を、人々を守る為に……。
そんなことを強く考えながら、クレインは意識を失った。

＊

「う……ぐうう……」
目蓋に重みを感じつつ意識を取り戻す。
「目覚めましたかクレイン中佐」
様々な計器が並べられた部屋だ。多分ここが敵の基地なのだろう。そんな部屋に置かれた台の上に、クレインは拘束されていた。目の前には先程の男がいる。一人だけではない。男の部下達も一緒だ。ただ、先程までの軍服姿ではない。男達は全裸だった。肉棒まで剥き出しにしている。
「……なんだその姿？　まさか貴様ら……男色趣味でもあるのか？　まさか、貴様らのいう拷問って……俺を犯すことなのか？」
頭はまだクラクラしている。だが、状況を判断するくらいの思考は可能だ。
「そういうことです」
問いかけに男はあっさりと頷く。
「……俺にそんな趣味はないな。だが、だからといって犯されたくないから話すなんてあり得ないぞ」
「いいや、それは逆です。貴方は犯して欲しいから話すことになる。拷問に対する訓練はしていても、快楽に対する訓練はしていないし、できないでしょうからなぁ。何しろ、これから貴方が受ける快感はこれまで経験したことがない未知のものだからだ。男では決して得ることができなかった女の快感。それをたっぷり教えてあげますよ」
「女の快感？」
一瞬意味が分からず首を傾げる。
「自分の身体をご覧ください」
（何を言って？）
男の言葉が理解できない。それでも流されるように自身の身体を見る。
「なっ」
瞬間、思わず声を上げることとなってしまった。
理由は単純だ。自分の身体がこれまでとは違うも

著者近況　皆様こんにちは上田ながのです！　今回はTSってことで……って、TS！？　あ！　そういえば『女体化捜査官イブキ 屈辱と快楽の強制性転換』ってTS本が発売してるらしいですよ！　なんてこったい！　皆、よろしくな！

気高い騎士の矜持も
仲間の欲望と女体快楽に
狂わされていく――
牝化騎士オルガ
～呪われし大淫婦～
小説／089タロー
NOVEL
挿絵／孫陽州
ILLUSTRATION

世界とは神々が指し合う盤に過ぎず――そう語ったのは果たして誰なのか。

今となっては判じ得ないが、各々神を奉ずる者同士が相争う事だけは確かだった。

法を司る正の神、至高神。法を否とする欲の神、邪神たち。それら奉ずる者同士が相対するのは世の常で、人の世において法が尊ばれるのもまた事実。

そして今も邪神奉じる背徳者どもと、それを打ち倒さんとする騎士たちとの戦いがあった。

※

「はあああっ！」

深き森の奥に聳え立つ城内にて、甲冑姿の騎士たちによる鬨の声が木霊していた。

「デーモンなんざ使役しやがって、まともじゃねえな邪教ってのは！」

「女子供を攫う不届き者です、当然でしょう！」

体躯の良い美丈夫と小柄な年若い少年が、ローブ姿の邪教徒どもを剣にて斬りながら城内で毒づく。

「団長、ここはオレたちが。団長は先へ！」

戦斧を振り回す見上げるほどの巨漢の騎士が、柔和な顔立ちに鬼気迫るものを浮かべて促す。

応、と頷き城の中心部に向け駆けるのは、白銀の甲冑に身を包む一人の若く精悍な男だった。

「正教騎士団推参！　法に仇成す邪教徒ども、この団長オルガが直々に成敗する！」

悪魔ともども邪教徒を斬り捨て、マントを翻し、空を頂く吹き抜けの大広間へと辿り着く。

その男の名はあまりに有名だった。至高神の教会が見出した文武に秀でし正教騎士の長。オルグレアド・グルスタイン、通称オルガ。生まれも実績も遜色無く、法の番人、聖騎士とも呼ばれる武人だった。

「貴様が教祖ルキウスだな。邪欲を説き人心を惑わせ悪魔の使役すら厭わぬ所業、これにて終わりだ！」

オルガが剣を構えた先には、石像を配した祭壇に佇む黒い法衣の老人が一人。教祖ルキウス。欲の神を奉じ世に堕落と災いを振りまく悪しき背徳者だ。

「忌々しき正教騎士団、法などに傅く至高神の傀儡めが。よくもここまで来られたものだ」

我が神への奉仕と祈りもこれまでか。ルキウスはそう呟き、最後に一矢報いんと石像に命じた。

「やれ！　あの者の喉笛を噛みちぎるがよい！」

石像は羽根を広げ飛翔し飛びかかってくる。ガーゴイルと呼ばれる有翼の人型悪魔だ。

しかしオルガはフッと笑い、石の肌など物ともせず手にする得物で見事に両断した。

目を見開く老人の胸板に、その切っ先が真っ直ぐ突き刺さる。

「終わりだルキウス。邪悪な神もろとも滅びろ！」

「さすが、だ……人の身で悪魔をも容易くとは……」

ルキウスはごぼりと血を吐きながらも、震える指先で奇怪な印を切った。

「しかし贄は奉じられた。そなたを……そなたらを呪う我が神の御力が……」

「何？　ルキウス、貴様何を!?」

「人の欲深さと業をその身にしかと刻むがよい！」

広間に眩い光が広がり辺りを白く塗り潰していく。

「な、なんだ、身体が燃えるように――うおおっ!?」

「我が神、欲と快楽と淫婦の神エロス・ディモスよ、この者に肉欲と堕落の呪いあれ……！」

自らを贄とし何かの術を行使したのか。人の扱う術とはおしなべて世の理に反する魔道、忌むべき力である事に違いはない。

が、しかし。ルキウスが行使した技は、もはや術などという次元では無かった。

『業深き我が僕よ。汝が遺恨、確かに聞き届けてやろうぞ』

「おお……我が神よ……！」

なっ!?　とオルガは驚愕し目を剥いた。

今際の際と見えるルキウスの背後に、黒い巨大な幻影が煙のように広がったのだ。

「邪神が人に応えただと、そんな事が……!?」

『数多の贄を捧げ業にまみれし者。汚れしその身は我が祝福を得るに足る。――法の神に仕えし者よ、この者の恨みと人の業欲をその身に受けるがよい』

「なんだ、胸が――窮屈に――尻も、うぐ……!?」

――グウッ、ミチミチミチィ……！

唐突に起きた我が身の異変にオルガは剣を手放す。鎧の内側に違和を覚え、それが急激に膨張していく。

「き、キツい、胸と腰がっ――身体が、内臓が、肌が、喉が、おかしくなる、なんだこれはっ……！」

『これがそなたらの欲の形か。いかにも人らしきものよ。どれ、せっかくの美貌に無骨な鎧では詮無かろう。少し手心を加えてやろうぞ』

幻影が指先と思しきものを白銀の鎧に触れてくる。重い鎧の質感が減り胸腰の窮屈さがすっと和らぐ。汗ばんでいた肩や胸元に急に外の空気を感じる。

「ふ、フハハ、呪いは成就した……そなたらが忌む汚れし欲を存分にその身に浴びるがよい……！」

「ルキウス、何をした応えろ！　――うおおおっ!?」

落雷にも似た強烈な電流が全身を駆け巡った。肉が焼かれ自分が消えていく、否――まるで細胞のひとつひとつが別の存在にすり替わるような――。

がくりと膝をつき床に倒れ伏す瞬間。埋もれるほどに長く伸びた自身の髪に奇妙なものを覚えながら、オルガは目を閉じ意識を手放していった。

※

「……ぅ……ここ、は……」

剣撃の音も失せ静まり返った城内の大広間で、オルガは目を開け、頭を振りながら身を起こした。

「まだ城内……戦闘は終わった、のか……？」

CONTENTS

official web site http://ktcom.jp/2d/

2019 8 Volume.107

ドリームマガジン

KTC KILL TIME COMMUNICATION PRESENTS 2D DREAM MAGAZINE VOLUME.107 [目次]

[表紙／ピンナップ] **孫陽州**

こんにちは、3度目の表紙になります。令和初のニジマガの表紙を描かせていただいて光栄です。ピンナップの「ぽて腹」はカラーで描いたの初めてなんでエロく描けてればいいなぁと思います。

[ピンナップ] **孫陽州／ミサカ12003／sage・ジョー／みれい／ボリス／うるし原智志**

●カラーコンテンツ

◎大好評! 応募者全員サービス……4
◎にじこちゃんのおすすめソフト情報局……26
◎二次元ドリームノベルズお薦め新刊紹介……32
◎二次元ドリーム文庫お薦め新刊紹介……33

●インフォメーション

◎バックナンバー販売のご案内……162
◎二次元ドリーム文庫、ノベルズ先取り情報……245
◎電子書籍限定小説情報……285
◎にじこちゃん放送局……294
◎アンケートコーナー……296
◎二次元シリーズ発売予定表……297
◎奥付……298

●コラム

◎二次元GスポットXtasy　夢崎……232
◎官能小説執筆汁まみれ　～作家のココロ～　筑摩十幸……234
◎ちゆ12歳のひとりエッチ　ちゆ……235
◎美少女コミック雑誌のゲンバ　稀見理都……236
◎にゃるらのブログ出張版……242

●連載小説 adult serial novels

sin光臨天使エンシェル・レナFD THE NOVEL 最終回
[小説]黒井弘騎　[挿絵]三色網戸。[原作]Triangle……36

変幻装姫シャインミラージュ外伝 絶望のバイオレンス編 最終回
[小説]でぃふぃーと　[挿絵]高浜太郎……118

ネトラレ異世界転移 身体を差し出す少女騎士
[小説]上田ながの　[挿絵]弥弛……148

●読み切り小説 adult complete novels

女体化士官クレイン ～雌犬に成り下がった軍将校～ カラー小説
[小説]上田ながの　[挿絵]ミサカ12003……6

格闘家カイル、女体化陵辱 ～性の尊厳を徹底蹂躙～ カラー小説
[小説]大角やぎ　[挿絵]sage・ジョー……10

牝化騎士オルガ ～呪われし大淫婦～ カラー小説
[小説]089タロー　[挿絵]孫陽州……14

孕魔王子 ～牝と相成りて魔を宿す英傑～
[小説]089タロー　[挿絵]三星遥……82

聖魔天姫アイリスフィア 魔の隷姫に堕ちるTSヒロイン
[小説]き一子　[挿絵]綾枷ちよこ……101

異世界転生で俺つえーのはずが、イケメントロルと子作りな件
[小説]狩野景　[挿絵]爺わら……132

転性騎士シオン ～性奴隷に堕つ～ カラー小説
[小説]千夜詠　[挿絵]みかん。……163

地球警備隊ツイン・スター 不可逆のTS孕ませ陵辱
[小説]木森山水道　[挿絵]きばすけ……191

ゲーム世界にTS転移 エロ装備で悶える少女
[小説]磯貝武連　[挿絵]かん奈……213

女体化聖騎士クリス 身代わり騎士は孕んで堕ちる
[小説]淡海翁人　[挿絵]むらさき朱……246

●漫画 adult comics

レディース特攻隊長 翔子ちゃん
[漫画]ぱふぇ……61

女体化の罠に堕ちる魔法剣士
[漫画]ナギヤマスギ……175

ツンデレ・クエスト Vol.8 注文が多いモンスター!?
[漫画]嘉納あいら……228

聖天使ユミエル カオティックロンド
[漫画]白う～凪い　[原作]黒井弘騎……263

●特別企画 special program

今号は **性転換孕ませ特集**
……81

絶対なる運命に立ち向かう天使を
恥辱のエナジードレインが襲う!!
sin 光臨天使
エンシェル・レナFD
—FACE THE DESTINY—
THE NOVEL
最終話 FACE THE DESTINY
原作PCゲーム
『sin光臨天使エンシェル・レナFD』も好評発売中!
小説 NOVEL／黒井弘騎
挿絵 ILLUSTRATION／三色網戸。
原作 ORIGINAL／Triangle

「はぁ……なんだこの展開……」
エリカさんとアリシアの華麗な逆転劇を目の前に、ルシフェル・レナは、まるで無感情に呟きました。
さもつまらなさそうに……けれどすぐさま、飢えた獣のように、クックッと喉を鳴らします。
「よりにもよって三下のクソ雑魚が大逆転の鍵だとか……ククッ！　これが二次元エンドってやつか？　なかなか笑えるなァ、おもしれーよ。だが……」
この世界に来て、初めて。
ルシフェル・レナは玉座から立ち上がりました。
「こんな展開、もう見飽きてるんだよ！　絶体絶命のピンチから絆の力で大逆転？　そうだな、それがお前ら正義の天使の十八番だ。だがわたしはここにいる……そんな力など、悪の前では無力なんだよ！」
抱いていたクーラちゃんをその場に投げ捨て、代わりに巨大な鎌を手に取るルシフェル・レナ。それだけで凄まじいプレッシャーが吹き荒れて……わたしは、その場に倒れ込んでしまいそうになりました。
「レナ……レナ。大丈夫……大丈夫、だから……」

登場人物紹介

朋衛玲奈（エンシェル・レナ）
優しく純真、控えめで内向的な優等生。戦うことは嫌いだが大切なモノを守るために光臨天使となった。

エリカ・ラ・エティエンヌ
今は亡きエティエンヌ王国の王女。光の精霊を武装し、身の丈を超える長剣を優雅に操る。

アリシア・ヘリオゼネス（莉愛）
エリカの王国に仕える騎士。闇と復讐の武装精霊を操り、高い戦闘能力を持つ。

クーラ
マテリオネットと呼ばれる自律人工生命体。レナを救うため、あらゆる世界線を移動してきた。

坂下美樹、葉山つかさ
快活な美樹と優等生タイプのつかさ。玲奈の大切な親友でクラスメイトの少女たち。

前回のあらすじ
魔導生体兵器と化した親友の美樹とつかさを救ったエンシェル・レナは、魔力を振り絞って首魁ルシフェル・レナの居城へとたどり着く。だが、圧倒的邪悪によってクーラらとともに陵辱されてしまい……。

「ええ。ここはわたくしたちに任せなさいな！」
そんなわたしを庇うように、エリカさんとアリシアが立ちはだかります。その背中はすごく頼もしくて、格好良くて……けれど、わたしにはわかります。
本当は、二人だって、もう……！
「……レナは優しい。でも……わたしたちにも意地がある。いつまでも守られてばかりじゃない……助けられてばかりじゃない。わたしたちも、戦う！」
「レナ。これはわたくしたちが選んだ運命……貴方は貴方の成すべきことを成しなさい！」
二人は恐れることなく、魔王の元へ向かいます。
その姿は……ああ。なんて凛々しくて……美しいの。二人は……本当の、天使です……！
「調子に乗るなよ雑魚ども！　教えてやるよ、ご都合主義の逆転劇なんてありえない。お前たちの未来にあるのは、不可避の敗北と絶望だけだとな！」
吐き捨てるように叫び、ルシフェル・レナは玉座からこちらに飛びかかってきました。全身から爆発的な魔力を噴き出しての、凄まじいスピードでの突進……漆黒の残像しか捉えられません！
「ッ!?　は、速い……っぐ、あああああっ！」
ガギィィンッ！　それでも咄嗟に構えたエリカさんのリーネシャヘルに、ルシフェル・レナの大鎌が叩きつけられます。凄まじいパワーに圧倒され、エリカさんはそのまま数メートルも後ずさりました。
「ハハ！　大した勇気だ、よく逃げずに構えたな、そうでなければ今頃貴様の胴体は真っ二つだったぞ。だがまぁ……所詮は時間の問題だがなァ！」
「ぐ、うっ!?　く、ああああああっ！」
ギィ、ギィィンッ！　ガギィィンッ！　技量も何もない、ただ暴力的なまでの魔力を持って振るわれる死神の連撃。身長よりも巨大な鎌の邪精霊を、ルシフェル・レナは軽々と振りまくります。嵐のような猛攻に、エリカさんは防戦一方です……！

「ひ、姫様ッ！　この……殺す、殺す殺す！」
主の窮地に、アリシアが駆け出します。魔王の背後から、容赦なく双剣で斬りかかりますが……！
「なぁにが殺すだ、殺意がまるで足りてねえんだよ！　殺すってのはな……こうやるんだよッ！」
ブォォンッ！　横向きに構えられた死神の鎌が、弧を描くように周囲を薙ぎ払います。周囲の空間ごと切り裂くようなその斬撃に、アリシアも、そしてエリカさんもまとめて吹き飛ばされました。
「あっ、っぐ！」「ア、アリシア……ぐあああ！」
二人の武装精霊には罅が入り、天使の衣はズタズタに引き裂かれました。それでもなお二人は倒れず、それどころか自ら魔王へと迫っていきます！
「エ、エリカさん……アリシア！　もういい……無理だよ、逃げて……！」
「レナ！　言ったはずですわ、貴方は貴方の成すべきことをしろと！」
「急いで……急いでレナ。長くは持たない……！」
わたしは咄嗟に叫びましたが……その声をかき消すように、二人は叫びました。
（わたしの……成すべき……こと……！）
そして、その熱い想いに応えるべく、わたしは最後の力を振り絞ります。
二人が必死で時間を稼いでくれている間にすべきこと……わたしが今、ここにいる理由……！
「クーラちゃんっ！」
わたしは、主なき玉座に向けて駆け出しました。
二人を捨て置くのは、胸が引き裂かれる思いです。
でも……すべての魔力を使い切った今のわたしに出来ることなんて……悔しいけど、何もありません。
けれど、わたしには……光臨天使エンシェル・レナには、まだ最後の切り札があるのです……！
「レナ……さん……！」
「ああ……クーラちゃん……！」

あれだけ執心しておきながら、いざとなればボロ雑巾のように床に投げ捨てられていたクーラちゃんを、わたしはそっと抱き起こしました。
ボロボロのドレスに、白濁まみれの肌……女のコの大事な所は閉じる事も出来ず、今も白濁を逆流させ続けています。
一体どれほどの陵辱を受け続けていたのか……考えるだけでも、胸が引き裂かれそうなほどです。
でも、それでも……クーラちゃんは……。
「レナさん……ああ、申し訳ありません。わたしが不甲斐ないばかりに、レナさんをこんな目に……」
「！　クーラちゃん……そんな、そんなの……！」
これほどまでに嬲られて、なおわたしのことを想ってくれるクーラちゃん。その忠誠と想いに、わたしは、思わず涙ぐんでしまいます。
「ああ……レナさん……優しく気高い、わたしのレナさん。わたしはずっと貴方のことを……ああ。貴方さえいれば、クーラは、どうなっても……」
「クーラちゃん……ううん。そんなこと言わないで……わたしは、クーラちゃんがいるから……クーラちゃんを助けるためだったら、わたしは……！」
「……ああ、レナさん。どこまでも優しく気高い、わたしのマスター。貴方は、本当の天使です……」
「クーラちゃん……」
ぐったりとしたままのマテリオネットを、わたしはそっと抱き上げました。
わたしよりもずっと小さくて華奢な、お人形さんのように可憐な少女。今すぐにでも消え去ってしまいそうな……そんな弱々しさを感じてしまいます。
なのに……彼女は……わたしのために……。
「そんな貴方だからこそ……わたしのすべてを捧げます。わたしに残された……この時のために必死で紡ぎあげた魔力を……どうか、受け取って……」
「そんな……クーラちゃん。ダメだよ、こんな弱りきった状態で、そんなことをしたら……」
彼女が成そうとしていることは、わかります。
わたしだって、それを最後の希望として……今も必死で戦ってくれている二人を助け、ルシフェル・レナに打ち勝つための手段として考えていました。
でも……こんな状態のクーラちゃんに無理をさせるなんて……なけなしの魔力を、貰うなんて……！
「レナさん。先程も言いました……わたしは貴方のためならどうなってもいい、と。けれど本当は……この魂なき機械人形にも、望みがあるのです……」
抱き合ったわたしに震える手を伸ばし、クーラちゃんは頭を上げます。そして、小さく可憐な唇を、わたしの顔に近づけてきました……。
「レナさん……わたしの愛する、優しく気高き光臨天使。わたしのマスター……わたしのレナさん。わたしは貴方の役に立ちたい……貴方の望む未来のため、わたしのすべてを使って欲しいのです……！」
「クーラ……ちゃん……」
伝わってきます……クーラちゃんの想い……愛。
光臨天使とマテリオネット……主人と従者というだけではありません。
わたしとクーラちゃんは、お互いに理解し合い、互いの意志を尊重し合って、愛し合っていて……。
だからわたしの望みは、彼女も理解しているし……クーラちゃんの望みは、わたしの望みなのです。
「クーラちゃん……っ」「レナさん……んっ」
どちらからでもなく、どちらもが望んで。
わたしたちは、キスをしました。
重ね合った唇を通して、クーラちゃんの想いが、力が……わたしの中に、流れ込んできます。
「んっ……クーラ……ちゃん……ん、っちゅ……」
「レナさん……はぁ、ん。もっと……強く……ん」
わたしは、ぎゅっとクーラちゃんを抱きしめました。強く、けれど優しく……愛を交わし合いました。
そして……わたしは……。
「……ありがとう、クーラちゃん。わたし、これで戦える。わたしの我儘を、叶えられるよ……」
「レナさん……信じています。わたしの天使は、光と希望に溢れた未来を、切り開いてくれると……」
「うん……一緒に戦おうクーラちゃん。わたしは……わたしたちは負けない。どんな過酷な運命にも、強大な邪悪にも……もう一人のわたし自身にも！」
託されたのは、魔力だけではありません。
それは未来……希望を信じ、運命を切り開く力。
体中に満ちるその力を込め、わたしは、運命のカードを手にしました！
「お願いエンシェリウムカード……。この祈りが届くなら……わたしの願いは、ただ一つ……」
そして、わたしは願います。
わたしの……朋衛玲奈の、唯一つの願い。
わたしが光臨天使になったのは、偶然かもしれません。わたしは、自分が望む望まざるに拘わらず、光臨天使エンシェル・レナになったのです。
けれどわたしは……戦いの中で見つけたの。
わたしが本当にしたいこと……わたしだけの願い。
それは……！
「罪なきものを救うため……愛するものを守るため……わたしに、あなたのすべてを授けて……」
お父さん、お母さん……美樹ちゃん、つかさちゃん。かけがえのない両親と親友……。
アリシアにエリカさん……クーラちゃん……。
わたしには、大切な人たちが……愛する人たちがいます。わたしは、それを守りたい……わたし自身はどれだけ傷ついても構いません。だから……！
「ラエリスの炉を開き、すべてを救済する、武装天使の真なる力を……」
わたしは願います、欲します。
武装天使の究極の力……けれどそれは、奪い、壊

著者近況　『光臨天使エンシェル・レナ』のノベライズを手がけさせていただいたのが14年前……それから新作『Sin 光臨天使エンシェル・レナ』の企画及びライター、そして今回の連載と、大好きなレナをどっぷり書かせて頂けて本当に幸せです！

すためのものではありません。
わたしが望むのは、愛するものを守り、救うための力……光臨天使の、真なる力と姿です！
「わたしを、理想の光臨天使に……エンシェル・レナに変えて……！」
わたしの心からの願い……いいえ魂に応え、エンシェリウムカードから力が溢れてきます。
超高次元に存在するラエリスの炉が開かれ、武装天使の純粋なる力……女神ラエリスの権能のすべてが、わたしの身体に宿っていくのがわかります。
「はぁ……んっ。ふ、あ……んっ……！」
駆け巡る力の奔流……ゾクゾクするほどの力の感覚に、わたしは思わず喘ぎを零してしまいました。
文字通り、神にも等しい圧倒的な力……少しでも気を抜けば、飲まれてしまいそうなぐらいです。
でも……わたしは……！
「レナさん……！」「…クーラちゃん！」
わたしは一人じゃない……クーラちゃんがいます。
光臨天使をサポートするマテリオネットとして、残された力すべてでわたしをバックアップしてくれる……ううん。大切な、愛し合う者同士だから、支え合えるの……限界を超え、運命を超えられるの！
「うん……っふ、ん……あ……！」
女神ラエリスの力が、わたしの身体を包み込んでいきます。まばゆい輝きは、新たな光臨天使のコスチュームへ……わたしの肢体をぴったりと包み込む、神々しくも華麗なドレスへと変じていくのです。
真珠を溶かしたような純白の薄衣は、わたしの肌に隙間なく吸い付いて……その極上の着用感は、まるで天使の羽根に包まれているようです。ふわりと広がった裾やスカートは天女の羽衣のように幽玄で、けれども胸の谷間を顕に晒すセパレートのデザインや、股間に食い込むレオタードの切れ込みはすごく大胆……でも、少しも恥ずかしくなんてありません。
むしろ逆です……これはまさに、神話世界の女神が纏う神聖な衣。光り輝く聖なるコスチュームに包まれて、わたしはまるで女神に生まれ変わったかのような、厳かな神性さえ感じていました。
神聖なる魔力が伝播し、波打つ長髪が神々しい金色に染まっていきます。幾重にも重なった翼のような髪飾りが金髪を彩り、ついにわたしは新たな姿へと……武装天使ラエリスの真なる力を受け継いだ、究極最強、理想の光臨天使への変身を終えます。
「光臨天使エンシェル・レナ、ラエリスフォーム！乙女の想いと祈りを胸に、今ここに羽ばたきます！」
ラエリスの炉から直結した魔力の奔流が、無数の翼の形をとって羽ばたきます。光臨天使エンシェル・レナ・ラエリスフォーム……わたしは最後にして最強の、新たなる天使の御名を告げました。
「クーラちゃん……ありがとう。クーラちゃんのおかげで、わたし、戦えるの……みんなを守るために、このラエリスフォームに、なれたの……」
これまでの戦いと陵辱で、光臨天使からはすべての魔力が失われました。もう、マギウスフォームやエイジスフォームに変身することは出来ません。
でも、これなら……このラエリスフォームなら、ルシフェル・レナにだって！
「ククク！　それがラエリスフォーム……武装天使の真なる姿か。なるほど美しい……天使気取りのわたしにはピッタリだなァエンシェル・レナ」
「ルシフェル・レナ……！」
巨大な鎌を構え、ルシフェル・レナが近づいてきます。地面にはエリカさんとアリシアが、見るも無残な姿で横たわっていました……。命に別状はないようですが、こんなにまで痛めつけるなんて……！
「わたしには、貴方を理解できません。誰かの大切な人を、傷つけ、壊し、奪い、犯す……そんなことに喜びを見出すなんて、わたしには理解できません」
わたしは、静かに語りました。怒りに身を震わせながら……その感情を、勇気に変えながら。
「貴方は言いました。わたしは貴方だと……わたし自身だと。確かに、この強大な力に溺れてしまったら……貴方のようになってしまうかもしれません」
武装天使ラエリスの力……使い方を間違えたら何もかもを壊してしまうぐらいの、怖いぐらいに強大な力を、しかしわたしは自分の意志で制御します。
「けれど……わたしは、貴方とは違います！　わたしには守りたい人が、救いたい人が、愛する人がいるんです。わたしは……光臨天使エンシェル・レナは、そんな大切な人たちのために戦うの！」
そうです……これは、大切なものを守るための力。愛するものを守り、救うための戦いなのです！
「ヒヒ、お笑いだな。お前の大切なものはもう全部ぐちゃぐちゃに壊してやったぜ？　エリカもアリシアも穴という穴を犯されまくってガバガバだ。お前の大事な魔法人形だって……ヒヒ！　もうわたしのことが忘れられない身体になってるよ。これからはお前とセックスしても全然満足できねーだろうなぁ、子宮の奥までメロメロだったからなギャハハハ！」
「……ルシフェル・レナァ！」
わたしは、叫びました。膨大な魔力を怒りのままに噴射し、身体が浮き上がるほどのパワーと速度で、ルシフェル・レナに挑みます！
「貴方は……貴方だけは許せません！　超次元の魔王ルシフェル・レナ……貴方の忌まわしき魂……浄化します。わたしの手で、永遠に！」
「おお、来いよ！　そしてわたしを愉しませろ……それがお前の義務だ、もう一人の朋衛玲奈！」
身の丈を超えるほどに巨大な大鎌を、軽々しく構えてみせるルシフェル・レナ。その禍々しい造形からは、恐ろしいほどの魔力を感じます。
「こいつは邪霊王ガルヴァ・メルガ……すべてを喰

著者近刊 『聖天使ユミエル Ⅰ～Ⅳ』『ディバインハートマキナ ～反逆の女神～』『エンジェルストライカーズ』『超昂閃忍ハルカ 堕ちたる上弦 淫辱の刃』『鮮血の聖女エクレア 聖なる執行者』『光臨天使エンシェルレナ 淫辱の螺旋』ほか 好評発売中！

らい滅ぼす終焉の闇！　ラエリスの力を使いこなして調子に乗ってるようだが……教えてやるよ。この世界には、お前の思いもよらない力があるってな！」
ルシフェル・レナが操る邪悪なる武装精霊……イーヴルの王。その威力は未知数ですが、わたしは、それを恐れることも、引くこともしません。
なぜなら、わたしにもいるからです。
わたしと一緒に戦い続けてくれた、正義を愛する武装精霊……その力を束ねた、最強の精霊王が！
「邪悪を滅ぼし、正義を導く！　これこそは、最強最後の武装精霊！」
剣の精霊ローエングリン、盾の精霊ハルグリッター。槍の精霊、弓の精霊、炎氷雷の上位精霊――光臨天使に仕えるすべての武装精霊たちが、その力を束ね、一つの巨大な武器として融合します。
わたしの身体よりも大きいぐらいの、超巨大な一つの神器――神々しい刃を備えた厳かなシルエットは超古代の祭器のようでもあり、それでいながら美しく機能的な超未来の兵器のようでもあります。
「精霊王アルファメサイア！　その神威を、我が手に！」
これこそすべての正義を結集した、最強最後の武装精霊……精霊王アルファメサイア。
神にも等しい権能を持つラエリスフォームだからこそ扱える、文字通りの切り札です！
「いきます……ルシフェル・レナ！」
クーラちゃんから魔力を供給してもらったとは言え、わたしに残された力は僅か……強大すぎるラエリスフォームを扱える時間は限られています。
だったら最初から全力全開……一気に決めます！
「はあああああ――――！」
残されたすべての魔力を解き放ち、一気に斬りかかります。聖なる魔力で神々しく輝く刃を、魔王めがけて全力で振り下ろします！
「ククッ！　馬鹿正直に正面から挑んでくるか。わたしらしいな……受けてやるよ、ラアァァッ！」
それを前にして、ルシフェル・レナはまるで余裕を崩しませんでした。むしろ愉しげに相貌を崩すと、巨大な鎌を力任せに振り上げます。
精霊王アルファメサイアと邪霊王ガルヴァ・メルガ――光と闇、最強の武装精霊同士が、真正面からぶつかりあいます！
「ッヒャアアアアアァァッ！」
「っく……う、あああああ――――！」
魔力と魔力が、質量と質量が……圧倒的な力と力とが衝突し、嵐のような衝撃が巻き起こります。
空間そのものがビキビキと震え、魔城の城壁が崩壊していきます。凄まじい破壊の坩堝の只中で、しかしわたしは、震える腕にいっそう力を込めます！
（負けない……絶対に、負けたりしない……！）
エリカさんが、アリシアが、そしてクーラちゃんが作ってくれた、最後のチャンスなのです。
辛くて痛くて苦しくて、心も体も壊れてしまいそう……けど、そんなの関係ありません！
（わたしはどうなったっていい……だから！）
みんなを守るため……愛する人を救うため……。
ここでこの身体が砕け散ったって構わない！
この悪魔は！　ここで！　わたしが倒します！
「ううぅ……あああ！　っあああああ――――！」
残されたすべての力を……いえ魂までもを絞り出して、わたしは叫びました。わたしの覚悟に応え、精霊王アルファメサイアがさらなる輝きを放ちます！
「いきます……ルシフェル・レナッ！」
「くく、なるほど大した力だ！　いいぜ来いよエンシェル・レナ……わたしを最後まで愉しませろ！」
ニタァ、と相貌を崩し、狂気の笑みを浮かべるルシフェル・レナ。邪霊王ガルヴァ・メルガが魔力を増し、暗黒の魔力が波動となって溢れ出します！
「はあああああっ！　フォーチュン・クロス！」
「クヒヒヒヒッ！　フォーチュン・ディマイズ！」
運命を開く聖なる光と、運命を閉ざす終焉の闇。
究極絶後の必殺技同士が、真正面からぶつかり合い――そして。
「クク、ハハハッ！　わたしの勝ちだ光臨天使！」
「っく!?　う、あ、あああああっ!?」
（お、押し負ける!?　なんて力なの……!?）
互いに互角に見えた打ち合いは、徐々に、しかし確実に、ルシフェル・レナが押しつつありました。
破滅の闇が希望の光を喰らい、蝕み、すべてを絶望で覆い尽くしていきます。
「思い知れ、これが『力』だ！　運命を切り開くことは出来ない。貴様の未来にあるのは絶望だけだ！」
「くぅぅっ……そ、そうかも、しれません……。でも、それでも……わたしは……！」
勝ち誇るルシフェル・レナ。彼女が積み上げてきた『力』はまさに圧倒的……わたし一人では、簡単に捻り潰されてしまっていたでしょう。
でもわたしは……光臨天使エンシェル・レナは！
「わたしは諦めない……もう二度と、残酷な運命に屈したりしない！」
わたしの辿るべき運命は、あまりに苛烈で、残酷で……だからクーラちゃんはそんなわたしを救おうと、一度は間違った道を選ぼうとしました。
けれどその時、わたしは決めたのです。
そこまでしてわたしのことを想ってくれるクーラちゃんを……愛する人を救うためにも……わたしは二度と負けない、運命に屈したりしないと！
「ルシフェル・レナ！　確かにわたしは貴方より弱い……でもわたしは、一人じゃないから……！」
正義を愛する武装天使たちとの絆。
エリカさんとアリシアから託された未来。

も――っ 俊くんの悪い癖がまた始まったよ
なあなあ良いだろ♪
い…やあ放して！
誰か…助けて
まーたオンナ増やす気い？
クラァ！
うごおあ あッッッ!!
男の中の男には可愛い秘密アリ!?
女ァ相手にハンパなコトしてンじゃねエぞ！
文句あンならこの特攻隊長藤沢翔様が聞いてやるぜ
テメ！
俊くんに何してくれてんだ!! コ…
ギリ
ロッ
えっ あ
スミマセン…
あっ ありが…
礼なんかいらねーよ
最新単行本『堕淫奴隷』好評発売中!!
レディース特攻隊長
翔子ちゃん
漫画 COMIC ぱふえ

くそっ！
やっぱりか
たぷん
ふ…
た
ったく なんて体質だよコレ
女に触られたってだけでこうなっちまう…
こんなこと誰かに知られるわけには…
くそー あの野郎 俊くんの敵討ちだ！
もういいってば…
でもあんなの私らじゃ無理
なんか弱味でもあればな
ん？
あいつって…
キピーン

放せっ
コラァ!!
クソッ
さてどうしてやろうか？
俊くん動画撮るからヤッちゃって
おいおい女ァ殴る趣味は無ェよ
でもこのまま許すわけにはいかねー
お前らヤッてやれ
え――またあ？
マジかよ
まさかこの女が本当にあの翔とかいう奴とはねぇ…
そーいうの見るの好きなんだ？
何する気だコラ
おおいテメェら
ばっか女にヤラれた方が人に言いにくいだろ
こんな体だからって舐めんなよ
おおう
じゃ俊くんはアッチで♡

REC
おお――めっちゃデカいわ
こいつがあればもう私らに逆らえないでしょー
翔子ちゃんの恥ずかしい姿撮ってやるよ
ちょっテメコラ何揉んでんだよ！
むにっ
むにゅっ
REC
俺は男だぞ裸なんぞ…
バカ！
にゅむん
もにっ
ふにっ
くっ！やめ…
変態!!
男だって恥ずかしい姿バラまかれたら困るでしょ？
まあ女になる体質ってだけで大変な秘密だろうけど
むにゅっ

ひィうぅ♡
あらら 可愛い 悲鳴♡
うっ うるせえ 驚いた だけだッ
とか言って めっちゃ感じ てるじゃん
あ もしかして 揉まれたこと ないんだ？
そっか 独りだけだと 変身できない もんね
ふ…ぎけ ンなっ
面白くなって きたぞ♪ 女の楽しさ 教えてあげる わね♡
くっ…ン くそぉ
REC

ふ…くすぐっ
うう〜〜〜〜♡
ふるふる
く…そ
なんだ
これぇ♡
そうそう♪
みんな最初は
そんな感じ方
なのよね
っと！
はッ
ビッ
ビッ
ビッ
ブ〜〜〜〜

な…んだ今の…？す…ご♡
ぺろ
ぺろ
ぁぁ!?
よーしじゃあ確かめようぜー♪
アハハハマジ!?もうイッたのお？
うる…さいイッてなんかねェよぉ
あーらら濡れ濡れ♡
テ…見んな!!
うわ！キレー新品だ
お…おう…
うわぁ！開くなッ
ぱっ
っつーか開くのかコレ
REC
ムリ

さわ…んなぁッ！
それ…ッ
はあっ
やめろテ…メ
ああッ
舌ぁ
あああ♡
ゾクゾクすげ…ぇ
ほわぁぁあ…あ♡
チンポっなんだ!?
ふーん男にはココチンポって感覚なの？
これがクリトリスなのよ♡

孕魔王子
ようまおうじ
～牝と相成りて魔を宿す英傑～
気高きエルフの王子を穢す《変質》
孕み袋に叩き付けられる邪精液で
懐妊牝堕ち!?
小説／089タロー
NOVEL
挿絵／三星遥
ILLUSTRATION

かつて世界は秩序と混沌が入り乱れていた。
人やエルフ、ドワーフなどが共に暮らす表の世界、現界。魑魅魍魎たる魔族らの巣食う常闇の裏世界、魔界。
相容れぬ両陣営が永きにわたり続けた争いは、この両界の門を封ずるという形で幕を閉じた。
恐るべき魔族らの侵攻を止めるには封鎖以外に策はなく、されど門の巨大さゆえに通さぬのは力ある魔族のみという制約を残した。
網を抜けて現界に現れる魔界より出でし下位の魔族。それらを水際で防ぎ二度と侵攻がなきよう、封門は霊格高きエルフらを守り人とし、監視され続けてきた。
封門が閉じられ一時の平穏が訪れてから、はや二千年あまり。
その均衡に今、不穏な影が立ちこめつつあった。
一人の王女が魔界へと連れ去られたのを発端として。

※

「とうとう会えたな魔神……この日をどれほど待ちわびたことか」
魔族を一太刀にて切り伏せた男が玉座に座る巨躯を睨む。
魔界の城内たるその場は汚れし瘴気に満ち満ちており、異形の魔族らが雄叫びと共に大勢押し寄せてきている。
闇の者ども。混沌の眷属。現界に仇成す悪しき魂を持つ存在。
連中と切り結び懸命に活路を開いてくれた一個小隊のエルフの戦士たち。
背後の同胞らに深い感謝の念を抱きながら、男――年若いエルフの青年は声高に言い放った。
「我が名はルーミル。５０年前お前が連れ去った我が国の王女エルローネが弟！」
金糸のごとき長い髪を後頭部で結わえた青年だった。歳の頃は１９０、人で言うならば二十歳直前といったところ。騎士装束に似た青い装いには輝く真の銀の鎧。エルフ族特有の長い両耳と日焼けを知らぬ白い肌、緑水晶を思わせる翡翠色の鮮やかな両瞳を持つ。
ややあどけなさを残す目元は今は激しい敵意を宿している。精霊の子孫たるエルフの者は男女問わず見目麗しい。彼はそれに輪をかけて眉目秀麗な顔立ちをしていた。
「忘れたとは言わさん魔神アエージュマ。今日こそ我が姉を返してもらう！」
その者、ルーミルは背に帯びた立派な強弓を一挙動で構え、矢を放った。
力と技と練度と才能、すべてを兼ね備えた一射である。数々の魔族をも射貫いてきたそれは、まさに達人技、英傑の一撃と呼ぶに相応しい。
しかし玉座に座る城の主は、羽虫でも払う手ぶりでもって飛来するその矢を打ち払う。
「忘れるはずもない。エルフの王族、若き女。部下に命じ連れてこさせたのは紛れもなく我だからな」
人に近しい外見の巨躯がクツクツと喉を震わせて笑う。
魔神アエージュマ。四柱と呼ばれ畏怖される四大魔族のうちの一柱。薄紫の肌に筋骨隆々たる牡型の肉体、美形と呼べる面表、各所に刺々しい意匠を持ち、長き尾のごとく黒髪を伸ばし、猛禽に似た逞しき両脚にて立つ者。
悠然と構えたその男の紅眼が、玉座の傍らに横たわる人影を指し示した。
「お前の姉はここに居るとも。息はある。今はな。フフ」
「姉上！　おのれ、よくも！」
遠目だろうと一目で分かる。膝まで届く金色の髪に笹の葉のごとき長い耳、しなやかな手足と豊かな胸腰、薄絹を幾重にも折り重ねた胸元もあらわな純白のドレス。王女エルローネ。エルフの国の姫君でありルーミルの何より大切な姉であった。
歯噛みするルーミルの脳裏に別離の瞬間がよみがえる。齢１４０という未だ子供であった自分を庇う形で姉は魔族らにその身を差し出したのだ。「大丈夫、姉様はいつだってそばにいるから」そう言って姉は別れ際まで微笑み続けた。母亡き子供にとって唯一母を感じる存在。母性溢れる温かな微笑み。それを取り戻さんとする意地が幼い王子を戦士へと育てた。今ここに立つのは姉への親愛に他ならない。
（姉上、今参ります！　必ずや救いだしてみせる！）
意識がないのか姉は力無く目を閉じたまま。遠目にも美しいその顔には憔悴の色こそ見えないものの、腕と足には枷が嵌められ虜囚であったのは明白だった。
「欲しければ力ずくで奪うことだな。勇猛なるエルフの王子よ」
「言うに及ばず！　いくぞ！」
なおも強弓を連射しながら矢のごとく玉座へと駆けだす。共に来てくれた背後の仲間たちも奮闘している。魔神の手勢を抑えてくれている。他には目をくれず魔神だけに注力する。
牽制を終え一足飛びにて肉薄すると、腰に帯びた黒曜石の剣撃を放つ。
それは指先で摘み取られ彼我の能力差を克明に示した。幾匹もの魔族を切り伏せた斬撃も長たる魔神には届かぬものだった。
「ふむ。悪くない。力を感じる。身に秘めし強い霊格を」
剣より伝わる霊的な力を魔神は確かに認め薄く笑った。ただの黒曜石ではない、真銀と同様ドワーフらが鍛えし自然と技術とが融和した業物だった。
「ルーミルと言ったか。男か。そうは見えん。姉に似て美しい顔をしている」
「黙れ！」
舞うように剣撃を重ねながらルーミルが怒声を放つ。
「なぜ姉を？　なにを企む？　守り人を狙ってのことか、封門を開けさせようとでもいうのか？」
「どう読む？　残念ながらあの女では荷が勝ちすぎたが……惜しいな、お前が男でなければこの場で……フフ」

「おのれ、姉上になにをしたッ!?」
何が面白いのか魔神は青年を眺め意味深な含み笑いを漏らす。品定めされているかに思えてルーミルは知らずぶるりと身震いする。
その魔神の表情に、不意に小さな波紋が走ったのは、続く剣撃がしたたかに手首を打った時だった。
「ヌ、やはり――その時は近いか……」
「もらったぞ魔神！　はあッ！」
魔神の剛腕が軋んだ瞬間をルーミルは見逃さなかった。切っ先を回し腕を搦め捕ると鋭く踏み込んで首筋を一閃、そのまま玉座の脇に回り蹲っていた人影を抱く。
「手応えはあった。滅びよ魔神、姉は返してもらう！」
理由は不明だが魔神は本調子でないかに見えた。初手に比べて明らかに反応が鈍かった。見れば皮膚のあちこちがひび割れ少しずつ剥げ落ちている様子だった。
巨躯がぐらりと傾くのを見て周辺の魔族らに動揺が走る。噴き出した血の青が石畳の床をまだらに濡らす。
致命には至らぬものの充分な痛手となったろう。ルーミルは小さく息を吐いてから抱えた姉を揺する。
「姉上、姉上！　ご無事ですか、私が、ルーミルが助けに来ました！」
「ん、んン……ぁ、ルー、ミ、ル……？」
「はい、私、いや俺です！　良かった、お怪我はありませんか？」
姉は瞼を震わせ目を開けると、弟の姿を認めて微笑んだ。
「ええ……ありがとうルーミル、わたくしの可愛い弟……」
頼りない仕草であったが間違いなく姉の微笑みだった。たおやかで母性的な、亡き母を思わせる慈愛の表情だ。
「よく、ここまで……顔も、身体も、立派になって……」
「50年経ってますから。姉上こそ一段と大人びて……」
場違いだと知りつつもルーミルは微かに頬を熱くした。
50年ぶりに目にした姉は前にも増して美しく思えた。元より柔らかな美貌を誇り身体つきも女性的だったが、なんと言うか、色香というものを帯びた気がする。エルフ伝来の姫衣装は谷間や脇があらわとなっており神秘的でありながら扇情的にも目に映った。
（っと、なにを考えてるんだ私は、今は戦闘中だぞ！）
無事な姉の姿を見たせいか気が緩んだのかもしれない。今はまだ早い。再会を喜ぶのは魔神を討ち果たし帰還してからだ。きっと父王も不安に駆られながら待ち焦がれていることだろう。
ルーミルは軽く首を振って立ち上がり、今一度剣を構え直す。
「――良い一撃だった。手傷を負ったのは久方ぶりだ。その女のように脆弱ではないと見える」
首から噴き出す青い鮮血を気にする様子もなく魔神は立ち上がっていた。
「よかろう。その腕に免じて姉は返してやろう。――連れ帰れるものならば、の話だが」
「言われずとも連れ帰る、貴様の素っ首叩き落としてな！」
剣に力を注ぎルーミルは必殺に備えた。もう猶予は無い。仲間たちにも消耗の色が濃い。魔神を討ち姉を連れて撤収する。それですべては終わるはず。我が身と状況ならばそれは可能であるはずだった。
が――今まさに踏み出そうとした瞬間。白い腕が首に回され気道が強く圧迫された。
「ッッ!?　な――なに、が……!?」
ルーミルは大きく動揺した。相手が誰かは即分かる。姉だ。背後からエルローネが首を絞めてきたのだ。
「どうしたのです姉上、一体……!?」
「惜しかったな、勇猛なるエルフよ。あと一手、及ばなかったようだ」
魔神は悠然と歩み来て、振り解くに解けない王子の額に掌を押し当てる。
「救いに来たつもりだろうが遅きに失した。長寿ゆえに緩やかな時の中でしか生きられぬ。エルフとは難儀だな」
「なに、を……貴様、姉上に一体……うッ……!?」
幻術と思しき魔の力が触れた額から流れ込んでくる。急激な睡魔になす術もなく意識と視界が混濁し始める。
「手傷は負わさぬとも。自ずから迷い込んだ霊格高き王族のエルフ。男であったのが少々手間だが逃す手はない」
「王子、ルーミルッ!?」
「どういうことだ、なんでエルローネ様が王子をッ!?」
仲間たちの悲痛な声。疲弊しきった一個小隊が懸命に救出せんと動く。
しかし退路を捨てる無謀な進軍は瞬く間に包囲戦を許し、一人、また一人と削り取られるように打ち倒され。
（みんな……駄目だ、逃げ……！）
戦術は崩れ勝機は去った。あと少し、王手寸前で。最後の指し手が他ならぬ姉であった事実が、薄れゆくルーミルの意識を最後まで苛んでいた。
「よくやった。褒美を取らそう」
「はぁぁ……ありがとうございます。アエージュマ様……」
どさりと倒れ伏す弟の横でエルフの王女は怨敵に向けて膝を付いた。

※

「ん、う……ここは……うっ……」
饐えた臭いのする冷えた牢獄の中、エルフの王子は小さく身震いし目を覚ました。
「……捕まった、のか……殺されもせず、一体なぜ……」
記憶の残滓にあるのは魔神に昏倒させられる瞬間だ。自分は敗れ、虜囚となった。仲間たちも無事である可能性は低い。無念と罪悪感が心身を冷たく打ち据えた。
だが不可解な事実が今は何より重要だった。あと一手というところで邪魔をしたのは姉だった。あれは姉だ、間違いない。だがなぜ？　裏切り？　まさか。魔神どもと結託するなど現界の

著者近況　今回は性転換ものを書かせていただきました。ご覧いただけると恐悦至極です。男が妊娠するドラマなるものを昔小耳に挟んだ気がします。時代を先取りした……のかな？

者としてあり得ない。
ふと気が付くと、鎧等はすべて奪い取られていた。身に纏うのは肩の膨らんだ青い長衣の騎士装束のみ。裾は膝下まであり、鎧の前垂れ無しだと、ズボンの表側が露出したスカート姿にも見えることだろう。
身を起こそうにも両手首が腰後ろで固められていて難しい。感触からして金属の枷だろう。足は自由だがもはや小剣すら満足に振るえまい。
「オ、起きたミたいダ。こいつ起きタ」
と、無力さに歯噛みしていた時である。鉄の戸が開き、ぶよぶよとした肌の巨漢、トロルが牢に入ってきた。
その背後から蟷螂に似た魔族も入ってきて、
「ジャア連レテクゾ。オイ、立テ」
長い髪を掴んで立たせると背を蹴りながら牢から出してきた。
当然ながらどうしようもなくルーミルは屈辱に耐えながら歩く。
どこへ連れていく気なのか。姉は無事なのか。仲間は。
考えながら進んでいくと見覚えのある広間に行き着いた。石畳と岩肌とで造られた溶岩に囲われた錆色の王の間。記憶に新しい敗戦の地だ。
「ッッ!?　な、なッ……!?」
悠然と玉座に構えていたのは言わずもがな魔神アエージュマ。他にも魔族が多数。大半は異形でトロルがマシに見える連中だ。
そしてルーミルを驚愕させたもの、それは。
「嫌ぁ離してッ、いぎッんづッ！」
「助げッ、もお堪忍しでぇぇッ！」
濁った悲鳴を轟かせる10名を超す仲間の女性たち。そこに群がる異形の牡ども。目を覆いたくなる光景がそこには広がっていた。
「なんてことを、魔族ごときがエルフの女を汚すなんてッ……！」
女たちだけは殺さず生かしておいたのだろう。慈悲などでは無論なく、こうして大勢で貞操を蹂躙するために。
ルーミルは急いで知識の袋を漁る。下位魔族には見られないが、中位より上の魔族どもには人と性交をする輩もいるのだとか。よもやその場をこの目にしようとは思ってもみなかった。
だが彼の頭脳は知識漁りを途中で放棄した。
その双眸が捉えた先、数匹の人型魔族が囲み犯していた人物は、
「あッ、あ、あ、姉上……!?　そんな、そんなッ!?」
頭がまっ白になる感覚というものを彼は初めて体感した。
薄絹をはだけ双乳を出し、腰帯の前だけ裂かれた姿で局部を幾度も貫かれる美女。姉王女エルローネ。その身が無残にも汚されている。
「や、や――――やめろぉッ!!　姉上を離せ、貴様ら、貴様らあッ!!」
品無く唾を飛ばしルーミルは激昂する。姉であり母であった女性が今、清き身体を汚欲によって蹂躙されている。かつてこれほどの憎悪というものを感じたことはなかった。
「騒ぐほどでもあるまい。この程度のこと、人の世とて珍しくもなかろうに」
魔神が玉座で頬杖をつき酷薄な笑みを浮かべていた。
「貴様の指図か、やめさせろ、今すぐに!!」
「ふむ。――よかろう。条件次第では考えぬでもない」
猛犬さながらにルーミルが吠えると、魔神は意外にも思案する素振りを見せた。
「条件だと？　取引か。一体なにを？」
「お前たち以外に王族の女はいるか？若く力ある女だ。いるならば差し出せ。であれば姉は解放せぬでもない」
怒りに燃えるルーミルの瞳に怪訝な色が入り混じった。
「なんのつもりか知らないが――いない。母はすでに亡く王族は父と私たち姉弟のみだ！」
仮に違っていたとしても取引に応じたかは疑わしい。そんな真似ができるほど自分は落ちぶれていない。
「そうか。ではやはり、お前自身で手を打とう」
そう言うと魔神は刺々しい指をパチンと鳴らした。
すると魔族の群れの中から一際巨大な異形が進み出てきた。人の顔を数多張り付かせた臓物色の触手持つ肉塊、レギオンと呼ばれる醜悪な魔族だ。
「そいつには一風変わった趣向を凝らしてある。変質の能力を付与させた」
「それがなにを――う、うあぁッ!?」
――ギュルッ、ギュルギュルルッ！
複数の触手が一斉に迫るのが見えた瞬間、ルーミルの身体は足首を掴まれ頭を下として宙吊りにされていた。
「なにをする、降ろせ、離せっ……！」
「フフ、やはり男には見えぬな。筋肉はあるようだが華奢な肉体だ。顔つきも美しい。さて、どうなるか見物だ」
「なにを言っている、男の私に、一体――うあっ!?」
――するりするりっ――チュウッ、チュムゥッ！
触手は次いで襟元から侵入し、衣服の内側で二つの乳頭に吸着してきた。
「なにを、離せこのっ、そんなところに吸いついてっ――あっ!?　くぁ、ああアア!?」
触手の先端が吸盤状となり乳頭を鋭く吸い上げてきた。キュウと吸い上げ先端を尖らせ螺旋状にくりくりと撫で擦りだす。
（なんのつもりだ、怪物なんかが乳首をっ……！）
吸盤の内側はぬるりとしていて唇等の粘膜を思わせる。体液で濡れていてほのかに温かく、それでいて少し乱雑なくらい繰り返し吸い上げ乳頭を引っ張る。小さなイボイボがあるのが分かり気色悪さに胸板が震える。
ルーミルは嫌悪をあらわにし身を捩って振り解こうとした。
が、次の瞬間、乳輪に小さな痛みを

著者近刊　『小悪魔カノジョ featuring かたこい』『コワレモノ：璃沙 ～家出娘と爛れた夏～』『魔法のオナホでエッチないたずらし放題！』『女体化魔王と子作りしちゃいませんか？』他
好評発売中！

覚えて「あっ！」と声をあげ肩を震わせた。
（い、イボイボから小さな針がっ――乳輪に刺さって、なにか、入ってくるッ……!?）
目に見えぬほどの細い針が無数に突き刺さっていると感じた。吸盤に細かな歯があるのだとしたら、それで軽く噛まれた心地だ。
同時に乳頭を吸引されると奇妙な感覚が胸板に広がる。
（胸が、なんだ……変だ、もどかしい……なにかが入ってきて、広がる……染み渡るっ……！）
最初は錯覚かもと思えたが、未知のなにかが針を通って乳輪へと流れ込むのが分かる。毒蛇の牙から毒液が注入されるかのように。衣服の中で触手が蠢き液体が送りこまれるごとに、軽い痺れを伴う感覚が乳頭を中心に放射状に拡散していく。
何やらキツいと感じるようになりルーミルは小さく身を捩る。と、胸がぎゅっと衣服に食い込み鈍い衣擦れの音を立てた。
「な、なんだ、胸が……辛い、苦しく……な、あ、あッ、どういうことだ、胸元が膨れて、きゅ、窮屈に……!?」
逆さ吊りのまま胸を見下ろすと、いつの間にか胸板の部分がふっくらと盛り上がり丸みを帯びてきていた。
「乳がついてきたな。良い塩梅だ。しっかりと作り替えてやれ」
「作り替えろだと、私の、俺の胸をどうしようとっ、あうっ、ああアアッ！」
――チュウウッ、チュムッチュムッ、きゅるきゅるっ！
触手が動きを派手にしてきて衣服の中をまさぐり始めた。ミミズが勢いよく這うかのごとくグネグネと蠢き肌に刺激を与えてくる。
吸盤も一層乳頭を吸い上げ前方に向けて引き延ばしてきた。胸の膨らみがググッと突き出る。体液が次々と肌に浸透し膨張するかのごとく膨らむ。
「はぁ、はぁ、もどかしい、キツいっ、胸が窮屈で、服が食い込むっ……あひゅッ、ひいィ今度はなんだッ!?」
「次は下だ。重要な部位だ、念入りに作り替えよ」
足首を掴む触手以外にも新たな触手がズボンの裾から入りこんできた。蔦が木の枝に絡みつくように螺旋を描いて足首から這い上がり、太腿の付け根に到達するや睾丸と陰茎にぎゅるりと巻き付く。
「エルフとは下着をつけぬらしいな。陰茎がくっきりと浮き出ているぞ。さあレギオンよ、肝心のそこもしっかりとやれ」
「なにをする、触るな、やめろッ――うあッああアア!?」
微かに反応していた性器の先端の割れ目に触手が忍び込む。痛み、異物感、嫌悪感、混濁、様々な感覚が脳内で入り乱れ肌という肌が一斉に総毛立つ。
「尿道に入ってッ、キひィよせ、抜けッ、んおおこっちにもなにかチュウチュウ注がれるぅッ!?」
乳頭以上に敏感な部位なため、よりはっきりと体液の注入を実感した。膀胱かあるいは精巣か。そこまでは知れないが確実に液状の感触が流れ込む。純粋な悪寒とも言うべきものが突き刺すように局部を侵食する。
それと同時に奇怪な喪失感が下腹部全体を襲い覆う。一部の感覚がごっそり抜け落ち新たな感覚が誕生する違和感。自分が自分でなくなりつつあるのをルーミルは確かに感じ取っていた。
「あ、アア、一体なにが……ううンッ、消えて、く……アレがなくなって、別の……ンンうッ、なにか、が……」
局部をまさぐられる感触にまったく未知のものを覚えてルーミルの身体は小さく太腿を擦り合わせる。
「な、い……アレの感触が……代わりに、んんンッ、変なものがぁ……胸も、ああキツいぃ……！」
局部や胸だけではない、身体全部に異変を覚えた。肩周りと腰周りが随分と心もとなくなってきており、胸と尻、太腿の辺りは逆に随分と窮屈だ。一部だけ痩せて一部のみ太った、そう感じられた現象だった。
「こ、声も、子供みたいに……甲高くて、まるで、お、女……」
「フハハ完成したか。よくやったレギオン、見事な働きだ」
魔神は声をあげて笑い部下に命じて巨大な姿見を持ってこさせた。足首を掴む以外の触手が役目を終えたとばかりに身体から離れる。
鏡に映った己の姿を見て、ルーミルはぎょっとして目を見開く。
「な――誰だこれは、俺、じゃない、面影はあるが、これではまるで……お、女……！」
信じ難いものをこの目で見ていた。逆吊りにされた耳の長い哀れな虜囚、それは紛れもなく一人の女だったのだ。
そう思うに足る何よりの証拠は立派に肉付く豊満な胸腰。騎士装束を内から押し上げみっちりと張りを持たせている。特に胸は下着がないため先端の突起がぽちっと浮き出て、着衣のままでありながら不思議と扇情的だった。
代わりとばかりに肩や腹部は一見してすらりと細かった。女性然とした華奢な部位でくびれは相当目立っており、そこは妙に服がダボついてサイズが合っていないと知れた。
そして顔。驚いたことにこちらも明らかに女性だった。元より美形であったとはいえ今では女性以外の何者にも見えない。頬はやや丸みを帯び、顎は細く、鼻筋も細く、長い睫毛に彩られる瞳はつぶらな宝石を思わせる形。姉よりもやや幼い印象の、よく似た美貌を持つうら若き乙女の面立ちであった。
「どうして、一体なにが……？」
無論ルーミルは困惑を隠せない。鏡に映るのが自分だという確信はあるものの、己が身に起きた異変については理解が微塵も追いついていかない。
「お前の肉体は変質によって作り替え

聖魔天姫
アイリスフィア
魔の隷姫に堕ちるTSヒロイン
小説 NOVEL／き一子
挿絵 ILLUSTRATION／綾枷ちよこ
堕落する準備はOK？
男に戻れなくなった変身ヒロイン！

「……俺は女じゃねえ、っつってんだろ」
夕陽に白い美貌を照らされながら、少女は吐き捨てるように言った。
「またまたそんなこと言っちゃってぇ。こんな身体しといて女の子じゃないわけないっしょ？」
埠頭の岸壁に波が打ち寄せる音にまぎれ、男の軽薄な声が少女に応じる。
少女は、その首から下を修道服のような漆黒の外套ですっぽり包み隠していた。しかしその体付きは隠しても隠しきれないほど蠱惑的で、服の上からでも豊満な胸の膨らみが見て取れる。頭の上には黒いヴェールをかぶり、ストレートロングの艶やかな銀髪を覆っていた。
男の手が無遠慮に少女の華奢な肩を掴むと、少女は蒼く澄んだその瞳を鋭く細めた。
「……さわんじゃねえよ」
「いいじゃん、どうせ暇なんでしょ？こんなところに一人でさ、ナンパ待ちだったんじゃないの？」
「待ち合わせだ。……近寄るな」
少女は突き放すように言って、肩の上に載せられた男の手を軽く払う。
すると男の手は性懲りもなく、今度は少女の胸元へと伸びた。
「っ……!?」
「こんなところで待ち合わせぇ？　どうせ待ちぼうけ食ってんじゃないの？」
男の手に鷲掴みにされる少女の胸の柔らかな肉付き。彼女は驚きに目を見開くが、男の手はさらに外套の前面までも大きく開けさせてしまう。
「ひょおっ、堪んねぇ……！」
外套一枚の下に秘められていた蠱惑的な肢体が男の目に晒される。
しかもその身体を包む衣装は、まるでレオタードのように肌にぴったりと張り付いた、ハイレグの黒いボディスーツであった。
腰の周りは短いスカートを思わせる装飾付きで、肉感的な両脚は黒のオーバーニーソに覆われることで生肌の露出を抑えていたが、股の鋭い切れ込みなどはいかにも扇情的な印象だった。
「……ちっ」
少女は頬を少しだけ赤く染め、憮然とした表情で舌打ちした。その奇妙な格好が、彼女自身にとっても不服であるかのように。
「その格好やべーじゃん、ひょっとして痴女ってやつ？　そーゆー趣味あるんだ？」
「……悪魔憑きか」
「は？　なんて？」
ぼそり、と呟いた声は誰に向けられたものでもなかった。男は下心を隠しもせず少女ににじり寄り――
「おまえは寝てろ」
硬く握り締められた少女の拳が、ずん、と男のみぞおちに突き刺さった。
「おごッ――」
男は、身長160㎝にも満たない少女の拳を受けたっきり全身を痙攣させてうずくまった。少女はそんな男の様子を哀れむように見下ろす。
顔面を蒼白にしてえずく男の喉が、異常なまでに膨れ上がっている。
「出てこい。いるんだろうが」
少女は呟き、ボディスーツの胸元にあしらわれている十字架の意匠をなぞった。胸から眩いほどの白い光が溢れ、その光は少女の掌に収束していく。
ややあって、少女の手の中に一振りの剣が現れた。十字架の形を模した、白銀に輝く光の剣。
「ゲエエエェェッ!!」
男はその光に当てられたように嘔吐した。漆黒の泥の塊のようなものが、彼の喉からごぼごぼと溢れてくる。
男はそのままスイッチが切れたように倒れ伏したが、地にぶちまけられた漆黒の泥はまるで意思を持っているようにうぞうぞと蠢いていた。
「……息は、あるみたいだな」
少女は男をちらりと一瞥して嘆息。しかし、彼女の意識はむしろ漆黒の泥の方に向いている。
「キキキッ――」
その時、漆黒の泥から飛び出した影が嘲笑うような鳴き声とともに少女のすぐそばを横切る。
影にはコウモリのような翼があった。先端が矢尻形の尻尾を持ち、頭頂部からは小さな角を生やしている。体長は50㎝にも満たないが、男の体内から出てきたにしては大きい。
「やっぱり憑いてやがったな――悪魔め」
少女は咄嗟に振り返り、その小さな悪魔を鷲掴みにした。
「キィィッ!?」
小悪魔はじたばたともがくが、少女の指はその肉体にぎっちりと食い込んだまま離さない。
「おまえの主人はどこだ」
「キッ……」
「誰かの使い魔なんだろ。そいつのところまで案内しろ、命を助けて欲しけりゃな」
小悪魔は少女の手の中でこくこくと頷いた。少女はふん、と小さく鼻を鳴らして解放してやる。
だが、小悪魔が飛び立とうとした先は遥か水平線の方角であった。
「キキ――キッ？」
上空から少女をあざける声が、ひゅん、と風を切る音に断ち切られる。
それは、少女の手に握られた十字剣がすばやく一閃された音であった。
「キッ……ギィィィィッ!!」
断末魔の悲鳴と同時、悪魔の肉体は左右に分かたれた。ぽとりと地に落ちた残骸が漆黒の泥に還り、さらに光の粒子へと昇華されて空に溶けていく。
少女は振り抜いた剣をゆっくり下ろし、ため息をついた。
「……妙だな。小悪魔に忠誠心なんか無いだろうに――」
「いやはやお美事です、聖魔天姫アイリスフィア」
突然の男の声に少女は振り返った。先ほど倒した男のそれとはまったく異

著者近況　執筆中、「TS異世界転生して類稀なる美貌と魔法の才能で有名な美少女賢者様になったあたりで悪い男に引っかかり、賢者様そっくりの娼婦として娼館デビューさせられてぇ」などと考えていました。TS良いよね……。

質な、どことなく優しげな声。
白いタキシードとシルクハットが特徴的な、長身痩躯の若い男であった。白色人種を思わせる金髪碧眼で、美男子と言って遜色のない顔に薄笑いのような表情を貼り付けている。彼はパチパチと惜しみない拍手を送りながら、少女の元にゆっくりと歩み寄った。
「……てめぇ、その名を知ってるってことは――――」
「ええ。貴女をご招待したのはこの私ですとも、アイリスフィア……いえ、入須瑛人とお呼びするべきですかね？」
男は胡散臭い笑みを浮かべたまま、上着のポケットから取り出した携帯の画面を少女に突きつける。
画面に映っているのは、男子制服姿の少年が眩い光の繭に包まれ、漆黒のヴェールとボディスーツに身を包んだ銀髪の美少女へと変身する様子を捉えた映像だった。
「……俺を脅迫してきやがったのは、おまえだな」
「そのような言葉遣いではせっかくの可愛らしいお顔が台無しですよ。それに脅迫とは人聞きの悪い」
「約束通りに来なけりゃその動画をばら撒く、ってのが脅迫じゃなけりゃなんだっつーんだよ」
アイリスフィアは吐き捨てるように言うが、男は薄笑いを崩さない。
「我らが同朋を狩り回っていると噂の美しき聖魔天姫がまさか少年だったとは、いささか驚かされましたよ。これは是非ともお顔合わせ願いたい、と思ったものでして」
「……さっき小悪魔をけしかけてきたのもおまえか？」
アイリスフィアはいつでも剣を振るえるように臨戦態勢を取り、倒れている男をちらっと見る。
「なかなか面白い趣向だったでしょう？　多少力のある悪魔を差し向けたところで貴女の相手にはならないでしょうからね。おかげで初心な一面も拝見させていただきましたし――」
男が言い終えるのを待たずにアイリスフィアは斬りかかった。
完全に不意をつく格好であったが、男は余裕しゃくしゃくといった感じで頭上のシルクハットを手に取った。するとシルクハットの中から飛び出した野太い触手の群れが、その驚異的な弾力性でアイリスフィアの十字剣を受け止めてしまう。
「くっ……そがぁッ……！」
「お元気なのは結構ですが、どうにも乱暴なのはいただけませんね。この機会に躾を施して差し上げましょう」
「何様だよてめえは……！」
あの肉塊に捕まると面倒だ。アイリスフィアは後ろに下がって距離を取る。
「これは失礼を。私の方はすっかり貴女を存じているつもりでいましたが……貴女にはまだ私のことをお伝えしておりませんでしたね、お嬢さん」
男が話す間にもシルクハットからは野太い触手がずるずると溢れ出し、アイリスフィアを取り囲む肉の檻を形成していく。
少女の赤く火照った頬に、一筋の冷や汗が伝った。
「我が名はアガレス。貴族に列せられし二十四位の大悪魔の一席を占める者であり、貴女の主人となる男です。以後お見知り置きを――――」

◆

少女の身に触手が迫る。
アイリスフィアは触手を斬り飛ばしながら、さらに別方向から向かいくる触手をすんでのところで躱した。
「くッ……！」
彼女は苦戦を強いられていた。無数の触手を迎撃するのに精一杯で、アガレスに迫ることが難しいのだ。
「良く捌いてはいますが……いつまで魔力が続くか見ものですね」
アガレスの言葉が示唆する通り、アイリスフィアの超人的な身体能力は魔力というエネルギーを源にしている。聖魔天姫が女性の身体に変身するのも、女性の方が男性より潜在魔力量が大きいからである。
しかしアイリスフィアの魔力量をもってしても、大悪魔と長期戦をするには分が悪い。
（……一度に、懸けるか）
アイリスフィアが幾多の悪魔を葬ってきた必殺技、『神罰執行・天魔剣聖』。全身全霊の魔力と引き替えに放つそれは、どれほど強固な魔力障壁であってもたやすく貫くことを可能とする絶技である。一瞬の隙を突けば即座に勝負を決するが、使いどころを誤れば自らが窮地に陥る諸刃の剣でもある。
しかしアガレスは彼女の狙いを読んでいるように次の手を繰り出した。
「貴女がどれだけ速くとも――これは避けられないでしょう？」
アイリスフィアを取り囲んでいる触手の先端から、大量の白濁した粘液が射出される。
少女にはそれらの粘液が描く軌跡が見えていた。しかし全ての粘液を避けるには、数多の触手が密集した危険地帯に飛び込まなければならなかった。
「このッ……!!」
背に腹はかえられない。アイリスフィアは四方八方から浴びせかけられた白濁粘液を甘んじて受ける。
ツン、と鼻につく悪臭を放つ粘液。聖衣にべたべたとまとわりつく感触も不快だが、その真の効果は間もなく現れた。
（なんだ……これッ、身体が芯から熱くなって……ッ!?）
お腹の奥――特に下っ腹の辺りがかぁっと火照り、じんじんと疼くような熱を持つ未知の感覚。それは時間が経つにつれて治まるどころか、徐々に全身へと広がっていく。
「ふふ、女の体が昂ってきたでしょう？　淫魔をも色に狂わせる催淫粘液の味わいはいかがです？」

著者近刊『幼馴染は闇堕ち聖女！』
好評発売中！

「……ざけんなッ、これくらいなんとも――――っ、んぅッ……！」
アイリスフィアは群がる触手を懸命に躱すが、その動きは明らかに鈍っていた。未知の感覚への戸惑いが少女の肉体を蝕んでいるのだ。回避が間に合わず触手に肌の表面を舐められると、どこか艶めかしい吐息が薄桃色の唇から漏れてしまう。
「小娘のようにお可愛らしい声を上げられるのですね、アイリスフィア？男であったはずの貴女が……」
「てめぇっ、遊んでんじゃ――――てっ、なっ、くうぅッ……!!」
弄ばれている。アイリスフィアは屈辱に震えながら、ふと困惑の表情を浮かべた。前方にいたアガレスの声が突如後ろから聞こえたからだ。
アガレスはいつの間にか少女の背後にいた。すぐ後ろから手を回して聖衣越しの乳首をくにくにと揉み転がし、ただでさえ充血していた突起を完全に勃起させられてしまう。
アイリスフィアは突然の甘い刺激に、歯を食いしばって耐えることしかできなかった。身をよじると男の指はすぐに離れたが、乳首は聖衣の布地を突き上げるように勃起したまま。
「遊びではありません――――躾ですよ、これは。貴女には今一度、自分が雌であるという事実をはっきりと自覚させなければなりませんからね」
「……俺はッ、男だっつってんだろうがッ！」
アイリスフィアは咄嗟に距離を取りながら考える。アガレスは瞬間移動ができるようだが、移動先さえ先読みできれば先手を打てるだろう。
移動直後の隙を突く。アイリスフィアは剣先の一点に意識を集中、魔力を十字剣に注ぎ込んでいく。
「果たしていつまで男と言い張れるものやら――――見届けて差し上げましょう」
アガレスがシルクハットをぽん、と放り投げた。瞬間、その内側から伸びだした触手全てがアイリスフィア目掛けて猛烈な勢いで群がる。
四方八方から迫る触手を避けながら、アイリスフィアの意識はアガレスだけに向けられていた。彼の性格を考慮するなら触手任せにはせず、自ら手を下そうとするはずだ。こちらに圧倒的な敗北感を植えつけるために。
一瞬後。うねりくねる触手の攻勢をしのいだ末に、ふと、アガレスの姿が少女の視界から消えた。
（今――――！）
極限まで研ぎ澄まされたアイリスフィアの感覚が、アガレスの出現位置を読み切る。
後はただ、聖なる十字剣に込められた魔力を解き放つのみ。
「そこだッ!!　神罰執行――――」
アイリスフィアは振り返るとともに十字剣を振り抜きかけ、不意にその手が止まった。
「おやおや。いかがなさいましたか、アイリスフィア」
アガレスはからかうような笑みを口元に浮かべる。
アイリスフィアの手を止めさせたのは、二人の間を遮るように触手が構えた肉の盾――小悪魔に憑かれていたさっきの男だった。
迷わず剣を振り抜いていればあるいはアガレスを仕留められたかもしれないが、それはつまり無関係な一般人を殺害するということでもある。
「――――ッ……!!」
「私の見込み通りですよ、アイリスフィア。貴女は美しいだけでなく、慈悲深いほどにお優しい」
結果的に、その手を止めたことが命取りになった。
一本の野太い触手がアイリスフィアの足首から華奢な腰、胸元、肩を雁字搦めにして締め上げる。少女は絞り出すようなか細い悲鳴を上げ、その手から十字剣を取り落とした。
「あっ……ぐ、ぅッ……！」
ぎちぎちと全身を締め上げられる束縛感に背筋がぞくぞくと震える。身動きは一切許されない。
アガレスの手がアイリスフィアの喉元に伸びる。
（や、ばい……これ、本当に、死――――）
「殺しはしませんよ、アイリスフィア」
まるで少女の考えを読んでいるかのような囁き声。
いっそ優しいほどの力加減で首を締め上げられ、アイリスフィアの意識は急速に遠退いていく。
「『入須瑛人』には死んでいただくことになるかもしれませんがね」
アガレスは少女を絞め落としながら、穏やかに微笑んだ。

◆

ぎしっ、とベッドのスプリングが軋む音がした。
（……ここは……？）
夢うつつの少女が目を開くと、まず天蓋付きベッドの垂れ幕が目に入る。
薄暗い照明に照らされたベッドの上。少女は反射的に伸びをしようとして、手首がぎしりと引っ張られるような感覚に遮られる。
拘束されていた。
「ようやく目を覚まされましたか」
穏やかな男の声がして、アイリスフィアは拘束されたままそちらに視線を向ける。
アガレスだ。彼は先ほどと変わらない姿でベッドに腰掛け、表情に薄笑みを貼り付けたままアイリスフィアをじっと見つめている。
「……おい。どこに連れてきやがった」
「ここは我が領土の一部――――貴女にわかりやすいように言えば、専有異界とでも言うべきでしょうか」
聖魔天姫に選ばれた『彼』は聞き覚えがあった。貴族に数えられる大悪魔は例外なく、現世と隔てられた固有空間――――『領土』を有している、と。

「要するに、ここでは誰の邪魔も入らないということです」
「……なにするってんだよ」
「おわかりにならないのですか？」
アガレスは薄く微笑み、虚空から点鼻薬の容器のようなものを取り出す。
アイリスフィアもこの状況で何をされるか気づかないほど鈍くはない。だが、自分がその対象になるということがにわかには信じられなかった。
少女が思い切り手を引いても拘束用の触手はびくともしない。それどころか両脚を拘束している触手はお仕置きとばかりにアイリスフィアの脚をM字に開かせ、その恥ずかしい姿勢で固定してしまう。
「ッ……！　く、くそッ！　おいっ、やめさせろよこの格好ッ……！」
「何を言います、お似合いではありませんか。男に敗北して股を開く雌にはぴったりのお姿ですよ」
「ふざけッ……ちょ、おい、なんだよそれッ……！」
アイリスフィアは屈辱と羞恥に頬を染め、アガレスを睨みつける。
彼はアイリスフィアの鼻腔に細長い容器の先端をそっと差し込み、そこから出てくる粘着質な液体を粘膜に塗り込んでいった。
「んなっ……ふぁっ、ぁ……なんだ、これ、変なにおい――」
「貴女もご存知のものですよ。すぐに効き目が出るはずです」
「は？　こんな臭い、嗅いだこと……」
容器を引き抜かれてすぐアイリスフィアは戸惑うように眉をひそめ、はっと目を見開く。
その臭いはつい先ほど、触手にぶちまけられた白濁粘液のすえた臭いと酷似していたのだ。
「先ほどよりは良い匂いでしょう？　催淫成分を含むものだけを抽出していますからね。それに、こいつは粘膜から吸収させるのが一番良く効くんです」
「……あ、アガレスっ、てめっ……よくもっ……ぁ、あッ……！」
アイリスフィアは早速強烈な疼きに見舞われて真っ白な肌を赤々と紅潮させる。身体の表面にぶち撒けられた時とは比べ物にならないほどの、尋常ではない焦熱と疼きがお腹の奥に淫欲の火を灯している。
まさに発情という言葉が相応しい。両乳の頂点や陰核の突起は痛々しいほどに充血しきり、股穴は聖衣のクロッチに染みをつけるほど粘っこい蜜をとろとろと漏らしている。もしアイリスフィアが拘束されていなければ、狂おしい疼きに衝き動かされて両脚を切なげにすり合わせていただろう。
「おやおや、これほど効果てきめんとは。よほどの淫乱なのか……ご自分でこのいやらしい身体を慰めでもしていたのですかね？」
「んなわけ、ねぇ、だろうがッ……！」
アガレスを睨む少女の目が、発情のあまり涙腺が緩んだように潤んでいる。
彼女の抗弁に偽りはなかった。『彼』が変身するのは必要に迫られた時だけで、それ以外の用途には決して使わないようにしていたのだ。
「まぁ、あの初心な反応を見る限りはその通りなのでしょうね。――では、私がその身体に溜まった欲求を存分に解消して差し上げましょう」
アガレスは下半身の着衣を脱ぎ捨て、激しくいきり立った肉槍を取り出す。
見た目は人間のものとさして変わらないが、20㎝級の大きさとカリ高の亀頭を併せ持っているそれは十分すぎるほどに凶悪である。
「か、勝手なこと言ってんじゃ――ぅ、ぅあっ……！」
アイリスフィアは思わず息を呑む。彼女の処女穴では到底受け入れられなさそうな代物だが、催淫成分をたっぷりと吸収させられて蕩けきった身体は無意識に緊張を緩めてしまう。
アガレスは聖衣の股布をずらし、未成熟ながら肉ビラをぱっくりと開いた発情性器を露出させた。
「やはり処女膜もお美しい姿をしておられる。――貴女の初花を頂戴するのはこの私ですよ、アイリスフィア。そのことを貴女のいやらしい穴にたっぷりと教え込んで差し上げましょう」
「……気色悪いこと言ってんじゃッ……あっ、んッ、くッ……！」
気丈に罵る少女の声が、指先で乳首をこねくられる快楽に甘く蕩かされていく。掌いっぱいに乳房を揉みしだかれ、指先で女性器を開帳させられ、包皮に覆われた陰核をむき出され――全てが初めての感覚なのに、どれもこれも気持ち良くて仕方がない。
はぁっ、はぁっと息を弾ませながら目をつむるアイリスフィア。彼女の窮屈な肉穴の入り口に、悪魔の肉槍の先端がぴとりとあてがわれた。
にゅるんっ、ずぷっ、ずぷぷぷぷっ！
「あ――ぐっ、ぅ、くうぅぅッ……！」
野太い亀頭がぬるりと滑るようにめり込む。アガレスはそのまま体重をかけ、初物の証を蹂躙しながら無垢な処女穴をこじ開けていった。
膣内は狭いが、奥までしっとりと濡れていてヌメりも申し分なかった。溢れた破瓜の血はごくわずかで、その赤色もたっぷりと分泌されたマン汁にやがて洗い流されてしまう。
「……く、くそぉっ……なんで……！」
奥まで凶悪な肉棒を挿れられながら、アイリスフィアは悔しげに唇をきゅっと引き結ぶ。
（なんでっ、痛くないんだよぉ……！）
破瓜の痛みで少しは快感も薄れると思ったのに。あんなに大きな肉棒を無理矢理挿入されているはずなのに――
少女の身体は痛みを覚えるどころか、蜜壺をずっぽりと埋め尽くされることに奇妙な充足感を覚えていた。
「あぁ、実に良い具合の穴ですよ。まだ少々硬いですが、回数を重ねてじっくりとほぐしてやれば極上の穴具合になりそうです。この私の奴隷妻となるに相応しい……」

「ふぁっ……あっ、ひっ、んうぅッ……！　なんでっ……男相手にっ、こんなッ……！」
「まだ男のつもりでいるのですか？……では手始めに、初めての女の絶頂を教えて差し上げましょうか」
不意に耳元で囁かれ、少女は肉穴の締めつけを無意識にきゅっ、きゅっ、と強めてしまう。
男が本来知るはずのない、女の悦びの頂。まだ絶頂していなくてこれだけの快感なのに、もしイってしまったらどうなってしまうのか――そんなアイリスフィアの恐れを見透かしたような男の言葉に、華奢な背筋がぞくぞくと甘い震えを帯びる。
「動きますよ、アイリスフィア」
アガレスは少女の膝裏ごと背中を抱きすくめ、ずぷんっ、ずぷんっと重いストロークで膣内をかき混ぜるように肉棒を打ち込んだ。肉厚の亀頭がぷにぷにとした子宮口を幾度も叩き、まだ未成熟なアイリスフィアのポルチオ性感を強引に目覚めさせようとする。
「うぐっ！　あ、ぐっ！　やめ……ろっ、そこッ……！　おなかっ、ヘンになるッ……！　うっ、くッ……！」
「どうやら痛みはないようですね。馴染みが早いようで結構なことです」
「うぐッ、ん、くッ……！　くそっ、出てけっ、出てけよこのッ……！　くっ、ぅんッ……！」
悔しさと、幼膣の一番奥を突き上げられる感覚にじわりと涙がにじむ。
アイリスフィアは膣内の男根を追い出そうとするようにぎゅうぎゅうと締め上げるが、アガレスのピストンは一定のペースを崩さなかった。ずぷんっ、ずぷんっと膣奥を突かれるたびにお腹の奥から変な声が出てしまう。
（痛みは……って、ふ、ふつうは痛い、のか……？）
処女開通が痛みをともなうことは知識として知っていたが、一番奥を大きなモノで突き上げられるのはどうなのだろう。膣奥を突き上げられる衝撃にも徐々に慣れてきて、自然と深く息を吐き出してしまう。
嫌な予感がした。
「そろそろですね――」
「な、に……？　――くぁっ、あっ、うっ……！　ッ、くっ、ぅんんン――――ッ♥」
ぱちんっ、とお腹の奥で弾けた快楽の火花が電流となって全身を駆けめぐる。華奢な背筋がびくんとのけ反り、くびれた腰付きがぶるぶると震えだす。
その時アガレスは肉棒を根本まで挿入しつつ、少女の両乳首をぎゅっとつまみ上げていた。彼はアイリスフィアの激しい反応にも構わず子宮口をぐりぐりと抉り、硬く尖った乳首をぴんっぴんっと指先で弾いていく。
「ふぁっ、あッ、ひぃんッ！　やだっ、なんれっ、急にぃッ……！」
「ようやく内側の性感を開いてくれましたね。……よく覚えておきなさい、アイリスフィア。これが女の体の幸せというものですよ」
全身の性感回路が繋がってしまったような感覚。敏感極まりない突起と未成熟な幼膣内の性感を結びつけられ、閾値を超えた未知の感覚が快楽として溢れ出してしまったのだ。
敏感な突起をこねられる気持ち良さに膣内のヒダが震え、子宮口を抉られる圧迫感に身体中の性感帯が燃え盛る。アイリスフィアは必死に身をよじって逃れようとするが、肝心要の美少女マンコは悪魔のチンポにちゅぱちゅぱと吸い付いていた。
アガレスは少女の柔膣に追い打ちをかけるように、激しくピストンを送り込んでいく。
（くそぉっ、くる、ヘンなのくるっ……❤　こんなの、知らな、い――❤）
身体がうっとりと脱力するような快楽に腰から下が蕩ける。頭の中が徐々に白く染まり、せめて声を抑えようとして歯を食いしばる。じゅっぽじゅっぽと蜜壺をほじくられる音に全身がかぁっと熱くなり、こみ上げる快楽が我慢できなくなる。
「どうぞ、そのまま昇り詰めなさい。貴女の中の『女』をさらけ出すのです」
「やだっ、あっ、くうぅッ……！　うぐっ……くっ、んッ❤　んっクうぅうぅ――――ッッ❤」
乳首をぎゅうっときつく抓られ、子宮口をぐいぐいとこね回され、アイリスフィアは切なげに声を噛み殺しながら初めての絶頂に達した。
女の体で初めて味わう、下半身が蕩けてしまいそうなほど甘美なめくるめくアクメの悦び。
少女は背筋を弓なりに反らしながら女悦の波に身悶えする。絶頂快楽にヒダをわななかせる蜜壺はぎゅっぎゅっときつく締まり、膣内の肉竿を決して離すまいとする。
アガレスはそんな彼女の媚態を眺めながら、にやりと笑みを浮かべた。
「欲望を解放するには至りませんか。……まぁ、初めてではこんなところでしょう。しっかりと絶頂を味わっていただいただけでも良しとして……ふふ、男の精を吐き出される感覚も味わっていただきましょうか」
「……ふぁっ……ぁ、くっ……ふーっ、ふーっ……んっ、くぅッ……❤」
小刻みなピストンが子宮口を小突くと同時、アクメに震えるアイリスフィアの肢体がびくんと跳ねる。
肉棒から吐き出された濃厚な悪魔の精が、ドピュドピュと勢いよく子宮口を叩いたのだ。
（なんだ、これ……おなか、熱くなって……こんなの、はじめて……っ❤）
アイリスフィアは自分が何をされたかもわからなかった。絶頂の余韻も覚めやらぬうちにお腹の奥がじわぁっと熱くなって、無意識に膣内の柔肉でチンポを食い締めてしまう。
まるで吐精を促すような締めつけに、アガレスは低く呻きながら中出し精子を一滴残さず注ぎ込んでいった。

人々を悪から守りたい……。
変幻装姫、奇跡の大復活！

第1巻～第2巻も
好評発売中！

二次元ドリームノベルズ
『変幻装姫シャインミラージュ』

変幻装姫 シャインミラージュ SHINE MIRAGE 外伝
絶望のバイオレンス編

最終話　闇に消える正義の光。変幻装姫の終わり

小説 NOVEL／でぃふぃーと　挿絵 ILLUSTRATION／高浜太郎（たかはまたろう）

ケダモノ達の欲望の捌け口にされ、あまつさえゴミとして捨てられてしまった変幻装姫。

先ほどまで途絶えることのなかった痛みと快感の積み重ねに、意識も朦朧として満足に身体を動かすことさえままならない。

何度もスパンキングを受けて赤く染まりながらも、白濁液によって淫らに穢された尻肉がふるふると震える様は、とても気高い正義のヒロインとは思えない姿。

今まで人々を守る為に戦ってきた変幻ヒロインは、守るべき者達の手で無様なゴミヒロインへと変えられてしまった。

「いつまでサボってンだよ。さっさと起きやがれゴミヒロインが」

「んぐぅぅッ!!　あぁぁッ!?　う……うぅ……」

ドゴォっという激しい音と共に、シャインミラージュは己の身体がポリバケツの中で揺さぶられる感覚を味わった。

何が起こったのかということを考える間もなく全身に衝撃が走る。壁に叩きつけられたのだと理解しても遅く、ポリバケツは砕け、ボロボロの変幻ヒロインの身体が地面へと落ちた。

「ぐ、グラッド……」

うつ伏せに倒れた状態で、両腕で地面を押さえながら見上げるとそこにはグラッドがいた。

既に日も暮れさらなる闇に染まる路地裏の中に溶け込む黒衣の仮面の男へ、荒く息を吐きつつもシャインミラージュは普段と変わらぬ鋭い視線を向ける。

「人間共にボロボロされた感想はどうだァ。正義のヒロイン様よォ」

仮面の下では最低な笑みを浮かべているのだろうと、心底愉快そうな声色から容易く察することができる。

「……ど、どうということはありませんわ……」

「ヘェ」

「……あの方達は、ダーククライムの存在に恐怖したからこそ……こんな、真似をしてしまったにすぎません……」

何事もなければ普通の生活を送っていたであろう。人外の力を持つ巨悪が存在しているからこそ、絶望から人の道を外れてしまったにすぎない。

（それに……これも、わたくしが蒔いた種ですもの……）

悪を裁く正義のヒロインの敗北。そして惨めなショー。

それらがあったから今の結果に繋がってる。だからこそ、こういった行為を許せないとは思うものの、シャインミラージュは彼らを強く責めることはできなかった。

「ははァ、シャインミラージュはお優しいことだな」

「当然でしょう。わたくしは平和を守る正義のヒロイン……変幻装姫シャインミラージュですのよ」

震える膝を手で押さえ、雄の欲望を全身に受けて異臭を放つ身体に鞭を打ち、憎むべき敵を相手に身を起こす。

言葉では普段の強さと凛々しさを感じさせるが、外見のとおりに身体はボロボロであり、排泄穴からは多量に放たれた白濁液の残滓が垂れ落ち、とてもではないが戦える状態ではない。

しかし、だからといって悪を相手に弱さを見せるようなことは変幻ヒロインにはできないことだ。

「ご立派な心掛けだ。ならしっかりと平和とやらを守ってみせて貰わねェとなァ」

路地裏の出入り口を背にするグラッドが右手を上げる。

それを目で追うだけだったシャインミラージュだったが、直後に響く轟音と悲鳴にハッと目を見開いた。

「まさか、あなた達ッ!?」

聴覚だけでハッキリと理解できる。今、この場から出た先で何が起こっているのかということを。

「感謝して欲しいモンだなァ。お前が起きるまで人間共の記憶からこの場所のことを消してやったし、ついでに犯されてる時には前の穴も――」

「お黙りなさいッ!!　誰が感謝なんて……ダーククライムの好きには……うっ……!!」

すべての原因はダーククライムにある。だからこそ、わざとらしいグラッドの言葉に怒りを見せる変幻装姫。

すぐにでも人々を救わなければと、途中で遮り駆けだそうとしたところで、ガクンと膝が折れる。

長時間に及ぶ陵辱と暴力によるダメージと疲労が抜けきっていない。身体が重いのだ。

「そんな身体で出て行っても戦闘員にボコボコにされるだけだぜ？　人間共を守るだなンて無理に――」

「……黙りなさいと言ったでしょう!!」

無力な変幻装姫の精神的な傷を抉るように続くグラッドの嘲笑。

スレイヴフォームでいる限り、戦闘員を相手にすら勝利することは不可能だろう。よくても、ただ嬲られるだけのサンドバッグ。

しかし、だからといって行かない理由にはならない。正義の変身ヒロインとして……いや、悪を許さない人間としてだ。

（神聖なエナジー……お願いですから、わたくしにもう一度悪を滅する光を……!!　わたくしに、戦う力をッ!!）

目の前で繰り広げられる理不尽な破壊をとめたい。非道な悪党に、人々の平和が脅かされるなどあってはならない。

シャインミラージュの内から湧き上がる力への渇

望。神聖なエナジーが与えてくれる、悪を滅する為の力を求めて心の中で強く願う。
自分を選んでくれたのなら、その為に力を貸して欲しいと。
「これは……」
「なん、だと……!?」
心の底から溢れる願いに反応してか、変幻ヒロインの身体が光を放ち始めた。
それはまるで、東堂院紗姫からシャインミラージュへと変身をする時のような、神聖な輝き。
博士によって神聖なエナジーのすべてを解析された変幻令嬢から発せられるはずのないモノに、グラッドの仮面の下から声が漏れる。
「チッ!! 雑魚が無駄な真似をッ!!」
何かが起こっているのは誰の目にも明らか。グラッドは完全にこの状態が終わりを迎える前にと、光に包まれる変幻令嬢の身体を貫かんと手を伸ばす。
「グッ!?」
しかし、命を狙った凶手は途中で弾かれて空を切った。
弾いたのは銀色に輝くレイピア。その武器の主は――
「改めて言わせていただきます。わたくしは人々を守る正義のヒロイン。変幻装姫シャインミラージュですわッ!!」
先ほどまでのヒロインスレイヴフォームなどではない。
黄金色のツインテールに白を基調としたレオタードコスチューム。変幻ヒロインの象徴たるストライカーフォームに身を包んだシャインミラージュに他ならない。
(力が湧き上がってくる……これなら)
今までの陵辱と暴行の痕は消え、身体の奥底から力が止め処なく溢れて全身の隅々にまで行き渡っている感覚に、自然と白いグローブに包まれた両手に力が入る。
初めて変身をしてから戦い続けてきた中で最高とも思えるコンディション。神聖なエナジーが応えてくれたのだという喜びを覚えるが、今はまだ安心する時ではない。
「チッ!! 調子に乗るンじゃねェッ!!」
完全なる復活を遂げたと感じられるシャインミラージュの姿に、グラッドが焦りを帯びた口調と共に一気に距離を詰めた。
初めて相対した時ならば間違いなく目で追えなかったスピード。しかし、桃色のバイザーの下の双眸は地を蹴る瞬間から再び踏むその時までをしかと捉えていた。
「遅いですわね。シャイン・スラストッ!!」
「グッうぅ!?」
身体もまた、変幻装姫の意志にしっかりと反応してくれていた。
鳩尾を狙うグラッドの拳を半身でかわし、シャイン・スラストをカウンター気味に、逆に鳩尾へと放つ。
ただの怪人程度であれば身体の一部を消し飛ばす一撃も、流石にグラッドを相手には吹き飛ばす程度にしかならなかった。
だが出入り口を塞いでいた邪魔な相手がいなくなったことは僥倖。シャインミラージュはすぐさまこの暗い場所からの脱出を選択する。
「ッ!?」
大通りに出た瞬間に、音のする方を確認した変幻装姫はギリっと歯を噛み締めた。
人工的な灯りの下で数多くの戦闘員達が人々を連れ去らんと襲い掛かり、一部の者は建物を破壊している。
「この……おやめなさいッ!!」
一瞬で怒りのボルテージが最大にまで跳ね上がり、黒い男達が群がる場所へと文字通り突っ込む変幻ヒロイン。
「やああぁぁぁッ!!」
「シャインミラージュ!?」
「ど、どうしてスレイヴフォームじゃないんだ!?」
気づく間もなく数人が倒され、戦闘員達が正義のヒロインの姿に驚きを見せた。
スレイヴフォームで抵抗することもできない、ただのサンドバッグヒロインでしかないと思っていたというのに、汚れ一つないストライカーフォームで現れたのだから当然の反応だろう。
「シャインミラージュ!!」
「あぁ、シャインミラージュが来てくれたッ!!」
驚きという点では襲われていた人々も同じだった。ダーククライムに敗北し、もう戦うこともできないのではと思われていた変幻装姫。
もう輝くことのなかったはずの光が、闇を蹴散らしているのだ。
「わたくしが来たからにはもう安心ですわ。皆さんははやく遠くへ……!!」
この中には自分を犯していた男達もいるかもしれない。
けれども変幻ヒロインはバイザーの下で優しい微笑みを見せ、無力な人々の無事を願う。
「罪もない人々を襲うダーククライム……これ以上の悪行は、この変幻装姫シャインミラージュが許しませんわ!! 覚悟なさいッ!!」
銀色のレイピアを構え、凛とした言葉を放つ復活の変幻令嬢。
それはまさに、敗北を知らない無敵のヒロインの気高さを感じさせるモノだった。
「な、何を偉そうに……!! ただのサンドバッグでしかなかった癖によ!!」

著者近況 シャインミラージュの本編とは違った活躍はいかがでしたでしょうか。一人でも多くの方が殴られ、蹴られ、責められるシャインミラージュの姿に興奮していただければ嬉しいです。本編の方も完結を目指していきますので、よろしくお願いします!!

登場人物紹介

シャインミラージュ
悪の組織ダーククライムと日夜戦う正義の変幻装姫。

グラッド
ダーククライムの凶悪怪人。圧倒的な戦闘力をもつ。

ドルコス
ダーククライムの幹部。肉弾戦を得意とする、パワータイプ。

デブロ
タキシード姿の豚型の人獣。ドルコスと同じく幹部のひとり。

ミスティ
ダーククライムの幹部。可愛らしい見た目のゴスロリ少女。

前回のあらすじ
闇のコロシアムから地上へ戻されたシャインミラージュを待ち受けていたのは、新たな地獄だった。公開水責め、強制浣腸と排泄、一般人による陵辱……。際限なく襲いくる仕打ちに悶える変幻装姫は、ついにその身をゴミ箱に捨てられてしまうのだった。

「そうだ……外見だけ変わったところで雑魚ヒロインに変わりはねぇんだ!!」
動揺を見せる戦闘員達だが、所詮こけおどしであろうと変幻ヒロインを囲むようにして集まりだした。
(いいですわ。わたくしに集まってくれれば他に手は回らないはず)
数に任せての戦闘員らしい行動は、シャインミラージュにとっては願ったり叶ったり。
たとえスレイヴフォームであったとしても、人々に危害が及ぶ可能性が減るのならそれでいい。
「サンドバッグかどうか試してみることですわね!!はああぁッ!!」
複数人で襲い掛かってくる戦闘員達を一瞥すると、シャインミラージュは一瞬でその場から消える。
一陣の風が戦闘員達の間を抜けたかと思えば、屈強な黒い身体ががいくつもドサリと音を立てて地面へ倒れた。
「嘘だろッ!? これじゃ以前と変わらないじゃねぇか!!」
この一瞬だけで十分に伝わる変幻ヒロインの力に、削がれていく戦闘員達の闘争心。
「凄い……頑張れシャインミラージュ!!」
それは同時に、逃げる人々の心に希望の火を灯した。
邪魔にならないようにと遠くへ離れながらも、復活を遂げた変幻ヒロインへと多くの声援が送られる。
(大丈夫……これならいけますわ。絶対にダーククライムの好きになんてさせません)
応援の言葉を力に変えて、シャインミラージュは群がる戦闘員達を突き、斬り、時に拳や蹴りで一人また一人と数を減らしていく。
チラチラと、一般人を狙おうとする卑怯者がいないかと周囲の状況を確認する変幻装姫。
下手に分散されると手間取るかという懸念があったが、どうやら現れた雑魚戦闘員達はこの場にいる者達で全員のようだった。
「いけぇ!!」
「そこだシャインミラージュッ!!」
黒い影が減るにつれて大きく、増える応援の数々。
まるで過去の敗北などなかったと思えるほどに圧倒的な力を見せる変幻ヒロインの姿は、輝いて見えた。
「チックショぉおぉッ!!」
「そんな大振りが当たるものですか!! これで、終わりですわッ!!」
最後に残った戦闘員の大振りの拳を踊るようなバックステップで避け、一度背を向けてターンをしながらの一閃。
吹き飛ばされる黒い身体へと視線を向けることもなく、シャインミラージュはレイピアを地面へと振り下ろす。
完全なる正義のヒロインの勝利の姿。そう受け取った人々から歓声が湧いた。
「これで雑魚は全員……後はグラッド。あなただけですわ」
しかし、まだ変幻装姫の緊張は解けていないどころか、一層強くなっていた。
桃色のバイザーの下の双眸を鋭くし睨む先に存在するのは、悠然と立つ黒衣の仮面男。
「いいねェその顔。初めてボコってやった時の絶対にオレを倒すっていう顔だ」
敵意を突き刺されながらもパチパチと数度手を叩く姿からは、余裕しか感じられない。
「あの時と同じようにいくとは思わないことですわね。今日は……いえ、もう二度とあなたのような悪に負けたりはしませんわ」
「基地の時よりイイ顔してやがるなァ。神聖なエナジーを持つ奴がする、イラつく顔だ。今日は前以上にボコってやるから楽しンでくれよ」
相対する光と闇。ここでの決着がこの世界の行く末を決めるといっても過言ではないだろう戦い。
戦闘員達は倒れ、遠くから多くの人々に見守られる中で、シャインミラージュとグラッドの姿が同時に消えた。
「オラァッ!!」
力強いグラッドの声は攻撃の合図。初めての戦いの際には、ストライカーフォームの速度を完全に圧倒していた仮面の男の一撃。
路地裏の時以上のスピードで放たれる右拳は、まっすぐに変幻装姫の顔面に吸い込まれていく。
(見える……反応できる……!!)
カッと目を見開く変幻ヒロインには確かにグラッドの攻撃が見え、同時に身体も対応する為に動いた。
「チッ!?」
レイピアの柄で間近に迫る拳を下から打ち上げ軌道を逸らす。だがそれだけで相手の攻撃の手がとまるわけではない。
上に注意が向いているのを利用し、左腕が鳩尾を目がけて迫る。速度と破壊力を合わせ持った圧倒的

著者近刊 『変幻装姫シャインミラージュ 砕かれるプライド、穢される存在』『変幻装姫シャインミラージュ2 汚辱に染まりゆく光』 好評発売中!

な暴力。初めて相対した時には受けることもできなかった攻撃は……。
「見えていますわッ!!」
「ウグッ!?」
初撃を受けたレイピアの刀身を使用して弾き、お返しとばかりに地面と水平に伸びる鋭い蹴りがグラッドの身体を捉えた。
僅かに体勢が崩れ数歩後退する仮面の怪人。だがそれを見逃す変幻ヒロインではない。
「はあああッ!!」
追撃で放つのは突きの連続。一発の威力は大したことはないけれども、その分相手に攻撃を許さない為に手数の多さを優先させている。
「クッ……小賢しいッ!!」
スピードに大きな差があれば容易く回避される連撃であるが、グラッドは数度手で弾いたのが限界で、後はすべて受けに回っていた。
それはやはりというべきか、確実にシャインミラージュの身体能力が今まで以上に強化されていることを意味している。
少なくとも速度だけならばグラッドを上回っているのが現状だろう。
「いけッ!! 押してるぞ!!」
遠目から見れば押しているように見える変幻ヒロインの姿に、自然と周囲の声援も熱が入る。
「チクチクチクチクと鬱陶しいンだよォッ!!」
防御を捨て、ダメージを覚悟して攻撃に転じるグラッド。変幻装姫の身体を捕らえるべく強引に手を伸ばすが、シャインミラージュは強気な笑みを残してその場から消えた。
「ミラージュ・スラッシュ!!」
「グアッ!?」
グラッドの手が変幻ヒロインの残像を消した直後に、レイピアでの斬撃が無防備な背を捉える。
「どうやらわたくしの方が速いようですわね。今までの借り、纏めて返して差し上げますわッ!!」
身体を斬り裂くまでには至らなかったが、ダメージ自体は与えていると確信した変幻装姫。
小さく跳躍し仮面怪人の背を数度蹴ると、白くむっちりとした太ももで顔を左右から挟み、そのまま捻りを加えて頭から地面へと叩き落とす。
「舐め、るンじゃねェ!!」
だが、グラッドは叩きつけられる前に両手で地面を支え、そのままバネのように跳ねて太ももによる拘束から逃れた。
「神聖なエナジーが随分と力をくれてやがるみてェだな」
「えぇ、あなた達を滅する為の……平和を守る為の力。わたくしはもう誰にも負けたりはしません」
苛立ちを孕むグラッドに対し、落ち着き払うシャインミラージュ。
まだ勝負が決まったわけではないが、どちらが優勢であるかは誰が見ても明らかであろう。
「そのまま倒しちまえー!!」
「応援してるぞ。シャインミラージュぅッ!!」
正義のヒロインの勝利を期待する人々の声はより多く、大きく、さらに距離も縮んでいる。
(わたくしを応援してくださる声も力になりますわ……ありがとう)
人々の声援を受けてか、身体の奥底から湧き上がる熱い感覚。
たとえこの身が穢されようとも絶対に守ってみせるという決意を、グラッドを、ダーククライムを必ず倒すのだという決意をより強固なモノとした。
「観客が随分増えたみてェだな。調子に乗ってる正義のヒロイン様がヤラれる姿をまた見せてやらねェとなァ」
「声に余裕がありませんわよ。いえ、馬鹿みたいに乱暴なのは会った時からでしたかしら?」
まだ本気を隠しているという可能性はあるが、変幻装姫が為すべきことは変わらない。
目の前の悪を滅し人々を守る。ただそれだけ。
グラッドが接近し、先ずは機動力を奪わんと足を狙う左のローキックが放たれる。
しかし、シャインミラージュは右足でそれを踏みつける形で防ぎ、レイピアで仮面男の首を斬らんと左から薙ぎ払った。
「甘エッ!! グァッ!?」
接近する刃を拳で打ち上げ、反撃しようと残るもう片方の腕が逆に変幻ヒロインの首を掴まんと迫る。
だが、この一連の動きの中でもシャインミラージュのスピードとの差が出ていた。
一手、動き出しの速度で優位を取る変幻令嬢の膝蹴りが、喉を喰わんとする黒い手が触れる前に突き刺さる。
「甘いのはあなたのようですわね!!」
神聖なエナジーによる強化を受け、しっかりとダメージも通るようになっている。
少しばかりよろめいたところでレイピアの柄でグラッドの仮面を正面から強打し、距離を開かせて斬りかかった。
「チィッ!?」
完全に捉えたかと思えた斬撃は、ギリギリでグラッドが後退したことで浅く終わってしまう。
黒衣が斜めに斬られ、傷口を手で押さえている仮面の怪人。その表情はわからないが、おそらくは怒りに満ちたモノなのだろうと想像できる。
「その仮面も割れてしまえばよかったのですが、次で終わりにして差し上げますわ」
勝てる。油断するわけではないが、間違いなくグラッドに勝てるだけの力を神聖なエナジーは与えてくれている。

そう確信するからこそ、途中で逃げられたり増援が来る前に勝負を決めなければ。

「うふふ……随分と頑張ってるみたいじゃなぁい」

「ミスティ……!?」

突如として背後から投げかけられた声の主。聞き間違えるはずのない、特徴的な口調と可愛らしい声を持つダーククライムの幹部の一人であるミスティ。

敵が増える前にと思っていた矢先のゴスロリ少女の登場に、変幻ヒロインの表情が焦りを帯びる。

（今の状態ならミスティの能力も今までどおりに無力化できる……？　いえ、まだ確証が持てるまでは）

普段なら神聖なエナジーで意味を為さないミスティの能力。今ならばミスティも倒せるのではと思うが、一対二の状況で過信は禁物だとギュっと唇を合わせる。

「あぁ、私は手出ししないから安心してねぇ。私はただ、ちょっとした説明をしに来ただけだからぁ」

「説明ですって……一体なんの説明が必要だというんですの？」

説明が必要な変化があるとするならば、それは今のパワーアップしている状況だろうか。

それともグラッドに関して、もしくは倒しそびれた戦闘員が人質を。多くはないけれども、どれも変幻装姫にとってマイナスにしかならないであろう情報の可能性は高い。

そもそもとしてミスティがわざわざ出てきているのだから、シャインミラージュに有利になることを言うことはないのは明らかだ。

「まぁその前に、ちょっと周りの人間達を見てみるといいかもねぇ」

「周りを……ですって」

このままグラッドを倒してしまいたいところではあるが、何かしら意味を持って現れたと確信できるゴスロリ少女を無視するのも気味が悪い。

周囲の人々に何かあったのだろうか。グラッドに集中しすぎていたのが災いしてしまったのかと、急激な不安が変幻ヒロインを襲い周りを見る。

「よかった。無事ですの……ね」

何かがあった様子はない。ただやはりというべきか距離が大分近づいていることぐらいだろうか。

そう思っていたシャインミラージュだったが、人々の表情と自分へと向ける視線に戸惑いを隠せなかった。

「どうしたんですの……？　どうして、そのような顔を……」

先ほどまで強く応援をしていたとは思えない、驚きや侮蔑を孕む、負の視線と表情が集中している。

一体何が原因かもわからずに、変幻装姫はジリっと困惑しながら後ずさりした。

「うふふ、まだ気づかないなんてねぇ。ちょっと自分の身体を見てみるといいかもしれないわよぉ？」

間抜けを嘲笑うかのようなミスティの言葉に、シャインミラージュは視線を下に向ける。

「――な、なんですの、これは……!?」

驚愕に目を見開き、一度ミスティを見ると再び自身の身体に視線を戻す。

変幻装姫の強い動揺は当然だった。彼女の身体には明確なまでの変化があったのだから。

「わ、わたくしの身体……一体、どうなって……」

先ず真っ先に目を引いたのはコスチューム越しからでも十分すぎるほどに見える、痛いほどにガチガチに勃起した乳首。

少し視線をずらせば白い肌を淫らに光らせる、不自然なまでの多量の汗。

さらに極めつけは、グッショリとコスチュームの股間部を濡らす淫蜜の存在だった。

（そんな……わたくし感じて……？　いえ、ストライカーフォームに戻ってからは何も……）

間違いなく、巨大な快感をその身に受けてしまい何度も絶頂してしまっているような状態だろう。

けれども、戦闘中にそんな悦感を覚えれば戦うことすら不可能。だとすれば、どこかで身体を改造されてしまっていたのだろうか。

頭の中で結論の出ない思考がグルグルと回り続ける。だが一つ確定なのは、人々にとって変幻装姫シャインミラージュは戦いながら蜜を垂らす変態ヒロインなのだということ。

「今のあなたは全身がとぉっても敏感になっちゃってるのよぉ。本当ならちょっと触れられただけで、立っていられなくなっちゃうくらいに敏感に、ねぇ」

くすくすと笑いながら変幻令嬢の今の状態の説明を始めるゴスロリ少女。

シャインミラージュはただ呆然とその言葉を聞くことしかできない。

「その切っ掛けはちょっと考えればわかると思うけどぉ……あなたがパワーアップしたって勘違いしたところからねぇ。そこから少しずつ感度が上がっていって、今はもう限界まできてるってわけぇ」

「か、勘違いですって……!?　では、この力も……ストライカーフォームに変身できたのも全部――」

「そぅ、ぜぇんぶ私達の掌の上だったってわけなのよねぇ。どうかしらぁ、最後に正義のヒロインごっこ楽しめたでしょぉ？」

目の前が真っ暗になったかのように錯覚する。嘘だと言いきってしまいたいが、今の身体の状態を知ってしまえば口から否定の言葉が出てこない。

「そういうことだ。まァ力が上がったのは本当のことなンだぜェ？　それでも本当はまだまだオレ以下でしかねェンだけどなァ。ヒヒャヒャヒャッ!!」

今まで立ったままで無言であったグラッドが、ミスティのネタばらしにつき合う形で仮面を片手で押さえながら笑う。

遊ばれていた。神聖なエナジーが呼びかけに応えてくれた正義の逆転だと思っていたのに、それらもすべてダーククライムの掌の上で踊っていたにすぎない。
「ち、違いますわッ!!　これは、神聖なエナジーの力は本物です。この力でわたくしはあなた達を倒すと……!!」
今までの希望が絶望に染められていく感覚。変幻ヒロインの脳内がまるで子供がクレヨンで落書きをするかのように、グシャグシャと黒く塗り潰されていく。
何も知らなければまだ否定できたかもしれない。しかし、ダーククライムの基地内で幾度となく行われた実験と調教を知れば、こうしたことも可能なのではと思えてしまう。
けれども、懸命に口を開き己を鼓舞するように強く言葉を発した。今まで共に戦ってきた神聖なエナジーの力を信じて、落とすまいとレイピアを強く握り締める。
「ならやっていいぜェ。前にもしたかもしれねェがサービスってやつだ」
トントンっと、存在するのかはわからないが仮面の男は心臓の辺りを指で叩き、絶望を後押しせんと挑発する。
種明かしをされてからの完全なる形勢逆転。だが、変幻ヒロインが選ぶ道など一つだけ。
「……覚悟なさいグラッド……わたくしは、何が起ころうとも絶対に負けたりはしませんわ」
レイピアの切っ先を黒衣の仮面怪人へと向ける。この一撃で終わらせるという強い意志を込めて、神聖なエナジーを高めた。
(神聖なエナジー……わたくしは信じています。ですから、わたくしに……正義に勝利を!!)
神に祈るようにして心の中で異世界の力に祈る。目の前の悪を裁く為に、正義の勝利を信じて。
「シャイン……スラストぉッ!!」
神聖なエナジーを大量に込めた必殺の威力の突きは、避ける動作を一切見せないグラッドの心臓部分へと確かに迫り……。
「んひいいいいいいいいいいいいッ!?」
レイピアの先端が触れた瞬間。変幻ヒロインの全身を異常なまでの肉悦が襲った。
まるで全身が性感帯になったかのような、空気が触れるだけですら悦感を覚えるほどの敏感さ。グラッドを攻撃した反動だけで、シャインミラージュの全身は肉の快感に支配されてしまう。
ぷしゃっと一瞬で絶頂にまで跳ね上げられた身体が潮を噴き散らし、強制的に顎(あご)が跳ね上がった。
「こ、これぇえぇッ!!　んほおおぉおおぉおぉ!!身体、一気にいいいいいいぃ!?」
完全に不意打ちとして味わう凶悪な快感刺激に蕩(とろ)けきった表情のまま舌を垂らし、強く握り締めていたはずのレイピアはカランと音を立てて地面へと落ちる。
「これで本当だって信じてくれたかしらねぇ。もう正義のヒロインごっこは終わったからぁ、後は人間達の前でグラッドに遊んで貰うことねぇ」
極端なまでのスイッチのオンとオフ。
今にも倒れてしまいそうなほどに膝が笑い、身を縮こまらせる変幻ヒロインにはもう戦うだけの余裕はないのは明らか。
それだけを確認すると、ミスティは闇に溶け込むようにして消えていった。
「こ、こんな……わたくし、身体、おかしくされてしまってぇ……んふぅ、あぁぁっあぁ!!」
僅かに動くだけですらコスチュームが擦れて耐えようのない快感が生まれる。
本当に弄(もてあそ)ばれただけ。シャインミラージュとして人々の為に戦うということすら、ダーククライムの好きにされてしまっていたという現実。
正義の逆転などもうないのだと教えられてしまったようで、変幻装姫の瞳の光が陰りを帯びる。
「シャインミラージュ……イっちまったぞ……」
「じゃあやっぱりさっきも戦いながら感じてたんじゃないのか?」
「ダーククライムに改造されたのかもしれないけど、あれじゃもう戦えない……ただの痴女じゃないか」
人々の心を再び覆う絶望の闇。
これではもうシャインミラージュの勝利など不可能だと。戦いながら感じる変態ヒロインでしかないと。目の前の事実だけでそう認識してしまう。
「お前に相応(ふさわ)しい姿にしてやらねェとな」
「あ、あぁぁぁぁぁっ……嫌、いやあぁぁあぁぁぁッ!!」
グラッドが手をかざすと、変幻ヒロインの身体が変身時のように光に包まれ始めた。
それが何を意味するのかを理解したシャインミラージュが叫ぶけれども意味はなく、時間にして数秒にも満たずに光は消える。
「う、うぅ……ストライカーフォームが……」
ストライカーフォームに身を包んでいた戦う為のヒロインの姿は消え、再びスレイヴフォームに戻されてしまった。
本来ならば両手で身体を抱き締めるようにして隠したいが、今はそれすらもできずに立ち尽くすことしかできない。
「さっきの姿でもいいンだが、お前に立場ってモンを教えてやらねェといけないからな。さて、演技とはいえさっき散々にやられた分……たっぷりとお返しさせて貰うとするかね」
今の変幻装姫にとって、表情もわからない仮面の男は圧倒的な力と絶望の象徴。

異世界転生で俺つえーのはずが、イケメントロルと子作りな件
転生しても チンポには勝てない！
冒険者とトロルに、TS美少女の肢体は犯され尽くす！
小説／狩野景
NOVEL
挿絵／爺わら
ILLUSTRATION

ありふれた1Kマンションの一室。炭酸飲料のペットボトルとスナック菓子の袋が散らばるその部屋で、羽根邑(はねむら)イクミの前に淡い輝きに包まれた女神の姿があった。

「本当になんでも願いが叶うんだな？」

その噂を知ったのはネットの都市伝説系SNS。

オブシディアン・ゴッズというMMORPGの聖なる森で豊穣の女神ニグラートという極レアNPCに出会い、高価な課金アイテム、エクストラエリクサーを使うとリアルでどんな望みでも叶えてもらえる。

（ゲームなのにリアルで願いが叶うって、まさに都市伝説って感じな信憑性の無さだよな。どんな仕組みなんだよ、それ。それにニグラートなんてキャラ聞いたこともないぞ）

半信半疑というよりほぼデマだろうと確信していた。

それでも妙に気になってゲーム内の森を歩いていたら、奇跡的に女神を見つけてしまった。

興奮に震えながらアイテムを使うと、身長三十センチほどの女神がモニターから抜け出してきたのだ。

真っ青な長い髪を薄手の布地が幾重にも織りなすゆったりとした白い衣と共に揺らめかせる。

その衣から透けて見える体つきはほっそりとたおやかながら、美麗な乳房を豊かに実らせている。

もし等身大の姿だったら目のやりどころに困っただろう精緻な美貌の女神は、妙に親しみのある笑みを浮かべてイクミに告げた。

「我が身を癒やして頂いたお礼に、一つだけ何でも願いを叶えましょう」

「よしそれじゃ、このゲームみたいなファンタジー世界に、最強チート魔法剣士で転生させてくれ」

別に何か不満があるわけじゃないけど、先が知れた退屈な日常。

そんな時にネットで読んだ異世界に転生して活躍する小説にイクミは夢中になった。

主人公たちの気分を味わいたくて、オンラインゲームにものめり込んだけれど、ますます本当の冒険生活への憧れが大きくなった。

都市伝説が本当ならいままさにその願いが叶う。

望みを告げた途端、イクミの視界が真っ白な光で埋め尽くされた。

「眩しかったな……。ってここは？」

光が収まり目が慣れてくるとイクミは質素な宿屋の一室にいた。

窓から外を見渡すとまさに中世欧州風ファンタジーのような街並みが広がっていた。

それに人間だけじゃなく亜人種や獣人など、様々な種族が通りを行き交っている。

「すごいな。本当にファンタジー世界に転生……っていうか転移したのか!?ん、あれ？　なんか俺声が高くねーか？」

興奮に叫んでしまい、その聞き慣れない声質に違和感を覚える。

しかも飛び跳ねた時に何かがズッシリと弾む妙な感触が両胸にあった。

恐る恐る俯いて確かめる。

「なんだこれ。俺に、おっぱいっ!?」

男にあるはずのない膨らみが胸から二つ盛り上がっていた。しかもかなり大きい。

「嘘だろ!?　くふぁっ！　な、なんだいまの感じ。腰が崩れるような……」

驚いてその膨らみを掴んだ途端、へたり込みそうになるような刺激が走り抜けた。

「まてよ？　じゃあここは!?」

まさかと思い、股間をまさぐる。

「ない……。俺のちんこなくなっちまってるっ！　ん、あぁ……」

手のひらにモッコリとした手応えは感じず、ツルンとしたなだらかな股間になっている。

そこも力を込めすぎると、胸とはまた違った下腹の奥が疼くような刺激に見舞われた。

「それじゃ俺は……。か、鏡！」

部屋の隅に姿見があるのを見つけ、その前に立って全身を確かめる。

「女……。これが、俺？　女になっちまったのか？」

そこに映っていたのは黒髪ロングの清楚な顔立ちの、細身だが鍛え上げられた身体に扇情的なビキニ鎧を纏う女戦士の姿だった。

安産型のどっしりとした尻と撓(たわ)わに揺れる巨乳が面積の少ない防具からいまにもこぼれ出てきそうで、普段のイクミなら目を奪われていただろう。

「なんでだ？　チート級の魔法剣士になりたいっていったけど、女にしろなんていってないぞ！」

こんなパートナーを付けてくれたというなら大歓迎だけど、自分がエロい女戦士になるなんて冗談じゃない。

「ゲームのような世界に転生が望みでしたのでオブシディアン・ゴッズで使っていたアバターを参考に新たな肉体を提供したのですが、お気に召しませんでしたか？」

不満をぶちまけると、鏡の中から女神ニグラートが現れて小首を傾げた。

「あれは男キャラだと殺風景だから、見てて楽しい女キャラ使ってただけだよ」

イクミはゲームキャラに自分を兼ねるタイプではなかった。

「別に女になりたかったわけじゃねえ！　早く男の姿に戻してくれ」

「そうでしたか。ですが願いはすでに叶えましたので、それはまた別の件となります。せっかく新しい世界で新たな人生を始めるのですから、今度は女性としての暮らしを楽しんではどうでしょうか？　それではご機嫌よう」

「まて、おい！　どこに行く!?」

役目は終わったとばかりに、女神は鏡の中に戻っていってしまった。

「嘘だろ……、どうすればいいんだよ、

こんな身体で……。いや、しかし魔法剣士としての能力は高いな」
途方に暮れながらも、念じてみるとゲームのようなステータス表示が頭の中に展開する。
いまはチート級ではなくレベル1な状態だが、初期の能力値がやたらと高い。
「レベル上げが必要ってことか。最初からチート能力じゃないんだな……」
あてが外れたけれどそれでも鍛えてゆけばとんでもない化物戦士に成長できることがわかった。
そうなると、女体化というアクシデントはあったけど、この世界で俺つえーできるようになってやろうという意欲が湧いてくる。
「レベル上げと金銭確保にはクエストを受けないとな。そうするとまずは冒険者ギルドに登録して仕事を斡旋してもらわないと」
ギルドの位置は基礎知識の一つとして記憶に刻まれていた。早速向かおうとするが……。
「そんなに急がなくてもいいか。身体が変わってまだ慣れてないし、外に出るのはきちんと調べてからの方がいいよな」
少し落ち着くと色々と好奇心が出てくる。さっき触ってしまった感じだと、かなり敏感で男と感覚も違うみたいだ。確かめておかないと取り返しのつかないことになるかもしれない。
「じゃあまずは、胸……おっぱいからだな」
形とかも見たいので、ベッドに腰掛けてビキニのブラを外す。
「おぉ～、大きいのに垂れてないし、むしろすごくいい形してる。触り心地は、どうなのかな？」
白肌の巨房を小刻みに震わせて、桃色の乳首をぷっくりと充血させる。
その撓わな膨らみを今度はそっと掴んでみる。
「うわ……すごい。なんだこの柔らかさ。ふわふわで指がズブズブめり込んでいく。それにかなり敏感だ……。そんなに力込めてないのに、気持ちいい感じがウズウズ湧いてくる……」
試しに揉んでみると、味わったことのない快感が次から次へと押し寄せてきた。
触り心地の良さも手伝って乳房から手が離せなくなる。
「揉めば、んはぁ、揉むほど、柔らかくなってるし。ふぁあ、くひ、おおぉ……身体がふわふわ気持ち良くて浮き上がる感じだ、はぁあぁぁ……。なのに乳首だけ……くひぃ、ジンジン強張ってきてる……ッ」
そのコチコチに充血した小粒肉を指先で強めにつまんでみた。
「くひぃいんっ！　おぉ、ああぁっ、なんだ、いまのっ。胸の先っぽから脳天まで感電したみたいに、激しいの走り抜けた。衝撃が……っ」
気持ちよかったのか痛かったのか判別できない刺激に息が乱れまくる。
男にだって乳首ぐらいあるけれど、それとは別次元の刺激だった。
ビクンってきた瞬間に股間の奥がキュッてなって、熱い雫がじゅわっとあふれてきた。
意識すると股間で脈打ち始めた疼きが気になって仕方ない。
「やっぱりここも、きちんと見て確かめないと。ちんこが跡形もなくなった、俺の……股間……」
脚を大きく広げて前屈みになるけれどペニスが確かに無いことがわかっただけで、その下側がどうなってるのか、さっぱり見えない。
「女だと鏡とか使わないと、自分の性器も見られないんだ。でもこれを使えば……」
テーブルの上に置かれていた手鏡を使って、陰部を写して見てみる。
「うわ……すげえ、生のおまんこだ。俺の股からちんこ無くなって、女のまんこが開いちゃってる！」
鼠蹊部（そけいぶ）に肉厚の陰唇が出来ていて、縦に割れ目を綻ばせていた。
「すごい、ここ、どんどん広がるッ」
割れ目の中にぐちゃっとしたビラビラがあって、その奥がヌラヌラした粘膜になっている。
「あぁ本物の、女のおまんこが俺に……あるんだ。はぁあぁっ」
本当に女にされちゃったんだと思うとショックなのだがそれ以上に興奮が止まらない。また股間の奥が締めつけられるような感覚に見舞われる。
下腹がキュンってなったら、まんこからじゅるって汁が溢れてきた。
「これって愛液……なんだよな？　つまりこれって、俺……濡れちゃってるんだ……!!」
男なのに膣から愛液が出る感覚を体験していた。女の身体で興奮して発情して濡れている。
童貞なので知識だけで知っていた女の生理現象を、自身で経験している。
「濡れ濡れのまんこ……。おっぱいの感覚確かめたんだし、ここも確認してみないと……。ちんこの何倍も敏感っていうけど本当なのか触って……確かめ、んうっ!!」
恐る恐る割れ目に指を挟み込ませると、確かにペニスと比べものにならない衝撃が炸裂した。
「く……ひっ、はぁ、ううっ、すご……い、こんな感じる、おぉあぁっ！　意識飛びそうになった、あぁ。愛液すごいヌルヌルだから、割れ目の溝で、指ィ滑る、くふぅ、んうぅ、はうっ」
クチュクチュと淫靡な液音を奏でながら、小陰唇を掻き回すようにまさぐる。
「あっ、あんっ、ふぁ、は、お、おぉおんっ。声出ちゃう。エロい女の喘ぎ声、んふぅ、あぁ、おまんこで気持ちいいの湧くと、勝手に、はぁんっ」
夢中で指使いを勢い良くしてゆくと、愛液の量も増えて、指も股間もドロドロのぐちょぐちょに濡れまくった。
「んひぃんっ、あぁ、ふぁあっ、こ、

著者近況　昼飯を食いに出たのですが、パンツが緩くなっていて歩いている最中にズボンの中でズルズルと脱げ落ちてしまいました。ズボンの中はチンポ丸出し状態で食べるメシは、何か清々しい気分になれました。

ここ……クリトリス、あぁ」

皮被ってるのを上から触っただけで、快感がヤバイ。

意識が飛びそうになった。触るとコチコチに充血してる肉粒の疼きがますます強くなる。

乳房をますます激しく揉み拉げながら、イクミは指を蠢かせて女陰をまさぐり尽くす。

「割れ目の下の方穴開いてる。ここが膣……!! ちんこが入るようになってる、おまんこの穴ぁ……」

自分は男だし、誰かのちんこをここに入れるなんて絶対にいやだ。

でもこの中に何か入ってくる感触はどうなのかを体験したくて指を押し入れる。

「くふぅっ、んぅ、おぉ……っ」

中に指がぬぶぬぶ入った。入れたらいきなり、穴が指を締めつけてくる。

快感を欲して反応する女の穴に少し驚きつつ、もっと刺激を与えたらどうなるのかと胸を高鳴らせて膣内の指を蠢かせる。

「あぁあううっ、はうぅんっ、ふわぁあっ、はうっ、おおぉお。なんだこれぇ、ぎもちよずぎるぅ」

愛液でグチョグチョに蕩けた襞壁を指先が捏ね回した途端、沸き立つような悦楽が、膣内から全身へ渦を巻いて広がった。

「ズルいだろぉ。おんなぁ。ちんこ、相手にならない。まんこ、感じすぎ。気持ち良すぎぎる。ヤバイ穴ぁ。あっ、はぁ、はぅうっ。おぉあぁっ！」

指で中をグチュグチュしただけで気持ち良くて頭がふわんって飛びそうになった。

濡れまくりな穴のさらに気持ちいいところを探って、指を激しく蠢かす。

「くふぅう、あぁあっ、なんだ、ここ……おぉ、他のとこより、なんか、あうっ、はぅうっ。感じる？ あっ、はうっ、変な感じっ。ぐって、痺れる感じ、奥まで響いて……、ふぁあぁっ」

色々まさぐってる内に、膣の上側の微かな窪みがやたらと感じることに気付いた。

そこをまさぐってると身体中の感度も上がっておっぱいがますます気持ち良くなる。

乳首を指でピンって弾くと息が詰まった。

「まんこのここも、あふっ、あああぁはあぁ、疼き大きくなる。止まらない。膨らんでくるっ」

集中的にまさぐるほど、快感が肥大して、何かが奥から迫り上がってくる。

射精とも違う。もっと大きな、熱いものが迫ってきた。

「はわぁあっ、まんこが指ぃ締めつけてるっ。ふぁあ、ああぁ、だめ、ああぁ、だめだこれぇ、んあ、イクッ。イクう、あぁあぁっ！」

快感が加速して脳裏を真っ白に染めながら炸裂し、膣が急激に収縮して指を締めつける。

「はぁううっ、何か出てるぅ。小便漏らした？ んぁ、いや、あぁ……これ潮噴き……!?」

股間から尿と見紛うような大量の潮を噴き上げる。

全身を何度も激しく痙攣させながら、イクミは女の絶頂に達していた。

「んくぅ、ふぁあぁ、あはぁ……。イッたぁ……。俺、女の身体であぁ……絶頂しちゃった……？ まだ全然快感……収まらない。イキ……続けてる。あぁ、あはあぁっ。女だとすぐに収まらないんだ、イクの……」

知識だけでなんとなく知っていたことだけど、自分で実際に体験してその強烈な感覚に驚きが止まらない。

「男の射精なんかと、比べものにならない……。なんでこんなに感じやすくて、気持ちいいんだよ、女の身体って。まだ絶頂してるの静まらないし……ひぅ、ああぁ……」

下腹の奥で熱く疼いているものが、ずっと脈打ち続けていた。

膣の窄まりも緩まず、中に入れている指を握り締めるように圧迫し続けていた。

「こんな感じやすい身体に、されちゃって、あぁ……。イッて、すごいドスケベな顔になっちゃってるし、俺……あぁ……はぁ……んっ」

鏡に映る自分の艶めかしい表情にも胸の高鳴りが抑えられない。

「なに自分で自分に……ドキドキしてるんだか……。でも、あぁ……女になった俺……。ん……ふぁ、あはぁ」

気にしないようにと思っても、淫靡な顔で悶える自分に魅入ってしまう。

結局絶頂の余韻が収まるまで、イクミは鏡の自分を眺めながら、ベッドの上で、身をくねらせていた。

（はぁ……すごかったな、女の絶頂。本当に男の射精とは次元が違うほど最高に気持ち良かった）

ようやく絶頂の余韻が収まり、イクミはその快楽を反芻していた。

（これ味わえるなら……悪くないかも。ああ、でもおまんこに指入るなら、ちんこも……ってことだよな？ 身体は女でも、男とセックスするなんてのは、絶対に嫌だな……）

このまま部屋で悶々と考えていると変な方向に突き進みそうだ。

それに快感の虜になって、またオナニーを始めてしまう。取りあえずイクミは、町の様子を確かめに出かけることにした。

町中を一通り歩いて回ってみたけれど、予想通りというかゲームでの街並みそのままな作りだった。

とはいっても以前はキャラを操作して移動していた町の中を、自分の身体で歩き回れるのはVR以上の臨場感だ。

（それにしてもすごく視線を感じるんだけど。それも特に男からの……。もしかして、俺の身体が女だからか？ そういえば、特に胸とか顔とか股間に視線が集中しているような……）

著者近刊 『わたしのおっぱい育ててよ！ 幼馴染みとお嬢様の育乳バトル』『目覚めると拳銃乙女を護る美少女拳士になっていた』『イチャラブ痴漢電車 間違えて乗った女性専用車両は痴漢OK!?』『目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていたF』ほか 好評発売中！

いやな事実に気がついてしまった。
確かにこの姿はイクミ自身からしても美人でスタイル抜群だし、そんなエロい体つきに露出度が高いビキニ・アーマーを纏っているから、どうしても注目を集めてしまう。
スケベな目で見たくなる気持ちは男としてわかるけれど、それでも観察される対象が自分となると非常に落ち着かない。
自然と早足になりながら、イクミは町の中心にある冒険者ギルドへ向かった。チートスキルで俺つえーするためにも、早くレベルを上げて圧倒的なスキルの数々を使用可能にしなければならない。
（まあレベルの上がり具合もかなり強化されてるみたいだから、真面目にクエストこなせば数日間で無敵なレベルまで上がるみたいだけど）
そのためにはまず冒険者のライセンスを取得しなければいけない。
幸い手続きは簡単に済んだ。
効率良くレベルアップできる仕事はないかと、依頼書が貼りつけられている掲示板を物色する。
「ねえねえキミ新人さん？　よかったら俺らと合同でトロル討伐のクエスト受けてみない？」
軽い口調のイケメンっぽい冒険者に誘われてしまった。
「助け合えば危険はないし、ソロでスライムとかちまちま狩るよりずっと効率いいよ」
詳しい話を聞いてみると、条件的に中々良かった。
ゲームではこんな感じで野良パーティに誘われるのはよくあったので、イクミは参加することにした。
「トロルが出没するのはあの森の中だ。なのでここを拠点にして、準備を整えよう」
街道を馬車で南下して鬱蒼とした森の手前に到着すると、イクミを勧誘したパーティリーダーが皆に告げる。
手早くキャンプを設営してからパーティメンバーは軽い食事を取りつつ、武具の点検をし始めた。
「ええと、俺ちょっとトイレね」
馬車に揺られているうちに、イクミは尿意を覚えていた。
戦闘開始の前に済ませておこうと、皆から少し離れて物陰を探す。
「ここでいいかな？　って、しまった。いま俺、ちんこないんだった……」
これまでの習慣で立ち小便しようとして、股間で手が空振る。
「パンツを下ろして、しゃがんですればいいんだよな？」
ペニスの無い身体で小便をするのは初めてなので戸惑う。
際どいビキニ鎧の下を脱ぎ下ろし、その場で蹲踞（そんきょ）の姿勢に腰を降ろした。
「ええと、小便ってどうやって出してたんだっけ？　ちんこじゃないから、なんだか勝手が違って……」
じょ、ちょろ、ちょぼちょぼ、じょろろ、じょじょ～～～～ッ。
「はぁ、出、出たぁ。小便。なんかチンコを通る感覚がないから、身体から直接でてる感じで変な気分だ……」
色々踏ん張っている間に、割れ目の間から徐々に出始め、尿は勢いをましていった。
しかし男の時と違って、女陰から噴き出る尿は方向が定まらず、予測不能に飛び散ってしまう。
「股が全部びしょびしょに濡れちゃうんだな、女のおしっこって。これじゃ出す度にきちんと拭かないとだめだな……」
いちいちしゃがまなくてはいけないし、濡れた股間を拭かなくてはいけない。女は面倒臭いなと、ちんこが恋しくなっていると周りに人の気配を感じた。
「おしっこ拭くのが大変なようだな。俺が手伝ってやろうか？」
初めての女体小便に集中していて、接近にまったく気付いていなかった。それはパーティメンバーたちだった。
「お、おい、小便の最中だぞ。見るなってば、あっち行ってろ！」
慌てて止めようとするけれど、尿道が短い女の小便は一度出始めるとまったく止まらない。
「用足しなんかこっそり済ませにいけば良いのにわざわざ教えるんだから、誘ってるとしか思えねえよな～」
「そもそも男ばかりのパーティに女が一人そんなスケベな装備で参加してくるんだから、もちろんその気ってことだろ？」
追い払おうとしても失せるどころか、粘った笑みを顔に貼り付かせて、男共が迫ってくる。
「その気ってどの気だよ！　く、来るな！　気色悪い目つきで見るなっ」
言われてみればパーティには男しかいないけれど、イクミも心は男なので、別に気にすることもなく参加した。
わけが分からないけれど、何かがヤバイ。小便がようやく出きったので、立ち上がって逃げようとする。
「おっと、逃げるなよ」
「あぐっ！　は、放せっ」
イクミは男にあっさりと組み伏せられてしまった。力自慢の戦士ではなく、ひょろい体型の魔導士だ。それなら払い退けられるだろうと藻掻（もが）く。
（なっ、全然ビクともしない。身体に力が入らない？　お、女だからか……）
レベルがいくらかでも上がっていれば魔法剣士のスキルで筋力も強化されていたはずだが、レベル1で素の状態だと普通の女の力しか出ない。
（くそ、もしかしたらこいつら、それを狙ってギルド登録したばかりの女冒険者を!?）
本当の女なら警戒したのかもしれないけれど、さっきまで男だったイクミには無理な話だった。
「へっへ、デカい乳ゆさゆさせやがって。誘ってるようにしかみえねえなあ」

抵抗しようと藻掻くと、どうしても乳房が弾んでしまう。

鎧の胸当てを押し退けるようにずらして、その膨らみを魔導士の手が鷲掴みにしてきた。

「ひあっ、あうぅっ、やめ……ろ、放せ……くあぁっ」

ビキニ・アーマーからはみ出した巨乳を乱暴な手つきで捏ね回されると、熱い疼きと共に蕩けるような心地良さが湧き上がってきてしまう。

這いつくばった姿勢で背後から覆いかぶさられて乳房を弄ばれる。

情けなく身をくねらせて女の声で喘ぎ声を上げる。

「お、もう早速感じてるのか？　乳首こんなにコチコチにしやがって。それにしても揉み心地十分な乳だぜ。張りがあるのに、指にもっちり蕩けて絡み付いてきやがる」

「ほう！　俺にも揉ませろよ」

夢中になる魔導士の反応に、他の冒険者たちも興味を持って、一斉に乳房に殺到した。

「やめ……ろ、ああぁ、なんで、こんな……ッ。くそ……気色悪いのに、はぁうぅぅ～～っ」

同時に何人もの手に乳房を揉みまくられて、それぞれに違った刺激がイクミを苛む。

（こんな……刺激っ。なんでこんな膨らみ揉まれただけで、ますます身体……力抜けるんだ？　俺、男なのにデカいおっぱい男に揉まれて、気持ち良くなっちゃってるっ）

認めたくないけれど、肉体は完全に女でその快感に翻弄される。

「しっかり乳で感じてるし、もうそろそろ良さそうだな」

舌舐めずりしながらそう呟くと、戦士はビキニ鎧のパンツ部分を一気に引き下ろした。

「はわっ！　何を……おをぉ、あわぁっ！　そ、そんなところ、触るな……くふぅ、うぅ、はぅうううぅ～～っ！」

股間の秘部を戦士の指がまさぐった。その瞬間、狂おしい刺激に下腹の奥から全身へ快感の衝撃が走り抜けた。

「もうすっかりと濡れまくってるなこの女のおまんこ。これだけ感じさせてやったんだ。今度は俺たちのちんぽを気持ち良くしてもらうか」

そう言いながら戦士が自分のペニスを引っ張り出し、他の者たちもそれに続いて次々と股間を露出させる。

「ひっ、なに出してんだ！　そんな汚い物、俺に見せるなっ」

赤黒く充血した極太の陰茎は、どれも恐ろしいほど太くて、しかも黄ばんだ恥垢にまみれて、イカ臭い汚臭を放っていた。

（なんだ……こんなにデカいのか？　この世界の男のチンコはっ。いや、俺のチンコとそんなに変わらない……。でもやたらとデカく感じるし、それに……、こ、恐い……？　俺のいまの身体が女……だからか？）

元の身体だったらただの嫌悪だけだったはずだが、女の本能が犯される恐怖を感じてしまっている。

「汚いか？　それじゃお前の口で綺麗にしてくれよ」

這いつくばって顔をしかめるイクミの口へ、戦士が下卑た笑みを浮かべながら膝立ちで男根を押し込んできた。

「ぐぼぅうっ、おばあぁ、やめぇ、んぷふぁ、きひゃない、やめぉお」

押し出そうと藻掻くと、舌が亀頭を舐め回してしまう。

剥がれた恥垢の饐えた風味が涎に溶けて口いっぱいに広がり、吐き気を催させる。

「ほら、どうした。もっとしっかりしゃぶってくれねえと、ちんこ綺麗にならねえぞっ」

慌てて舌を引っ込めると、男は腰を繰り出して口中を掻き回し始めた。

「ぐぶっ、んぶぅ、やめ……。そんなの、しゃぶりたく、ない……あぐぅ」

男なのに他人のチンコを咥えさせられるなんて、最悪すぎる。なのに身体は妙な火照りに見舞われて、下腹では疼きが生じてきている。

「待ちきれなくてそっちにぶち込んじまったのか。じゃあ俺は遠慮無く、こっちをもらうぜ」

そう告げるなり乳房を弄んでいた魔導士が背後で膝立ちになり、イクミの尻を抱え込む。

「んぶぁ、にゃにを？　よ、よしぇえっ！　んぐぅぅ、あぶぅっ」

嫌な予感に振り払おうと藻掻くが、喉の奥までちんぽを咥え込んでしまい、たまらず呻く。

その間にも魔導士は勃起したペニスを露出して、バックから股間へと押し当ててくる。

「はぐうっ、なにっ、おぉぁあっ、なん……だ、これっ、はうっ、何か、入……って。ひゃめろぉっ、うぐうっ」

潤んだ穴に硬く熱い切っ先がめり込み、危険な脱力感が襲い掛かる。

慌てて手足をバタつかせて暴れるけれど、男たちの手が腕や脚をガッシリ掴んでいて振り解けない。

「そんなにはしゃぐなよ。チンポきちんと入らないだろ」

「んふぁ、らめぇ。おぉあぁ、そこぉ、やめ、くふぁ、は、ああぁ」

魔導士の指がクリトリスをコリコリしながら、亀頭をしっかり膣口にはめ込んでくると、それだけで甘美が全身に広がって力が入らなくなる。

へなへなと崩れ落ちる腰を魔導士の手に引き寄せられ、灼熱の極太がバックから女陰を貫いてきた。

「うぐっ、あ、ああぁっ、やめッ、ふぁあ、太……いッ、はぐっ、裂けるッ、あがあっ、痛いッ」

やたらと太くて硬い怒張した竿は、股間に開いた穴を無理矢理押し広げて入ってきたが、何かに突き当たってすぐに止まった。

「おおっ、こいつ、こんなスケベな鎧着てるくせに処女だぞっ。たまんねえっ！　一番目、食わせてもらうぞっ」

舐めまわすような下劣な視線が
見世物にされた少女に降り注ぐ！
ネトラレ異世界転移
Netorare
Another World
Transition
身体を差し出す少女騎士
第五話 淫欲の中に堕ちゆく異空騎士
小説 NOVEL／上田ながの
挿絵 ILLUSTRATION／弥弛

前回のあらすじ 夏凛とのすれ違いが続く中、王女レイリアに想いを告白され戸惑う奏多。だがその直後に隣国の王子とレイリアの婚約が決まり、奏多は王女にも恋人にも会えない寂しさを抱きながら独り過ごすのであった。

（結婚した……レイリア様が……）

隣国の王子とやらがこの国にやって来た。レイリアと結婚する為に。その日以来、奏多はレイリアとは会っていない。夫がいるからだろうか？　以前のようにレイリアが自由に城内を歩くことはなくなっていた。

そのことに寂しさを――いや、嫉妬のような感情まで抱いてしまう。自分を好きだと言ってくれた子が、キスまでしてくれた子が、別の男のものになってしまったのだ。嫉妬心を抱かない方がおかしいのかも知れない。

しかし、そんな自分が本当に嫌だった。

（僕には夏凛がいるんだ。それなのにこんな感情を抱くなんて……最低だ）

自分自身への嫌悪感。自然とため息が口から漏れ出てしまった。

（夏凛……夏凛を抱き締めたい）

同時にわき上がってくる夏凛への想い。夏凛を抱き締め、キスをしたい。夏凛と一つになりたい――そんな感情が溢れ出してくる。

まるでレイリアの身代わりのように……。

（本当に僕って最低だな。でも、だけど……夏凛が欲しいよ）

気持ちを抑えることができない。

けれど、現在夏凛は講義の為に部屋を出てしまっている。ここにいるのは自分だけだ。

「……夏凛」

今の奏多にできることは、寂しさを感じながら、ポツリと恋人の名前を呟くことくらいだった。

＊

（行きたくない）

夏凛はそんなことを考えながら、いつもの講義室へと向かっていた。

正直足はかなり重い。ジェイドと顔を合わせたくなかった。

グエースに抱かれた後、ジェイドに優しく扱われ、安心感のような感情を覚えてしまった。それが本当に奏多に対して申し訳なかったからだ。ある意味抱かれてしまった以上に酷い裏切りをしてしまった気がする。あのような感情を抱くなど二度とあってはならない。だからこそ、ジェイドと会いたくはなかった。しかし、ジェイドに抱かれなければ奏多を家族の元に帰すことができない。

（力はかなり溜まっている気がする。あと少し、あと少しで奏多を帰せるだけの力は溜まるはず。だからもう少し、あと少しだけ我慢を……）

奏多の為に――言い訳のように考えながら、いつもの様に講義室の戸を開けた。

室内にはにジェイド――だけではなく、何故かグエースもいた。

「おお、これは夏凛様。お久しぶりでございます」

脂ぎったハゲ親父が薄気味悪い笑みを浮かべて見せてくる。ゾクゾクと背筋に悪寒が走った。

「なんで？」

思わずジェイドへと視線を向ける。どうしてこの男がここに、この場にいるのか――と。

「もう一度貴女を抱きたいと思ったからです。夏凛様、貴女の身体は最高だった。これまでワシが抱いてきたどんな女達よりもね。だから、あの一度だけでは満足できない。だからもう一度。それも、今度はゴムなんて無粋なものを着けずナマで貴女を堪能させていただきたい」

問いに対しグエース本人が返事をしてきた。どこまでも欲望に塗れた返事を……。

「そ、そんな――」

そんなことできるワケがない――夏凛は反射的にそう口にしようとした。

「それは無理ですグエース様」

だが、そんな夏凛よりも早く、ジェイドが口を開く。ジェイドがグエースに対して拒絶の言葉を口にした。

「無理？　何故だ？」

「一度だけだと約束したでしょう？　それなのにまたなど……。いたずらに夏凛様に負担をかけるだけです。異空騎士を戦闘以外で消耗させるなどもってのほか……それはグエース様だって分かっているでしょう？」

夏凛を気遣うような言葉をジェイドは口にする。

（戦闘以外で消耗させるのはもってのほか？　それを……それをお前が言うのか。お前がっ！）

そんな感情がわき上がってくる。

だが、感じるものはそれだけではなかった。同時に何故か自分を庇ってくれていることに少しだけれど安心感まで覚えてしまう。またしてもグエースに陵辱された後にジェイドから向けられた気遣いの感情を思い出してしまう自分がいた。

「もちろん分かっているさ。だからこそ、今回が最後だ」

当然夏凛の感情になど気付くことなく、グエースはジェイドにしつこく欲望を告げる。

いや、それだけではない。

ねっとりと絡み付くような視線を夏凛へと向けて来た。

「イヤよ！　絶対にイヤッ!!」

記憶が蘇って来る。グエースに抱かれた最悪の記憶が……。想起するだけで吐き気がこみ上げてくる。あんな想い二度としたくはない。

「イヤですか。なるほど……。まぁ、それならば諦めますが。それでいいのですか？　夏凛様、貴女はあの従者――カナタ＝クシマ殿を元の世界に帰してやりたいのでしょう？　貴女も戦いが終わったら元の世界に帰りたいのでしょう？」

などと口にしてきた。

「ワシにはね。権力はあるのです。ワシが許可を出さなければ、帰還の儀式を執り行うことはできない。例え王族が認めたしてもね」

「――っ」

「さぁ、どうしますか？」

登場人物紹介

【夏凛】お堅い性格の美人JK。幼馴染の奏多と共に異世界に召喚される。【奏多】夏凛の幼馴染で中性的な外見の少年。【ジェイド】性格にやや難のある王国随一の魔導師。【レイリア】異世界のお姫様。夏凛、奏多を召喚した張本人。

好色そうな瞳を向けてくる。全身を舐め回すような視線だった。あまりにもおぞましすぎる。こんな男に再び抱かれるなんて考えるだけでも吐いてしまいそうだった。

そんなグエースとは対照的にジェイドは心配げな視線を向けてくる。

（見ないで……。そんな目で私を見ないでよ！）

そんな彼の視線に、どこか安堵のような感情を抱いてしまう自分が嫌だった。

（お前に心配なんかされたくないっ！）

弱みにつけ込んで自分を汚した男だ。自分に奏多を裏切らせた男だ。そんな男に気遣われたくなどない。そんな男に気遣われて安心などしたくはなかった。だから――

「……わ、分かった」

この程度なんでもないとジェイドに伝えるかのように、グエースに対して頷いて見せた。

「くく！　これはいい！　いい選択です。流石異空騎士！　素晴らしい答えですぞ。再び貴女の身体を……くく、たっぷり堪能させてもらいますぞ」

その答えにグエースは満足そうに笑うと――

「では、準備がありますからな。準備ができ次第迎えのものをこちらへと差し向けますよ」

などという言葉を残しこの場から去って行った。

講義室には夏凛とジェイドだけが残される。

（準備？）

一体何をする気なのか？　酷く嫌な予感がした。

「本当に良かったのですか？」

そんな夏凛にジェイドが尋ねてくる。

「良かったもなにも……受け入れる以外の選択肢なんて……」

「まぁ確かにそうですね。しかし、今度は確実に膣中出しされることになりますよ」

「……それは」

膣中出し――これまで奏多にしかさせてこなかった行為だ。ジェイドとする時だって毎回ゴムを着けていたというのに……。

（あんな男のものを……）

自分の膣中に注がれる――想像するだけで頭がクラクラした。

（もし、もし……膣中に……射精されて、そして……）

妊娠なんかしてしまったら……。

これまでとは比較にならない裏切りだ。奏多に対して合わせる顔がない。

唇を噛み締める。ギュッと強く拳を握り締めた。

するとジェイドが動き出した。室内に置かれた棚を開くと、その中から錠剤のようなものを取り出し、夏凛へと差し出してきた。

「これは？」

「避妊薬です。まぁ、ゴムよりは効果は薄いですが、なにもないよりはましでしょう。本当は避妊魔法の方がいいんですが、生憎私は使えないのでね。今回はこれで我慢してください」

「……」

無言でその錠剤を受け取る。

避妊薬――これを飲めば妊娠を防げる？　そう考えると、少しだが安心感を覚えることができた。

（つて、だからこいつで安心なんかしちゃ駄目だ）

慌てて自分自身に言い聞かせる。ジェイドは最低な男なのだ――と。

そんな時だった。

「――え？」

唐突にジェイドが自分を抱き締めてきたのは……。

「な、何を？」

全身がジェイドに包まれるような感覚が走る。温かな男の体温が伝わって来た。戸惑いの声を反射的に漏らす。するとジェイドは――

「もう二度と私以外に抱かせたくはなかったんですがね……」

などという言葉を口にしてきた。

私以外に抱かせたくない――その言葉が頭の中に染み込んで来る。嘘をついているようには聞こえない。心の底からそう思っているようにしか……。

だからだろうか？　一瞬胸が締めつけられるような感覚が走る。

欲望の為だけに自分を抱こうとしているグエースとは違う。本当にこの男は自分のことを……。

心が揺れた。

（ち、違うっ!!）

だが、すぐに正気に戻ると、夏凛は躊躇うことなくジェイドの身体を突き放した。

「ふざけたことを言うな！　私は……私はお前にだって抱かれたくなんかない！　私は……私は……奏多の恋人なんだから」

ジェイドにだけではない。それは自分自身にも向けた言葉だった。

「……そうですね」

そうした言葉にジェイドは頷く。彼が浮かべる表情は、どこか寂しげなものだった。

そのせいだろうか？　再び心が揺れてしまう。

（違うっ！　違うっ！　違うっ!!）

そんな自分に対し、怒りのような想いを夏凛は膨れ上がらせるのだった。

＊

――数刻後。

グエースが差し向けてきた使いによって夏凛は城内の広間へと連れて来られた。その中央に置かれたステージ。その上に立たされる。

ステージ下には、多数の男達の姿があった。

全員見覚えがある。この国の貴族や、城下の有力商人達などだった。

『夏凛様、貴女のお陰で安心して寝られるようになりました。ありがとうございます』

『夏凛様、ありがとう。この世界に来てくれてありがとう。本当に……』

『家族を救ってもらいました。私は…

著者近況

皆様こんにちは上田ながのです！　って、ん？　なんだ？　この挨拶、さっきもした気がするぞ!?　まさか……これがデジャブって奴なのか!?
まぁ、いいか。えっと、夏凛ちゃんの大冒険もあと一回！　皆、よろしくな！　ん？　デジャブ……？

…私は、生涯この恩を忘れません』

様々な感謝の言葉を夏凛に投げかけてくれた人々である。なんでこんなに大勢の人がいるのだろうか？　わけが分からない。

てっきりまたグエースの部屋で抱かれるものだと思っていたのに……。自分の隣に立つグエースに「どういうことなの？」と思わず尋ねた。

その問いに対する答えは――

「どういうこと？　くく……夏凛様……これから貴女にはこの場に集まっている全員に抱かれてもらいます」

まるで想定していなかったものだった。

「――なっ!?　ぜ、全員に？　ふざけないでっ!!」

「ふざけたことなど言っていませんよ。ワシは本気です。くくくく」

「な、なんでそんなこと……」

「なんで？　もちろん、ワシの地位を盤石なものにする為ですよ。ワシに従えば異空騎士を抱くことができる。この国の救世主を自分のものにすることができる！　男としてこれほど栄誉なことはありませんからねぇ。そんな栄誉をワシに与えてもらった――となれば、当然皆、ワシに感謝し、ワシの力になってくれる。というワケですよ」

つまり、夏凛に自分の権力確保の道具になれと言いたいらしい。グエースの言葉はどこまでも自分本位なものだった。

「誰がそんなことの為にっ！」

当然拒絶しようとする。

「拒絶するのは構いませんが、この場にいるのはこの国の有力者達だ。貴女と従者の帰還――その許諾をするのはワシを含めたこの場にいる貴族達だ。この意味……分かりますね？」

この場にいる人間に反対されたら帰れない――グエースはそう言いたいらしい。

「……卑怯よ」

「くくく、卑怯で結構。それで、どうしますか？　抱かれて……くれますか？」

グエースの問いかけ――選択肢などなかった。

「……好きに……すれば」

最悪な男から目を逸らすと共に、力なく呟く。

「ありがとうございます。では、夏凛様……早速ですが服を脱いでください」

「え？　こ、ここで？」

「もちろんですよ。皆に貴女の美しい肢体を見せてあげてください」

ニタニタとグエースは笑う。そんな大臣から視線を外すと、改めてステージ下へと視線を向けた。

十数人の男達が自分を見ている。

彼らの瞳はじっとりと熱を帯びていた。

以前顔を合わせた際に向けて来た感謝の表情とはまるで異なっている。獲物を狙う獣のような目だった。まるで娼婦を見定めているかのようにさえ見えてしまう。

（結局……こいつらにとって私は人じゃない。魔王を倒す為の道具で、欲望を満たす為だけの道具でしかないんだ……）

自分を人として見ていない。あの感謝だってただ、表面的なものにすぎなかったということだ。

怒りがわき上がってくる。いや、怒りだけじゃない。殺意まで……。この場にいる全員を斬り捨てたい。そんな感情まで抱いてしまう自分がいた。

けれど、それはできない。

（奏多の……奏多の為だから……）

そう自分に言い聞かせ、わき上がる感情を抑え込んだ。

その上で身に着けていた服に手をかけると、グエースの命令に従って下着ごとすべて脱ぎ捨てた。男達の前に生まれたままの姿を晒す。

上向きの形のいい乳房。キュッと引き締まった括れ。薄めの陰毛に隠された秘部――本来ならば奏多にしか見せてはならない自分のすべてを無数の男達に見せつける。

集まった男達は「おおおっ」と歓声を上げた。

「あれが異空騎士の身体！」

「素晴らしい。最高の造形だ」

「あの乳房、あの秘部……見るだけで射精しそうだ」

男達が視線で肢体を舐め回し、こちらの思いなどまるで斟酌しない言葉の数々を向けてくる。羞恥だけではなく、男達に対するどうしようもない程の嫌悪感が膨れ上がって来た。こんな連中を救う為にこれまで……。そんな想いまで抱いてしまう。

そうした感情などまるで気にすることなく――

「二〇万だ！」

いきなり一人の男が数字を口にした。

いや、一人だけじゃない。

「俺は三〇万！」

「四〇だっ!!」

次々と数字が上がっていく。

「これは？」

肢体に絡み付いてくる男達の視線に羞恥を覚え、右手で胸を、左手で股間を隠しつつ、グエースに数字の意味を尋ねた。

「ん？　ああ、貴女の値段ですよ」

「値段？」

「そうです。一番高く値段を上げたものから順番に貴女を抱くことができる。異空騎士を抱く順を決めるオークションというわけです」

「おーく……しょん……」

どうやらこの場にいる男達にとって、本当に夏凛はただの性処理道具でしかないらしい。

（こんな……こんなこと……）

人としての尊厳さえなくなっていくような気がした。

（助けて……奏多……）

思わず恋人に救いを求める。けれど、何を思ったところで奏多に届くことなどなかった。

「一〇〇万だ！」

著者近刊　『女体化捜査官イブキ　屈辱と快楽の強制性転換』『奴隷の私と王女様～異世界で芽吹く百合の花～』『孤独なビッチ　異世界風俗のモン娘とエルフと魔王和え』、二次元ぷち文庫でも『魔法少女テッカメン！』など公開中！　好評発売中！

貴族の一人が声を上げる。
その数字に他の男達がざわめき、そして――
「では、トプハム＝ハット卿……最初の男は貴方に決まりだ」
グエースが高らかに宣言した。
こうして、最初に夏凛を抱く男が決まった。

「ここで……こんなところで？」
広間の中央に天蓋付きのベッドが置かれた。その周囲を男達に囲まれた状態で、夏凛は一〇〇万という値段を自分につけた下腹にでっぷりと肉をつけ脂ぎった男――トプハムと向かい合う。以前この男には「貴女には娘を救っていただいた。本当にありがとうございます」と感謝されたことがある。だが、あの時とまるで状況は違った。
「素晴らしい身体ですなぁ。流石は異空騎士。まさか、夏凛様とこのようなことができるとは、これほど男に生まれて幸せなことはありませんなぁ」
ニヤつきながらトプハムがベッドに横になる。
「さぁ、夏凛様……私に跨がってください。貴女自身の手で、私のものを貴女の膣中に」
その上で騎乗位でのセックスを求めてきた。
（跨がる？　私からこの男の上に？　私からこれを……膣中に？）
されるのではない。自分でする。
あり得ない。やりたくない。当然躊躇う。だが、したくないからといって固まっていても、全裸で男達に囲まれるという悪夢のような状態から逃れることはできない。奏多の元に帰ることはできない。
（だったら……）
早く終わらせた方が辛い時間は短くすむだろう。
（仕方ない。こうするしかないの……。だから……）
奏多。奏多。奏多――全部奏多の為だから。
そんなことを考えながら、トプハムに跨がった。同時に既に勃起している肉棒に手を添える。肉茎に指で触れた途端、ビクビクッと激しくペニスが震えた。指先に熱気が伝わってくる。反応、熱さ――すべてはおぞましかった。
だが、感じるものはそれだけではない。肉棒に触れた途端、身体は思い出してしまう。セックスの快感を……。
そのせいだろうか？　自然と秘部からは愛液が溢れ出し、秘裂は左右にクパァッと開いていった。
（……くううう）
自分の身体が以前と違うものに変えられてしまっているという現実を突き付けられる。
（ごめん……奏多）
改めて奏多に対する申し訳なさを覚えた。
ただ、謝りつつも行為を中断はしない。いや、することなど許されない。
手で肉先の位置を調整すると――

「んっく！　あっ！　んっんっ……んふうううう」
腰を落とし、自ら肉棒を蜜壺へと導き挿入れた。
（これ……熱い！　んんん！　凄く……熱いっ！　違う。全然……ゴムと……違うっ!!）
ナマのペニスの感触が膣壁に伝わってくる。刻まれる熱気は、ゴム越しに感じるよりも遥かに大きなものだった。膣壁が火傷してしまうのではないか？などということさえ考えてしまう。しかも、伝わってくるのは熱気だけではない。
（分かる。これ……形が……こいつの形まで……はっきり……分かってしまう）
膣壁を通じて肉棒の形が伝わってくる。まるで蜜壺そのものがペニス型に変えられていくかのような感覚だった。
（大きい……。奏多のよりも……。でも、ジェイドの……くっふ……んふうっ……ジェイドのよりは少し……んんんっ）
無意識の内に恋人のものと、更にはジェイドのものとも比較してしまう。
「おおお、凄い締めつけだ。絡み付いてくる。素晴らしい！　夏凛様のまんこは実に素晴らしい！」
夏凛の思いになどは気付くことなく、トプハムが歓喜の声を上げる。いや、言葉だけではない。ペニスでも喜びを訴えるように、膣中で激しくビクッビクッビクッと震わせてきた。

「んっふ……くふんんっ」
その震えが膣壁を通じて肉体に流れ込んで来る。途端に散々快感を刻まれ続けて来た肉体は、簡単に甘く痺れるような刺激を覚えてしまった。肉棒の震えに合わせるように、夏凛も肢体を痙攣させる。自然と鼻にかかった吐息も漏らしてしまった。結合部からはジュワアッとより多量の愛液が溢れ出す。
「おおお！　締めつけがまたきつく！　これは……夏凛様、貴女も感じているのですね」
「そ、んな……ふくうう！　そんなことはぁ！」
当然否定する。
「嘘をついては駄目ですよ。ほら、これでもですか？　これでもまだ、感じていないなどとふざけたことを口にできますかなぁ？」
しかし、否定したところでトプハムは肉棒を引き抜いてなどくれなかった。それどころか、自分から腰を振り始める。ギシッギシッギシッとベッドが軋む程の勢いで、肉槍を抽挿させてきた。
「はっく！　んふあっ！　あっあっ――はぁああ！　うっご、これ……んんん！　動いて！　私の……あんん！わ、たしの……膣中で……熱いのが……硬いのが……」
「熱いの、硬いの――ではありません。ちんぽと言うのです。ちんぽが動いている――と。言わなければ、従わなければ、元の世界には戻れませんぞ」
身体を突き上げられ、ブルンッブル

ンッと乳房を揺らす夏凛の耳元でグエースが囁いてくる。本当にどこまでも最低な男だった。しかし、帰れないという言葉を出されてしまっては抗うことはできない。

「ちん……ふくうう！　ちんぽが……ああああ……ちんぽが動いてる！　私の奥……子宮まで……ちんぽ……んんん！　と、どい……はふう！　届いて……しまって……い、るぅう」

ちんぽ――下品な言葉を口にする。恋人以外の男達の前で……。

「異空騎士がちんぽ！　ああああ……やばいなこれは」

「早く、私も早く抱きたいものだ」

周囲の男達が興奮の声を漏らす。

（ああ……こんなの……）

改めて状況を突き付けられる。より強い羞恥が膨れ上がって来た。

「気持ちいいですか？　皆の前でまんこの奥を突かれて感じていますかぁ？」

煽るような言葉を向けてくる。

「そんな……ふくうう！　そんな……ことはぁ！」

当然必死に否定した。

「これでもですかなぁ？」

だが、否定はより強い責めをもたらすことにしかならない。トプハムのグラインドがより大きなものに変わる。子宮を押し潰さんばかりの勢いで、膣奥を幾度も叩いてきた。

「はんん！　あっふ！　あっあっ――はぁああ！」

トプハムのペニスはジェイドのものと比べれば小さなものだ。けれど、奏多のものよりは遙かに大きい。だからだろうか？　届いてしまう。気持ちがいい場所にまで肉先が……。

その結果、突き込みに合わせて肉悦を覚えることとなってしまう。感じたくないという想いさえも蕩けてしまいそうな愉悦が、ピストンに合わせて肉体に刻み込まれる。

「おお、イヤらしい声だ。堪らんな」

周囲の男達が歓喜する。

「やっは……声……んんん！　こ、えが……んんん！　声……駄目。やっだ！　こんな……いや！　んんん！　イヤ……なのにいいっ!!」

喘ぎ声を抑えることができない。広間中に、この場に集まっている男達に聞かせるように「あっあっあっ」と快楽の悲鳴を響かせてしまった。

「大勢の前で喘ぐ……異空騎士様は飛んだ淫乱騎士だったというわけだ」

「これが本当のイクゥ騎士ってか？」

楽しそうに周囲の男達が笑う。

「ああああ……いや……イヤなのにぃ！　あんっあんっ……そっこ……すごいぃ！」

耐えねばという思いだけで抗えるような愉悦ではなかった。

「その声……くううう！　そんな声を聞かされたら、我慢などできなくなります。もう……もう出しますよ！　夏凛様、貴女の膣中に沢山注ぎますよ！」

そうした嬌声に興奮をより煽られたのか、トプハムが限界を訴えて来た。出すという言葉を証明するように、膣中の肉棒をこれまで以上に膨れ上がらせてくる。

「だ、駄目！　それは……それは駄目！　膣中は……んんん！　な、かは……駄目ぇえっ!!」

注ぐという男の言葉に血の気が引いていく。

（いやだ。それは……それだけはイヤだぁあ）

ナマですると受け入れたときから覚悟はしていた。ジェイドが用意した避妊薬だって飲んでいる。

しかし、改めて現実を突き付けられると、涙さえ零れてしまいそうな程の恐怖を覚えてしまう自分がいた。

「出す！　射精す！　夏凛様の……異空騎士の膣中に！　射精すぞぉ!!」

けれど、どれだけ訴えたところで、本能に支配された男を止めることなどできなかった。より激しく突いてくる。膣奥を……。

「んんん！　これ……だ、めぇえぇ！」

「さぁ、イクぞっ!!」

どじゅうううっ！

「んひんんっ!!」

止めとばかりに肉棒が突き込まれた。ボコッと下腹部が内側から膨れ上がってしまうのではないかとさえ思える程の一撃に、思わず夏凛は瞳を見開く。その刹那――

どっびゅうう！　どっびゅるるるるるぅ！

「はひいい！　あああ……きった！　でて……んんん！　でってる！　膣中に！　あああ……膣中に出てる！　熱いのが……あ、ついのが……私の……はぁあ！　私の……な、かにぃい！」

射精が始まった。膣中に、子宮に、濃厚な牡の汁が注ぎ込まれる。伝わってくるドクッドクッドクッという脈動。それと共に下腹部に熱気が広がった。奏多のものではない熱汁が肉体に染み込んでくるのが分かる。

（来てる。出てる。奏多以外のが……）

奏多以外に初めて……。

「ああああ、いや！　こんな……こんなのいやっ！　いやぁああ！」

広がる嫌悪感。自分が汚されていく気がする。絶対にあってはならないことだった。

「でも、ああ……でも、なんで？　どう……してぇえ！　イヤなのに……だ、め……なのにぃい！」

だが、感じるものは嫌悪だけではない。寧ろそれ以上に――

（気持ち……いい！　なんで？　イヤなのに私……熱いの……精液で……感じて……んんん！　かんじ、ちゃって……るぅう！　こんなの……イッく！　わたひ……はひい！　イクの！　イッちゃう……奏多以外に膣中出しされて……私……わ、たひぃい！）

強烈な快感が弾けた。

性の喜びを知ってしまっている肉体はあっさりと絶頂と押し上げられてしまい――

「んっんっ！　あんんんっ!!」

無数の男達の前で、夏凛は達した。
男の上で背筋を逸らす。顔は天井へと向け、首筋を晒した。その上でより強くペニスを締めつける。もっと出してと肉体で訴えるように……。
その求めに応えるように、ドクドクと肉棒から止め処なく精液が注がれるのだった。
「あっは……んはぁあああ……」
やがて身体中から力が抜けていく。絶頂後の脱力感に全身が包み込まれた。結合部から白濁液が溢れ出す。
（こんな……こんなの……ああ……奏多……）
現実を突き付けられる。奏多に対する申し訳なさと罪悪感で胸が押し潰されそうだった。
（いっそ……気絶してしまえば……）
この地獄から逃れることができるかも知れない。
しかし――
「まだですぞ！　まだまだぁああ！」
そんな暇は与えないとでも言うように、トプハムが再び腰を振り始めた。
「んひぃ！　あああ！　これ……嘘！　嘘ぉおお！　出した！　んんん！　だ、した！　射精……し、たのに！　なんで？　どうしてぇっ⁉」
射精直後とは思えない。膣中の肉棒は未だに硬く屹立していた。
「どうして？　そんな理由簡単です。夏凛様、貴女の身体が素晴らしいからだ。もっともっともっと――たっぷり貴女を楽しませていただきますぞぉ」
どっじゅどっじゅどっじゅ――どじゅうう！
「はふぁあ！　あっあっあっ！　子宮！　これ……んんん！　激しい！　激しすぎて……潰れる！　わた……んんん！　私の子宮……潰れ……るぅ！　あああ……なのに……潰されるのに……わた、しが……壊されそうなのにぃ！　な、んで……こんなに……んんん！　こんなに……いひのぉお！」
玩具のように身体が揺さぶられる。絶頂感の上に重なるように、新たな快感が刻み込まれた。
（感じたくなんかない。気持ちよくなりたくなんか。奏多以外で気持ちよく……なんてぇ！）
自分を性玩具としか思っていないような男に快感を刻まれるなどあってはならない。
（感じ……るな！　気持ちよく……な、るなぁ！）
必死に自分に言い聞かせる。けれど、そうした想いを嘲笑うかのように男がピストン速度を上げると、それに比例して肉悦も肥大化していった。
「はひぃ！　奥……これ、奥突かれ、ると……抑えられない！　声！　こ、えが……でて……しまうぅ」
突き込みに合わせて乳房を揺らし、桃色に染まった肌を汗で濡らしながら、歓喜の悲鳴を響かせる。
「これは……我慢なんかできないぞ」
そんな有様に興奮を覚えたのか、周囲の男達も服を脱ぎ捨て、ペニスを露わにした。
「それでは……くくく、まんこは最高額のトプハム卿が満足するまでは駄目ですが、後ろの穴ならば問題はありません。ですので、トプハム卿に次ぐ額を提示していただいたパスカル伯……ご自由にどうぞ」
ニヤついたグエースが尻へと視線を向けてくる。
「むふふ。では、ワシはこちらを堪能させていただくとしますかのう」
大臣の言葉に従うように、新たな男――パスカルがギシッとベッドに上がってきた。突き上げを受けてよがり狂う夏凛の背後に立つ。いや、立つだけではない。尻に手を添えてきた。
瞬間――
「あ……な、嘘っ⁉　なにこれ！」
唐突に夏凛の身体が輝き、全身が異空騎士服に包み込まれた。
「なんで？　どうして？」
「ワシは魔術師ですからな、これくらいのことはできるのですじゃよ。折角の異空騎士との行為ですからな。この方が楽しめる」
その言葉に周囲の男達も歓喜の声を上げた。どこまでも自分のことしか考えていない。本当に最低な連中だった。
「では、いきますぞ」
もちろん、変身させるだけではすまない。パスカルは騎士服のスカート部を捲ると、剥き出しになった尻に肉棒の先端部を向けて来た。
「あ……ま、まさか！　まさかぁあ
あ！」
男が何をしようとしているのかを察する。
「無理！　そんな……こ……んんん！　こんな状態でおし、り……までなんて……無理ぃ」
拒絶する。必死に……。
膣を犯されながら尻まで犯される⁉　考えるだけでも恐ろしい。
「やめ……やめて！　それは……やめてぇ！」
心の底からの訴えだった。だが、どんな懇願を向けたところで本能に支配された男には届かない。
「では、始めますじゃ」
パスカルの手が尻に触れた。ヒップを無理矢理左右に押し開いてくる。剥き出しになるピンク色の肛門。男は躊躇なく肉先を穴へと向けて来たかと思うと、そうすることが当然だとでも言うように腰を突き出し、巨棒を菊門に挿入して来た。
メッリ！　メリメリィイイイ！
「んっお！　ほおおっ！　おっおっおっ――んぉおおおっ‼」
押し開かれる。尻の穴がペニスによって。
「こわ、壊れる！　お尻……お、尻が……さけ……るぅう！　んふうううう」
尻でするのはこれが初めてではない。けれど、肛門が引き裂かれてしまうかのような感覚が走る。いや、それだけではない。
「つ、ぶ……れる！　私……わ、たし

転性騎士シオン
～性奴隷に堕つ～
女体化した正義の騎士団長は
想像を絶する雌調教に
人格が塗り替えられていく！
小説／NOVEL 千夜詠（せんやよみ）
挿絵／ILLUSTRATION みかん。

満月の晩、治安騎士団の団長であるシオンは、大賢者の下を訪れていた。
一冊の、今にも崩れそうな本を抱えた老人は、精悍さを持った美丈夫に、もう一度問う。
「本当にいいのだな？」
「ああ、やってくれ。これ以上、不幸な女性を増やす事は、俺の正義に反するのだ」
強き意志の込められた瞳を見て、大賢者は頷いた。シオンとは幼い頃からの付き合いである。こんな時の彼が、如何に頑固であるか知っていた。
文献を元に作り上げた魔法薬がシオンに手渡され、彼は一気に飲み込んだ。
相当に苦い。微かな顰め面があったが、しかし、直ぐにゆっくりと息を吐いて、瞳を閉じた。
若き友人の覚悟を見た大賢者は、それに応えようと呪文を唱える。
それは自然の摂理に反する禁忌の御業。神の許しなど得られるはずもなく、悪魔との契約によって成せるのだ。
だからなのか。魔法陣が騎士団長の真下で光り描かれ、やがて眩く、彼を包み込んだその時から、シオンの運命は悪戯に塗り替えられた。

＊

石製の壁と床で囲まれた牢獄と思われる場所。とある男が、己の性癖を満たすが為の牝奴隷が捕らえられている。
ここにまた一人、仲間入りするのがシオンである。
裸のままここに連れ込まれ、両手、両足を拘束された壁への磔状態にされて、碌な抵抗もできなかった。
――まさか、こんな事態になってしまうとはな。
王国には、根深い問題が幾つかあったが、その中の一つが、違法な奴隷の売買であった。
現王の代になり、それまで奴隷とされてきた者にも全て人権が与えられ、十余年が過ぎていたが、未だに一部の貴族や裕福な者の中には、求める声が多かった。特に、性的な奉仕や虐待を目的にした奴隷は根強く人気がある。
これまで取り締まった奴隷商人は、所詮は末端の捨て駒に過ぎず、何人も検挙しても後ろで糸を引いている黒幕の正体には近付けなかった。
だから、シオンは考えていた最終手段に出たのだ。
潜入捜査。その為に、彼は、禁忌の魔法によって肉体の性別を変え、落ちぶれた貴族の娘となり、シオーネと名乗った。
身動きができなくされた姿に、好色な視線が突き刺さってくる。
金髪は少し伸びて肩にかかり、ふわりと艶やかさを増し、顔立ちは溜息が漏れる程の美女となっていた。頬に触れると、柔らかくきめ細やかな肌だと分かる。背は少し縮んだが、代わりに全身は丸みを帯びて、やはり柔らかく弾力で揺れた。
掌から零れそうな豊満な乳房、腰回りは括れ、そこから臀部に急速に隆起し、むっちりとした太股、繊細そうな指先に至るまで、間違いなくうら若き女性のそれだ。
「なかなか、奴隷らしい姿になりましたね」
身なりのいい痩せた男を睨み付ける。
先程から舐め回すように全身を見詰めているのは、奴隷商人を陰から操っていたマコーラン伯爵だ。
借金の代わりに奴隷に落ちた薄幸の女を演じたシオン。奴隷を集める業者に連れていかれた廃棄砦に現れたのがマスクで顔を隠した伯爵である。
美麗な容姿は、マコーランの興味を引き、近付いたその時、マスクを剥ぎ取って正体を確認したまでは良かった。
慌てた伯爵の手下が襲ってきた。男の体の感覚で、カウンターで放った拳は簡単に受け止められ、ねじ伏せられる。
女の体とは、こうもか弱いものなのだな――分かっていたつもりであったが、実際になってみてやっと思い知るのだ。
「さて、シオーネ、お前は、騎士団の手の者でしょうか？　まあ、どうでもいいです。どうせ、暫くここにいれば、嫌でも従順になりますからね」
正面に立った伯爵は、指先を一つ豊満な肉果の合間に突き立て、ゆっくりと下に向けて移動させる。
シオンは表情を変えぬまま、黒幕を睨み付けるばかり。
――ふん、随分と自信があるようだが、残念だったな。俺の心は男だ。男相手に何をされても気持ち悪いだけ。
小馬鹿にする笑みさえ零してやる。こんな風に裸体を晒されても、同性の感覚で、気にする事はなかった。
マコーランは、ここで奴隷として調教するつもりのようだが、反応しない女にいつかは伯爵も飽きるだろう。その時に必ず逃げ出す機会はあるはずだ。
「ふむ……、ちょっと、確認しなさい」
「へ、へい……」
手下の一人が、下から剥き出しの股座を覗き込んできた。
「あんまり、濡れてませんぜ」
「単に、まだ恐怖心があるから、ではなさそうですね。では……」
今度は乳房を握られる。女の体になってから他人に触れられる事は初めてであったが、まだ余裕だと思っていた。
「ん……」
乳肉の柔らかな脂肪が捏ねられると、男の時にはなかった感覚に最初は戸惑い、ぐっと口元を締める。
「不感症というわけではなさそうですね。いや、むしろ、敏感な方でしょう。ただ……」
男の掌が優しく擦り、それから不意に強く指先を柔肉にめり込ませてきた。男としては感心する巧みさであったが、やはり嫌悪感の方が強い。
「無駄だ。貴様なんかに触られても、悪寒しか感じない」
「成程、よく訓練されているのか、それとも、男嫌いなのか……。では、こ

ういう趣向は如何かな？」

一度離れたマコーランは、檻の中にいた数名の奴隷女を連れ出してくる。少女と呼べる年頃から、人妻風の女もいたが、散々ここで嬲られてきたせいか、瞳に精気が見えなかった。

ただ、彼女らに拘束された裸体を見られると、男の心が反応して、つい顔を背けてしまう。羞恥を覚え、頬が赤らんだ。

伯爵は目敏くそれを確認して、

「新しいお仲間を歓迎してやりなさい。一晩中、彼女の体に愛撫を続け、性感を開発させるのです。上手くいったら、ご褒美も用意しましょう」

奴隷女らの何も考えていなかったような表情から、悪戯心が滲んでくる。妖艶さすら見せてきて、一斉に近寄ってきた。

「な、何をする？　よせ……、ん……」

ふう、と耳元に息が吹きかけられ、脇に張り付いてきた人妻風が、乳房を撫でてくる。

「くぅ……、やめ……」

物理的な刺激は先程と変わらないのに、嫌悪感がないだけで、体が素直に受け入れてしまう。すると、優しく揉まれるたびに、悦楽の波が肉果から全身へと伝っていった。

――んな……、この体、こ、こんなに気持ち良くなって……、胸を愛撫されているだけなのに。

男にはなかった膨らみが性感帯と呼ばれるのは知っていたが、こんな快感を予想するのは無理というもの。

「う、ぅう……、こんな事、やめるんだ、あふっ!?」

女の体を知り尽くした女からの胸の愛撫で、乳首が勝手に発情して勃ってきてしまう。それを見た逆隣に寄りそってきた若い女が、指先で突き、摘まみ、転がすように弄ってきた。

――ハァ、ハァ、ハァ……、おかしいぞ、体が熱くて……、あぅ――っ、乳首がこんなに感じる。

シオンとしては女性経験も人並みにあり、こうやって乳首に愛撫してくる女もいたが、数倍以上の気持ち良さに戸惑いを覚えた。

少女が下半身を覗き込んできて、

「ふふ、このお姉さん、クリトリスがビンビンに勃起しちゃってる」

「み、見るな……っ！」

正直に言えば、数人の女の裸体を目の当たりにした時から、男の心のままでは肉芽は反応してしまい、膨らみ始めていたのだ。

チュッとそこにキスされると、ピクッと確かな性感の反応を見せてしまう。

「あ……、そこは……、あっ、あ……」

ペニスにも似た器官に吸い付かれ、よく知った快感が生じた。それは男のそれよりも鋭く体中に響き渡ってきた。

「そ、そこは、ダメだ……、やめて、く……ぅ、はぁ……」

過敏な性反射を見せるシオーネとしての肉体に、少女は悪戯な瞳で見詰めてきて、肉芽を舌で転がしてくる。すると、包皮が捲れ、更に鋭敏になった性感帯に刺激が注がれた。

――こ、こんなに感じやすいのか!? 男であった時の逸物より、ずっと……。

シオンの時には決して早漏ではなかったのに、もう何度も射精したかのような快感が雪崩れ込んでくる。

「あ……、も、それくらいで……、んん――」

しかも射精しないから、終りが見えない。

太股を流れていく感触があった。それが愛液であると気付く余裕もなく、未知の感覚が生じてきた。

「ハァ、ハァ、んぐ……、あああ――、なんだこれ……、気持ちいいのが、重ねられて……、こんなの……」

乳房に乳首、肉芽を同時に愛撫されて、加えて全身を女たちの繊細な撫で回しで可愛がられる。柔肌に絶えず与えられる性の刺激に、唇でクリトリスを啄ばまれ、快感が切なく膨張してしまうのだ。

どうなってしまうんだ、俺の体は――興味と恐怖が同時に襲ってきて、しかし、伯爵の思い通りになるまいと歯を食い縛る。

「う……、こ、この……、ヒっ!? あぁあああ――、ダメだ、や、や……」

乳首にも吸い付かれ、尻肉が捏ねくり回され、そして肉芽を責めてくる舌の動きが激しくされた。

眉根を寄せながら、髪を振り乱して堪えても、一気に昇り詰めていく感覚を味わって、快感を制御なんてできなくなる。

「ぐ……んん――、込み上げて……くる。あぁあああ――」

すると、悦楽に精神が支配され、感情までもその先を求めてしまう。女の絶頂――その寸前で、

「はい、そこまで」

マコーランの命令に、女達は動きを止める。

「な――」

襲ってきた切なさは、愛撫されていた時の比ではなく、大声で泣き叫びたくなったが、ギリギリで耐えた。

「う……、ハァ、ハァ、ハァ……」

伯爵を睨み付ける瞳が意味するのは、嬲り者にされている為なのか、気をやれなかった恨みなのか、自分でも理解できなかった。

「まるで、絶頂を知らない反応でしたね。実は初心なので？　ますます調教のし甲斐がありますね」

「ふ、ふん……、この程度で終わりか。大した事ないな」

強がって言ってはみたが、全身は汗ばんで、膝が震えてしまっていた。

「いえいえ、このセットを明日の朝まで続けます。さあ、皆さん、もっと可愛がってやりなさい。ただし、イキそうになったら、制御なさいね」

「な……、何を言って……、あぅ！」

再開される女達の愛撫に、肉体は悦び、淫蜜を垂れ流していく。

これは地獄の一夜の始まりだ。

著者近刊
『言霊使いリザ　淫獄儀式の学園』『隷属ツンメイド　引っ越し祝いになってあげるんだからっ！』『俺の妹は中二病デレ　吸血姫な妹に吸い尽くされちゃう！』、二次元ぷち文庫でも『魔界王子の変態修行　委員長と侍女編』など公開中！
好評発売中！

その場から去っていく伯爵の背中を恨めしく見詰めながら、徐々にシオンの嬌声は艶めかしく変化していく。

＊

再び伯爵が姿を見せた時――空が白く輝きだした頃――壁に磔にされたシオンは両手を鎖で吊られる形で、ぐったりと力を失くしていた。

裸体は全身が汗に濡れ、最も気温の低い時間帯に、柔肌から湯気が立っている。鼻孔に届く淫靡な牝の香は、纏わりついた女の物ではなく、自分から放たれていると気付き、猥褻さを自覚させられた。

「はあ……、あ、あ……」

何度もアクメの直前で止められ、しかし、じわじわと性刺激は継続させられ、最後には哀願しそうになった。

「かなり、仕上がってますね。皆さん、ご苦労様です」

女達に労いの声をかけ、少女の頭を撫でてやるマコーランの奴隷のコントロールの術は巧みだった。

「き、貴様……」

伯爵を睨むシオンの瞳は、寝不足もあって隈ができている。横髪が頬に張り付き、掠れた声を発する様子にマコーランは満足気だ。

磔から解かれた瞬間、足元がふらつき、床にしゃがみ込んでしまう。思っていた以上に体力が削られていた。

それでも、恨めしくマコーランを見ると、意に介さない様子で微笑んだ伯爵は、指を鳴らした。

運び込まれてきたのは、正方形状の檻で、その中に蠢く物を確認する。

「そ、それは！」

ピンク色の軟体の魔物。以前それに襲われていた女性を助けた経験があった。

蛇か大蚯蚓が集まったような知性があるかも疑わしいそれは、一般に触手と呼ばれる魔物で、女性ばかりを襲い、全身の孔に潜り込もうとする。

「女相手に随分と感じた様子。やはり、男性嫌いでしたかね。なら、いっそ、こいつに慣れてしまえば、人間の男なんて、平気になるでしょう。では、お楽しみ」

檻が開かれ、塊状の触手が、外へと放たれる。

そいつは直ぐに牝の気配を察知して、ズルズルと這っては、シオンへと寄ってきた。

「く、来るな……」

かつては、この気持ち悪い魔物を相手に果敢に剣を抜いて切り刻んだ男も、今は得物もなく、か弱い女の体だ。

一晩中、全身を愛撫された体は、素早く立つ事もできず、触手の一本が、片足に絡み付いてきた。

外皮がなく粘膜状の肌で、全体が粘液に塗れているそれに、酷い悪寒を感じる。

「ヒイ……」

しかし、二本、三本と四肢を捉えられ、太股を擦られると、股間の中心から甘い痺れを覚えて、奥に溜まっていた淫蜜が零れてしまった。

「はぁ――、い、今のは……？」

女達に性的に甚振られていた時と同様の快感であったが、悍ましい姿を見れば、簡単に認められない。

逃れようと身じろぐ女体に、更に数本の触手が伸びてきて、軟体魔物で拘束されてしまう。

「こ、この、離せ……、ひゃぁ!?」

乳房が裾野から巻かれ、質量を誇張するように絞られると、圧迫も悦になって、脳内に染み込んできた。

「うう……、こ、こんなので……」

堪えるように眉根を寄せる表情に、調教のプロフェッショナルは、指摘してくる。

「イきたがっている体が、強い刺激を欲しているのですよ。それがたとえ、こんな醜い触手の魔物相手であっても、ね」

全ては伯爵の計算通りか。

抗おうと意識を憎悪だけに向けようとするのだが、肉裂を触手が突いてきて、また電流のような快感を覚えてしまう。

「ダメ……だ。そ、そこには……」

それでもそこは妊娠する為の器官。ぞっとする未来を想像しては、必死に性刺激に喘ぐ体を制御して、股間をきつく閉じようとすると、無防備な尻孔に一本の先端が押し付けられてしまう。

「そ、そこは――」

脚を交差するように股を締めた為、開いた尻谷に潜り込まれていた。慌てて尻を閉じようとしても遅い。

ヌブブ――、軋むように感じると、尻孔が強引に押し広げられ、生々しい異物が入り込んできた。

「ふぎぃっ……、い、嫌だっ……、あ、あ、あ……、そんな、入ってぇ……」

引き裂かれそうな感覚なのに、女体はペニスに似たそれを受け入れる事に悦んでいる。

「な、なんだ、この感じぃ……、痛くて、気持ち悪いのに……、あ、あ……」

震える唇が自然に開き、涎が垂れて、腰がくねってしまう。人種の敵である魔物に、排泄器官を悪戯されて感じてしまう戸惑いの中、体はもっと強い刺激を、と求めた。

「ハァ、ハァ、ハァ……、お腹……引き裂かれそうなのに、熱い……」

ズボズボと抜き差しされると、呼応するように腰が跳ね動いてしまう。

「あー、あー、こんな触手の化物に……、お尻っ、嬲られて……、どうしてぇ――」

体の内側を掻き回される刺激が、全身を甘美に痺れさせる快感となっていく。泣き叫ぶような声をあげると、開いた唇に、別の触手が潜り込んできた。

「んぐぅ!?」

全身を触手どもに弄られ、喉を埋められる息苦しさに、穿り返される直腸の痛み。

それでも一晩中絶頂を求めた女体は、快感を覚えてしまう。

「んんっ、んほっ、ん、ん、ん……」

これが女の体なのか、と納得してし

ここ数年
腕の立つ戦士が
何人も行方不明に
なっていた

俺は
調査の仕事を
請け負ったが

魔物の
襲撃を受け

不覚をとり
呪いを受け
腕が動かなく
なってしまった

回復魔法を使う
高名な魔法使いを
訪ねたところ

ある洞窟の
泉の水を飲めば
呪いが解けると
言われたが…

ゴク ゴク

高名な魔法使いに騙されて女体化!?

パン

…!?

な…
なんだこれは…

女の体…!?

女体化の罠に堕ちる魔法剣士

漫画 COMIC ナギヤマスギ

その泉は
回復もするが
飲んだ者を
女にするのだ

！

さっきの
魔法使いか!?

フフフ…
言い忘れてしまったな

てめぇ
ふざけるなよ！

なんの嫌がらせだ！
元に戻せコラァ！

おいっ
出てこい！
なんとか言え！

チッ…

ぐいっ

クソっ…
高名な魔法使いと
聞いていたが
とんだ変態野郎だ

タプン

冗談じゃねぇぜ
女は好きだが

自分が
女になるなんて
まっぴらごめんだ

とにかく
あの魔法使いに会って
元に戻させねぇと…

ニュル…

ニュル…

ニュル…

ニュル…

鬱陶しい雑魚めッ…
うッ…!?
くっ…剣が重い…ッ
ズシッ…
体の動きもいつもより鈍すぎて
ブンッ
ニュル
全然思い通りに動かねえ！
ニュル
ズバッ
この乳も邪魔だッ
動くたびに揺れてッ…
ブルン
ブルン

うっ
ズュルン
クソっ 次から次へと キリがねぇ
こんな雑魚の 相手をしてる 場合じゃねぇのに…
ニュル
ニュル
ニュル
ウネ
ウネ…
!?
何ッ…!?
おぷッ
ビリリッ

う…ぐ…ッ
ぐっ
こいつらッ…体の中に入ってこようと…ッ
やべぇ…ッ
苦し…ッ
お…ご…ッ
ブルッ
ブルッ
ブビッ
う…ッ!!
ブプ…
そこは…ッ
ビクッ
はッ…入ってくるッ…
ヌププ…
ブビュッ
ブルッ

ガハッ
ゲホッ ゲホッ
ブリュンッ
なんだコレッ…
何か出しやがった…ッ
ニュル
オエッ…
ゲホッ ゲホッ
ニュル
ウネ
ウネ
ニュル
ニュル
ブル
なっ… なんだッ…!?
キュン♡
キュン♡
ひくひく
トロ〜…
ブル
ブル
ズクッ
う…ッ!?

あ…熱いッ…
なんだこれッ…
下腹が…疼くッ…
ぶるぶる
ぶるぶる
ぶるぶる
ぶるぶる
あ…ッ
びくっ
体が…おかしいッ…
このままじゃ…ッ
びくっ
びくっ
きゅう♡
きゅう♡
ひく
ひく
フフフ なかなか可愛い声を出すじゃないか
…ッ
貴様…ッ

あの醜い男がこんな美少女になるとはな
くっ…
貴様ッ…殺されたくなければ…
男に戻せッ…
フフフ威勢はいいが体が敏感になってきただろう
はー
はー
はー
この虫の体液には感度を何倍にも上げる効果があるのだ
早く触手を倒さないと次々に体液を注がれてもっと気持ちよくなってしまうぞ
そうしてイキ続けたまま戻らなくなり
一生触手の子を産み続けるのだ
子を産むだと…冗談じゃねぇッ…
こんな雑魚すぐに…ッ

新元号早々犯罪者に
TS陵辱されてしまった
宇宙警備隊長レイワの
運命やいかに…

地球警備隊 ツイン★スター

不可逆のTS孕ませ陵辱

小説 NOVEL／木森山水道（きもりやますいどう）　挿絵 ILLUSTRATION／きばすけ

1

平成から令和に移った２０××年の春。

使われなくなった採石場に、断固とした宣告が響き渡る。

「【宇宙警備機構】の名において正義を執行する！　覚悟しろ、宇宙犯罪者ダブルソード！」

若く爽やかな声を張り上げて踏み出したのは、新元轟レイワだった。

ストイックなサングラスに革ジャン姿という、スラリとした青年だ。

「地球を食い物にする異星人は、元号が変わってもあたしたちが赦さない！」

新人女優風のフレッシュな声を響かせたのは、若葉モユである。

ツリ目も凛々しい整った面差しは印象的だが、肉感的な肢体も抜群だった。

革のジャケットと「愛」Tシャツをパンパンにしている巨乳も、マイクロミニとブーツの間で露出する健康的に張り詰めた太腿も、男性ならば見逃せないチャームポイントだ。

美形の男女は手の平サイズの端末を取り出し、同時に構えて声高に叫ぶ。

「「スターエボリューション！」」

ピカァッ！

端末から溢れた光はふたりを包み、悪を倒す正義の姿に変えていく。

「宇宙を照らす炎の星、スターフレイム！」

手足の側面の炎のマークが鮮やかな、赤い全身ピッチリスーツ。バイザーも炎のデザインのヘルメット姿となったレイワは見得を切る。

「宇宙を包む愛の星、スターハート！」

上はミニスカートで下はズボンのツーピースにして、チームリーダーのフレイムのように、手足の側面に鮮烈なハートマークがある、ピッチリ桃色全身スーツ。バイザーのハートマークが煌めく変身姿に変わったモユも、勇ましく見得を切る。

「「臨場、ツイン・スター！」」

名乗りの唱和を向けられた宇宙からの犯罪者は、忌々しげに吐き捨てた。

「おのれ、【宇宙警備機構】！　オレ様のように宇宙法を破り、先進の星が発展途上の星を食い物にするが如く、未開のこの地球で悪事を働く者どもを、宇宙刑務所送りにしてきた、ツイン・スターめ！」

巨躯でヒゲヅラの悪漢は、すこぶる汚い声をしている。

トレードマーク――背中合わせの剣のマスコットが額にある、口元しか露出しない兜。

チョッキにブーメランパンツにナックル、トゲ付きの肩当てに鈍く光るレッグアーマーという、筋骨隆々で日焼けした肉体と粗暴さを強調する出で立ちだった。

「このダブルソードはひと味違うぞ！　ヤれ、オレのしもべのロバーズども！」

宇宙犯罪者ダブルソードは、二十人強の取り巻きに命じた。

部下どもは、マスクまで黒く不穏な全身スーツ姿。身体にピッチリしているので、体型や胸元で男女が入り交じっているのがわかる。マスクの上半分いっぱいには「R」が、下半分いっぱいには「O」の字が、少し丸っこいフォントで白く太めに書かれていた。

部下どもは「ロバーズ！　ロバーズ！」などと奇声を発して――マスクに変声機でも仕込んでいるらしく、全員同じ声音だった――ツイン・スターに襲いかかる。

スターフレイムは、腰のホルスターから太い警棒を抜いた。

「抵抗はやめて大人しく投降しろ！　フレイムスティック！　ハァッ！」

警棒から噴き出したエネルギーが炎を形成するや、存分に振るう。なんとたった一振りで、二、三人のロバーズがまとめてなぎ払われ、採石場の崖まで吹き飛んだ。

「罪を重ねても、出所が遅くなるだけよ！　ハートガン！　シュート！」

スターハートの武器は光線銃だった。目にも留まらない早業でホルスターから抜くなり、次々と正確に、ロバーズの胸元に命中させる。撃たれた敵はその場に崩れ落ちていく。

「ぬおっ！　あっという間に戦力が四割減だと！　戦争なら完敗だぞ！　クソがっ！　これでも喰らえ……ダブルソードクラッシュ！」

ナックルをつけた手の平からエネルギーの大剣を生み出した親玉は、驚愕と焦りと怒りを込めて、交差気味に得物を振るう。すると禍々しいビームが発生し、迸った。

「正義は悪に負けやしない！　おれたちの力を見せてやろうぜ、ハート！」

「オーケー、フレイム！」

ふたりは、さっと隣り合うなり武器を同時に使った。

「「ツイン・スター、ビッグインパクト！」」

炎の警棒の斬撃と、ガンの極太ビームが混ざり合い、七色の光となって悪へ迫る。

「なにっ！　オレ様の必殺技があっさり呑み込まれ……ぐおおおおお！」

ふたりの合体必殺技は悪の技を突き抜け、悪漢に直撃した。

「覚えていろ……次こそは……」

全身焼け焦げて満身創痍だが、辛うじて意識を保ったダブルソードは、手の平に妙な球体を出現させ、地面に叩きつける。すると彼も部下も、たちどころに消えてしまう。

「あ、緊急避難用の転移ボールを使ったのね！」

「詐欺、強盗、サイバー犯罪、性犯罪……あらゆる犯罪を行ってきたタフな犯罪者というデータは見ていたが、これほどしぶといとは……今度見つけたら必ず捕まえる！」

ツイン・スターは決意を新たに頷き合うのであった。

2

「畜生！　ツイン・スターめ！　このダブルソード様をコケにしやがって！」

著者近況　こんにちは！　元号が変わってから最初の号に寄稿できました。イェイ！　主人公の名前があなのは周知に協力――社会貢献目的です。イェイ！　元号が変わっても二次元ドリームマガジンを、どうぞよろしくお願いします！

ドガンッ！

宇宙からの犯罪者、ダブルソードは荒れていた。

酒瓶がズラリと並ぶバーめいた内装のアジトで、テーブルや椅子をたたき壊している。

周囲の部下のロバーズは、ボスの癇癪に縮こまってガタガタ震えていた。

「メディカルマシーンで数日かけて外傷は治したが、心の傷は治りやしない。あのガキどもをギャフンと言わせない限り、この悔しさは消えるもんかよ！」

と、固く閉ざされていた扉が開く。やってきたのは、白衣姿のロバーズだ。

「ロバーズ」としか喋らないのだが、それでボスには話が通じた。

「アレが完成した？　でかした！　よし野郎ども！　例の作戦を始めるぞ！」

機嫌よく宣言したボスに、部下どもはホッとした様子で「ロバーズ！」と答えた。

3

「おい、見ろよ」

「なんつーマブい、ナオンなんだ！」

「はぁ……とっても睫が長い……なんて優しい垂れ目なの……白い肌がすごく綺麗……」

「まるで映画から抜け出したお嬢様じゃない。同性でも見惚れちゃうわ」

休日の繁華街。人々は瞬きも忘れてひとりの美女に見入っていた。

シャラン……シャラン……。

その、立ち振る舞いも顔立ちも清楚な者の出で立ちは、天使の羽で編んだみたいな白い帽子、女神の召し物のようなワンピース、宝石の輝きを放つヒール。

下界の汚れた空気も浄化する純白の化身めいたうら若い乙女であったが、背中合わせの剣のマスコット付きの首のチョーカーだけは、春の太陽を浴びても黒く妖艶に光っていた。

（皆がおれを見てる……美しいと称賛している……なんて気持ちいいんだろ……身も心も蕩けるこの快感で、仕事のストレスが消えていくぞ）

これは話題の美女の心の声だが、もしも肉声だったなら、爽やかな青年の声であっただろう。

（妙なことに、店のお任せでコーデしてもらってから身体の動きが鈍い気がするが、思い過ごしだろう。普段と違う装いだからこその違和感だ）

その者は、さらに思う。

（そんなことより重要なのは、パートナーのモユに知られないことだ。ツイン・スターのリーダーであるこのおれ、新元轟レイワの女装趣味だけは、いくら信頼する彼女にも……）

往来の何十人、何百人が見惚れている美女は、なにを隠そう、地球を守るために宇宙の犯罪者と戦う、スターフレイムこと、新元轟レイワなのだ。

読者がご存じのように、彼の仕事は命がけで犯罪者と戦うこと。

自分が選んだ道なので後悔はないが、ストレスはものすごい。

着任後、色々なストレス解消法を試したが効果は薄く、辛い日々を送っていた。しかし、ある潜入捜査で女装して活動した際、ストレスが一気に吹っ飛んでしまった。

普段の自分とは性別まで異なる別人になることも、そんな自分が正義のヒーローとしてではなく、別の形で他人に褒められ、受け入れられることも、堪らない快楽なのだ。

以降、どうにも我慢できなくなると、こうして女装欲求を満たしている。

とはいえ彼には、男を性的に好む感情はない。新しい性癖を持ってからも、魅力的な女性に性欲を覚えることはあっても、男性にムラムラしたことは一度もない。

ピリリリリ！

と、変身アイテムであり、通信機器でもある端末が鳴った。

連絡をよこす者がいるとしたら、パートナーのモユしかいない。

（まさか、パトロールの前に、インターネットで好評の女装男子御用達ブティックで女装したのがバレたんじゃないよな……だとしたらコンビの危機……いや、進退問題だぞ）

杞憂を願いつつ、即座に通信に出る。

モユや地球のピンチかもしれないのだ。そうであれば、自分がどうなろうとも駆けつける。普段から彼の心にあるそんな気概が滲み出た、躊躇いのない応答ぶりだった。

『こちらレイワ。どうしたモユ！』

『こちらＢ地区のモユ。中央広場でダブルソードの手下の、なんでか「ロバーズ」しか喋らないあいつらが、二十人くらい暴れてるの！　シュート！』

どうやら既に交戦しているらしい。通信機からは戦いの喧噪と人々の怒号が聞こえる。

『妙なアイテムをバラ撒いてるのよ。もしも別働隊に出くわして投げつけられたら、撃ち落としちゃって』

『了解した。でも、妙なアイテムって、具体的にはどういう物なんだ？』

『見た目は、綺麗で豪華なアクセサリー。でも、身につけさせられた途端、性別が転換して、男が女に、女が男に変わるＴＳアイテムよ！』

4

話は少し遡る。

地球を守るツイン・スターのリーダー、スターフレイムこと新元轟レイワが、ストレス解消していた頃、スターハートこと若葉モユは、警邏中に騒動に出くわしていた。

宇宙の犯罪者ダブルソードの一味の雑魚戦闘員ロバーズが、悪さをしていたのである。

「逃げろぉ！　男は女になって、女は男になっちまうぞ！」

「そんな！　性転換の原因のこのアイテムが、ぜんぜん外れない！」

「「「「ロバーズ！」」」」

二十人強ほどの悪の集団は、人々になにやら投げつけている。

著者近刊　『健昂優良ビビッド・ガール　淫らな体育祭で寝取られる淫紋ヒロイン』『学園天使ツイン・セーフティ　～ヤリチンＤＫ怪人 卑劣な寝取り調教作戦～』『元女騎士は新人スパイ　先輩エルフと挑むオークの館潜入ミッション』ほか　好評発売中！

それは、背中合わせの剣のマスコットが付いたアクセサリーだった。
悪党どもから放たれると、まるで自分の意思を持っているかのように、ブレスレットタイプは腕に、ブローチタイプは胸元に、チョーカータイプは首に巻きつくという具合に、それぞれあるべきところにくっつく。
するとどうだろう。男性の身体はみるみる豊満で凹凸のある女体に変わり、逆に女性はガッシリした男の肉体に変貌するではないか。
「性転換のアイテム……TSアイテムというわけね。妙なアイテムを開発して、世間に迷惑をかけるなんて、絶対に赦さないんだから！」
アイテムの餌食になった数十人が嘆き悲しむ中、他の人々が蜘蛛の子を散らすように逃げ、他に誰もいなくなった広場に、モユが躍り出た。「スターエボリューション！」のかけ声も凛々しく変身し、悪党どもに見得を切る。
「宇宙を包む愛の星、スターハート！ハートガン！ シュート！」
銃口から迸った桃色のビームは、続けざまにロバーズを打ち倒す。
「今よ、早く避難して！ ツイン・スターがあとで必ず性転換アイテムを無力化するわ！」
敵が怯んだ隙に逃げ遅れた人々に呼びかける。
「皆、ショックだろうが、俺たちがスターハートの邪魔をしちゃダメだ！」
「いつも宇宙からの犯罪者と戦ってくれてありがとう、頑張ってハート！」
何度となく人々を守ってきたツイン・スターへの信頼は絶大だった。
皆は励まし合い、ハートにエールすら送りながら、一目散に逃げていく。
「ガハハハハ！ 馬鹿な地球人どもめ。その期待は踏みにじられるぞ！」
高笑いするのは一味の首領、ダブルソードだ。
「TSアイテムで混乱に陥れ、それに乗じてのし上がり、ゆくゆくはこの国を、地球全部を裏から牛耳るオレ様の計画。邪魔はさせんぞスターハート！」
「そんな馬鹿げた計画、このスターハートが撃ち抜いてみせるわ！」
「ほざけ！ 体型が変われば、いつものようには戦えない。それ今だ、ありったけのTSアイテムを、ヤツにぶつけて男にしてしまえロバーズ！」
「「「「ロバーズ！」」」」
汚いダミ声の号令の下、まだ健在だった十数体の雑魚戦闘員どもは一斉に投げつけた。
「なによ、スプラッシュショット！」
ハートはなんと、投げつけられた数十の物すべてを、撃墜してしまう。
「へへんだ！ ぇ……きゃぁっ！」
だが、敵は曲者。残らず撃ち落とした達成感から、思わず鼻の頭を擦る仕草をした隙を突かれる。
投擲とともに走った雑魚戦闘員の全員が、一斉に宙を舞い、集団ボディプレス。ハートは顔だけを出した状態で、折り重なる敵に潰されてしまう。
「見たか悪のチームワーク！ スターフレイムの姿が見えないが、どうせ遠からず駆けつけるに決まってる。その前にオレ様の必殺技で女をやっつけたら、間に合わなかったのを責めて苦しめ、戦いを有利にできるというもの。くらえ、ダブルソードクラッシュ！」
素早く必殺技の間合いに入った犯罪者は、部下に構わない。
両手にエネルギーの大剣を生み出して、渾身の力で斬撃を放つ。
「っ……フレイム……レイワ……！」
悪漢の放ったエネルギーの斬撃は、みるみる視界いっぱいに広がって――。
ドガァァァンッ！
「ぐあああああああああああ！」
悪の技は直撃し、絶叫が響き渡る。
だが、攻撃が直撃して叫んだ人物は、犯罪者が狙ったハートではなかった。
「そんな……フレイム！」
身代わりになったのはツイン・スターのリーダー、フレイムであった。
駆けつけた彼は仲間のピンチを見るや変身しながら飛び込み、仁王立ちして庇ったのだ。
バチバチ！ ドカン！ ドカン！
変身姿の彼は、そこかしこから火花を散らして放電し、爆発を繰り返しながら倒れていく。
伏しても不吉な煙をあげているヒーローの変身は間もなく解けた。
「くっ……やっぱり身体が鈍ってる……本当なら相殺でき……ぐふっ」
全身焼け焦げたレイワは呻いたが、それきりピクリとも動かない。ハートは慟哭した。
「いやぁぁ！ フレイムがあたしのせいでっ……でも、これは現実なの？あたしにはレイワが……ところどころ焦げて煙が出てるけど、高級ワンピースを着てる風に見える……顔は間違いなくレイワだけど、背が縮んであたしよりも胸が大きくてナイスバディだわ」
彼女にはわけがわからない。しかし、即座に事情を理解する男がいた。
「その首のチョーカーは間違いなく、オレ様が開発させたTSアイテム」
その男――ダブルソードは、髭を撫でながら呟く。
「こいつは路上でバラ撒くだけでなく、資金稼ぎで経営してるブティックでも、効果を隠して売りさばいていた。つまり、スターフレイムは客というわけだ。こいつは面白い」
敵の親玉はうんうん頷く。
「クックック……オレ様を苦しめた正義のヒーローが、まさか女装趣味だったとはなァ。しかも今、気絶している。こうなると、さらってアジトで辱める以外に手はねーな～」
ダブルソードは無防備なフレイム――レイワをひょいと担ぐ。
ハートを無視して緊急転移用ボールを出し、さっさと撤退したのだった。

5

「なんてことだ……スターフレイムともあろう者が犯罪者に捕まるなどっ」

新元轟レイワこと、宇宙の犯罪者と戦うツイン・スターのリーダー、スターフレイムが目覚めたとき、薄暗い部屋のお立ち台に磔にされていた。ここは敵のアジトの一室である。

周囲にはロバーズがひしめき、スポットライトで照らされる彼を愉快そうに眺めていた。

「ガッハッハ！　こうなっちゃ、スターフレイムも形なしだな」

一番面白そうにしているのは、彼の横でふんぞり返る首領、ダブルソードであった。

「女装趣味男子、男の娘に好評だが、ステルスマーケティング……ステマやサクラの口コミで、ネット上では実際以上にいい店に見せているオレ様の店のご利用、誠にありがとうございました！　一部始終は防犯カメラにバッチリ録画されてたぜぇ？」

「くっ……あの店が、犯罪者の資金源だったなんて……相棒のスターハートにも知られていない女装趣味を、まさか敵に知られるとは……しかも、映像が残っているだと？」

「そいつで脅し、これから悪い便宜を図ってもらうテもあるが、折角、絶世の美女になったんだ。ヤって手先に調教するのが、オレ様のような悪人のするべきこと」

「なにっ」

「TSアイテムバラマキ大作戦は、そういう風に楽しむのも目的だしな！」

フレイムは、両手はまとめて上げられ、両足は大きく広げさせられるという逆「Y」字に磔にされている。合わさる両手と両足には、パワーを封じる硬く分厚い枷がはまっていた。

彼は敵によって強制変身させられ、悪と戦う正義の姿で無残に拘束されているのだ。

だがヘルメットは外され、素顔が露出していた。誰が見ても深窓の令嬢という顔貌をしているが、TSアイテムの鈍く黒く光るチョーカーが妖艶な色気を醸しだしている。

女装趣味はあってもTS願望などないフレイムには、それだけでも恥辱だというのに、さらに胸元が切り開かれていた。

ライダースーツのファスナーを股間まで下ろしたみたいに、ピッチリスーツの布地が左右に分かれ、TSアイテムのせいで爆乳化した胸が、完全に引きずり出されている。

「まずは前戯のオッパイ責めだ」

粗暴で露出の多い服装をしているだけに、加齢臭と汗臭さと筋骨隆々の日焼けした肉体の圧迫感が甚だしい犯罪者は、囚えたヒーローの背後に回る。

今のフレイムの胴体など簡単に折ってしまえる大きく逞しい手が、彼の爆乳に触れた。

「おい、オレはこんな外見だが、心は男なんだぞ！　声だって、ぜんぜん女っぽくない！　そんな男を乱暴するなんて気持ち悪くはないのか！」

フレイムは気色の悪い危機を察して抗議するが、犯罪者に常識は通じない。

「オレ様は、あらゆる犯罪をしてきた。無論、性犯罪も何度もした。女だけじゃない。男もたくさん犯したさ！　ダブルソード……両刀遣いの名前は伊達じゃないんだよ！」

「……ッ！」

「こんなに美形で、肌が瑞々しくて、しかもオッパイのでかいカラダは、オレ様にとっては五つ星レストランのメインディッシュに匹敵する！　心が男っていうのも、背徳的なスパイス。食わないなんて、考えられねぇぜ！」

犯罪者は本格的に性行為を始める。くすぐったいくらいの、触れるか触れないかのタッチで乳肌をなぞりつつ、下膨れする下乳を摘まむ。見かけによらず、愛撫はいやに繊細だった。

「アイテムで性転換した者の女子力が高ければ男子力の高い男に、男子力が高ければ女子力の高い女になる案配とはいえ……」

「そんな効果が……っあぁ……」

「なんて美しくて感触のいいオッパイなんだ！　本物の女にだって、ここまでの肉メロン……肉スイカ爆乳の持ち主はいやしないぞっ」

犯罪者は機嫌よく口角を上げた。

「指先に吸いつく肌……摘まめば反骨心たっぷりに反発する弾力乳肉……力を抜くとすぐさま元に戻るくらいにパツンパツンしてる。繰り返し摘まんでるだけでチンポが勃っちまう！」

「オレは男なのに、こんな犯罪者に胸を弄ばれるなんて……！　はぅう」

「本当に嫌なだけなのか？　随分と可愛らしい声が出ているじゃないか」

「き、貴様……ッ……ぅ……あっ、あっ……はふぅ……ンあぁ……！」

フレイムの口から徐々に悪態の言葉がなくなり、嬌声が洩れがちになっていく。

（馬鹿な……爆乳にされたオッパイに、少しずつ性感が起きている……）

豊満な球を描く下乳を摘まされれば摘まされるほど、ペニスを扱くときに似た悦びが起こる。

犯罪者は摘まんで放すだけでなく、摘まんだまま揺らして乳房全体を波立たせたり、そのまま外側に引っ張ったりという愛撫まで始めた。

自信満々で、こうされると気持ちいいだろ？　と言わんばかりの手つきは憎たらしいが、上手いと言う他ない。

（くっ……こいつは、闇雲におれを感じさせてるわけじゃない……うぁぁ……ち、乳首が熱い……疼いてきた……きっとこれが狙いなんだ）

犯罪者の術中にはまっているのを自覚した彼は、いやいやと胸元を振る。

「男相手に喜ぶ趣味はないと言いながら、なんだよ、乳輪と乳首が勃起してきたじゃねーか。旦那に相手にされない浮気妻の方が、まだ貞淑だぞ」

一旦、責めるのをやめて手を離す。

むくむく……ぷく……ぷくりっ……

ビンッ！　ビンッ！

すると、植物の発芽シーンの早送り

よろしく、乳輪も乳首もみるみる完全に勃起した。
愛撫されない切なさを訴えるみたいに、切羽詰まった様子でビクつく。
「これはもう、ただの乳首じゃない。オレ様の愛撫でオンナの性器に生まれ変わったんだ」
「くっ……そんなに見るな……ッ」
「記念にイク悦びも教えてやらないとな。敵であるこのオレ様が、正義の女体化ヒーローのオッパイ処女を奪うんだ。これで一歩、お前はオンナに近づき、男でなくなる」
「よ、よせっ」
「手だけでイカせるのは簡単だが折角だ。このオレ様を痛めつけてくれた武器を使わせてもらう。悪を倒す正義の武器が、正義の味方を堕落させる悪のアイテムになるわけだ」
フレイムの腰のホルスターから、超合金製の正義の警棒を抜き取る。
つん……つん……とん……とん……ずぶぅっ……くりっ、くりっ。
太くパンパンに張りながらそそり立つ乳首を横からソフトにつつき、指でするみたいに上から叩き、優しく触れながら乳輪の内部に押し込み、離れた途端に元に戻ったところで根元から転がす。
「うああ……ぁう……くぅ……あ、熱い……ンぁぁっ……」
フレイムのくぐもったあえぎ声が溢れてしまう。
無様で恥ずかしい声をあげまいと口を引き結んでも、どうしても力が抜けて声が洩れる。
（まるで必殺技のフレイムスティックで責められてるみたいに、乳首も乳輪も火照る……いやらしく大きくなった胸にまで性感が広がるだなんてっ）
自分の武器を最低なことに使われているというのに、乳悦は止まらない。
胸元が揺れ、爆乳が左右に往復。先ほどまで拒絶や抵抗の意思を纏っていたのが嘘のように、ペットが飼い主に阿る雰囲気でゆさゆさ揺れていた。
「くぅっ……オレは男だぞ……なのに男に……それも、最悪の犯罪者に、オッパイだけでイカされるというのか？んっ、ひぁっ……ひぁぁぁ！」
「諦めなスターフレイム。ほれほれ、こうされると、堪らないだろ？」
負けん気を打ち砕く風に、犯罪者は快感責めしてくる。
弱い場所から少し離れた地点を優しくつついてフレイムの余裕を回復させては、勇ましいことを言わせる。
すると、待ってましたとばかりに、武器や指の先で乳首を弾くなどして、羞恥に満ちた高いよがり声を上げさせるのだ。
（こ、これでは、犯罪者の思うつぼじゃないか……戦えば決して遅れはとらない相手に、陵辱行為で圧倒されてしまっている……だが、おれは負けない……絶対にイカないぞ！）
反骨心も露わに歯を食いしばる。
だがほどなく、抵抗の声を出す元気がなくなってきた。
「ぁ、はあッ！　うぅ……なんてしつこいオッパイ責めなんだ……くぅッ」
屈従を拒む言葉の勢いが弱まり、代わりによがり声が一段と高く長くなっていく。
（ダブルソードのねちっこいオッパイ愛撫は陰湿だが、この女のカラダもなんなんだ……）
フレイムは鼻にかかった声であえぎ、顎から脂汗を垂らしながらおののく。
（男のときも乳首はそれなりに性感帯だった……女性に胸板を愛撫されたときに心地よさを感じもした……けれど、女のオッパイでは、桁外れだ！）
勃起した男性器を扱いたり、女性の中を行き来したりするときに勝るとも劣らない快楽が、常に噴き出す。
しかも、悪漢の絶妙な手管によって、双乳はどんどん敏感になっていて、ひと撫でされるごとに悦びは濃密になる。
「あぁ……ンンン……ハァ、ハァ……うあああっ……くひぃっ……お、オッパイすごいぃ」
男の身体と女体の違いを意識すればするほど悦びは増し、素直に口走ってしまう。
（ダメだ……我慢しようとしても感じてしまう……いやらしい感想が洩れてしまう）
息も絶え絶えに甘くあえぐ姿に、犯罪者はほくそ笑んだ。
「だいぶ大人しくなってきたな。え？スターフレイムよぉ」
性豪のテクニシャンは、もちろん、フレイムの内心も、カラダの実情も見透かしていた。
「初めてなのに、あんまり焦らしちゃ可愛そうだ。このままオッパイをイカせてやるよ。このオレ様に感謝しながら、オッパイで無様にイクんだな」
「な、舐めるな……はあ、はあっ」
「あん？」
「おれは男だ！　っ……犯罪者にオッパイを責められたくらいで……はああ……絶対イカない！」
「女のカラダってやつは、男が思う以上に貪欲で素直なんだ。もうわかってるんだろ？」
「そ、それは……うああっ……そんなに乳首を転がすなぁっ、はああ！」
「ほらな。ビンビン乳首は、相手が犯罪者だろうとテクニシャンならお構いなしだ。そら、今度はこいつを食らいなッ！」
ダブルソードはなんと反対の乳首を、無骨な指先で責め立て始めた。
フレイムの警棒でしている風に乳首を突いて、叩いて、めり込ませて、転がす。
さらには、最初に下乳にしていたように、摘まんで揺らすではないか。
「うっ……そんな……両方のオッパイを同時に責めるだなんて……こんなの反則だッ！」
強情なフレイムの歯の根が、絶望的な悲鳴とともに浮く。
「たっぷり感じさせたからな。敏感な

乳首を両方責められるのは、反則級に気持ちいいだろ」
「ふあっ……犯罪者に、自分の武器を悪用されているのに……ンッ」
「武器と指。それぞれ感触が違うものに、ときにはシンメトリーに、ときにはランダムに、優しく激しくのろく速くメチャメチャに愛撫されては、耐えるのは不可能だ」
責め立てられる乳首も、その振動で刺激されている爆乳も、勃起男根を扱くのに――男の快楽に勝るとも劣らない快美の塊になっている。
心は男なのに、相手は倒すべき犯罪者なのに、しかも武器を奪われて陵辱されているという希有な恥辱と背徳感が心をかき乱す。
筋骨隆々で野卑な男臭い敵に小柄でグラマーな女体を責められる強烈な被虐感があり、女性とセックスするときにはない、新鮮で妖しい悦びに満ちている。
「くーっ……んむむ……くぅっ……くひぃっ……ああ……ダメだ……！　い、イクッ！」
絶頂すまいと、往生際悪く合わせていた、芸能人みたいに真っ白い歯がこぼれ、敗北宣言そのものの絶頂申告を口走ってしまう。それを耳で聞くと、もうダメだった。緊張の糸が切れて、オッパイアクメをしてしまう。
ビクビクビクビクビクビク！
男好きする爆乳は犯罪者に屈して、けたたましく痙攣する。
「うあああああ！　そんな……こんなにあっけなく……ひあぁぁッ！」
絶対ダメだと気を張っていただけに、快楽の激感とともに叫んでしまう。
（おお、オッパイ、イッてる……男なのに、同性の犯罪者にオッパイでイカされてるっ！　絶対イカないと言った直後に、あっさりイカされてる！）
瞳は恥辱と悔しさでいっぱいなのに、涙目の目尻は気持ちよさそうに垂れる。
（こんなにいやらしくて無様な生き恥が他にあるか？　なのに、くぁぁっ！　ダブルソードが、『またイケ』と言わんばかりに両方の乳首を弾いたり転がしたりする度に、また絶頂してしまう……何度も果ててしまう……女体というものが、こんなにも貪欲でいやらしいなんて知らなかったぞッ）
内心で恐怖していても、女体は繰り返し翔ぶ。
男は射精すると性的な興奮が急速に鎮まるので、連続絶頂するのは難しい。
しかし女は違う。オーガズムは長続きするのだ。フレイムは童貞ではなかったが、こんなにも短いスパンで女を果てさせるセックスなど、したことも考えたこともない。だからこそ、衝撃的だった。
ロバーズ！　ロバーズ！　ロバーズ！　ロバーズ！　ロバーズ！
固唾を呑んで鑑賞していた犯罪者の部下どもの大歓声に、室内が震えた。
正義が悪の手管ではしたない顔をさらし、何度も乳悦絶頂する様子に会場は沸く。
彼らもフレイムに痛めつけられた。おまけに、フレイムのせいでボスの恐ろしい癇癪に付き合わされたのだ。ボスが因縁の相手へ深刻な恥辱を与えたことに、喝采を送っている。
絶対に復讐すると誓い、生き恥をかかせるのに成功した宇宙の犯罪者も上機嫌だった。
「へへ、いいイキっぷりだったな。女体の罪深さへの理解は深まったろ」
ダブルソードはニヤニヤしている。
「心はイクのを望んでなくても、カラダは裏切り、テクニシャンのオレ様に寝返って、女体冥利を貪っている。そんな、正義の敗北感と悪の勝利感に溢れた、パイイキ姿だった」
犯罪者は爆乳からゆっくり両手を離す。警棒はホルスターに戻した。
こんなときは、なるべく、犯罪者を取り締まる姿でいさせた方がいい。
その姿を辱めるのが、邪悪な犯罪者の大きな楽しみなのだから。
「けど、こんなのはただの前戯だ。本番はこれからだぜぇ」
悪漢は、肩で息をして絶頂の余韻の中にいるフレイムの正面に立つ。
「ＴＳアイテムで女体化した状態で妊娠すると、アイテムを外しても元に戻らなくなる」
わざわざ説明した悪漢は、ブーメランパンツを脱ぎ捨てた。
「はあ……はあ……なんだと……貴様……ま、まさか……」
「オレ様はこれから、天下のスターフレイムのマンコにチンポをぶち込む。もちろん、犯罪者の悪の精子をいやってほど子宮に呑ませて、卵子を犯し、孕ませる」
「そんな……！」
「もちろんオレ様は、お前が気絶してるときに強制排卵薬を投与した。最高に妊娠しやすくなったからこそ、目覚めさせたというわけだ」
「どこまで最低なんだっ……オレは男だぞ、男と本番セックスするなんて、流石の変態でも気持ち悪いだろう！　いくらなんでもペニスが勃つわけ……」
ギンッ！　ギギンッッ！
見やればなんと、ダブルソードの分身は、これ以上ないくらいに勃起しているではないか。
「なっ！　お、男の時のおれのよりもずっと大きくてドス黒い巨根が……こんなにも勢いよくそそり立っている！」
「オレ様の自慢の息子さ」
「まるで、数日間禁欲して満タンにした精子を、愛する恋人に残らず注ぎ込もうとしている、ヤリたい盛りの男みたいじゃないか！」
「おうよ。お前が食べ頃になるのを待つ間、絶対に孕ませるつもりで精子を溜めたぞ」
「ッ！」
「各地のカキ食べ放題の店を巡って亜鉛をチャージし、元気でわんぱくなのを念入りに量産していたんだ。オレの煮え滾った復讐心、たっぷり受け止め

てもらうぜ。悪の子供を妊娠して、完全にオレのオンナになれや」
意外にも陰毛の剃り残しもない股間から、シックスパックの腹筋に囲まれているへそを越えてそそり立つ勃起巨根の中程を掴む。
ファスナー全開のライダースーツよろしく、布地が割れて完全に露出しているフレイムの女性器に、その穂先をピタリと当てた。
「ああっ……犯罪者のペニスが……オレを孕ませるつもりの凶器が……オマンコにあてがわれただなんて……！」
いやいやと首を振るフレイムとは裏腹に、その立派な女性器は発情しきっていた。
「そんなこと言っても、TSアイテムの効果でパイパンになったマンコは、ぐしょ濡れだぜ？」
「う、嘘だッ……そんなわけは……」
「ヤリマン熟女みたいに見事に膨れた淫唇は全開で、思春期のガキみてーに綺麗な鮮紅色の膣前庭が露出してる。物欲しそうに開いたアナからは、スケベ汁がダラダラだぞ」
「っ……ほ、ほんとだ……こんなにふしだらな女性器は初めて見た……」
「オッパイでよがった末にイッたんだから当然だが……ちょいと発情しすぎだな。天下のスターフレイムの女体は、並外れてドスケベだぜ」
犯罪者は獲物をじっくり味わう雰囲気で、じわじわ腰を突き出す。
「オッパイ処女だけじゃなく、マンコ処女も、ダブルソード様がいただく」
じゅぶぶ……ぬぷぷぷぷ……。
巨体を揺らしてガニ股になり、小柄な女体化フレイムと股間の高さを合わせつつ、愛液でたっぷり潤い、官能の情動で火照りきった粘膜の壺の中に、火傷しそうなほど熱い巨根を打ち込む。
「うあああ……っう……あああ……犯罪者の巨根が入ってくるぅ」
逃れたい一心で腰を揺らす。
だが、右へ振ろうが左へ振ろうが甲斐はない。
性豪犯罪者は見切ってる風に腰つきを合わせ、どんどん奥まで来る。
（オレを孕ませて二度と男に戻らせない気満々のペニスが……大事なところをいっぱいにしていくっ……オッパイだけでなく、オマンコの処女まで完全に奪っていくぞっ！）
こんなことはあってはならないことなのに、犯罪者が成し遂げるのを止められない。
やがて悪漢の動きが止まった。
「オッパイも相当だが、マンコもすこぶる具合がいいな！」
一番奥まで埋め込んで、肉壺の具合を楽しんでいる。
「若くて鍛えてるヤツだけに、普通の女よりも狭くてよく締まる。おまけに、スケベに蕩けた粘膜の吸いつきも最高だ。ぶちこんでるだけで精子が出そうだぜ……う、先走りが出ちまった」
「先走りでも妊娠するんだぞ！　汚い汁を出すなっ、今すぐ離れろ！」
「イヤだね。そら、オレ様のデカチンがお前の子宮口とチューして、押し上げてるぞ。お、子宮がチン先に可愛く吸いついてくらぁ。気持ちいいぜ。ほれ、ご希望の先走り汁だ」
「ひぃぃ！　こんな最低な男の赤ちゃんなんて孕みたくないっ……女になりたくないッ」
「へっへっへ。あのスターフレイムが取り乱してやがる。溜飲が下がって興奮するぜ」
犯罪者は無情にもピストンを始めた。剛直はビキビキと張り詰め、さらに漲っている。
「ひぁぁっ！　先走りを出してる巨根が、オレの中を抉ってる！」
「具合のいいマンコを突き回すのは、やはりいいもんだぜ。おら、マンコ処女をもらってやったデカチンのお通りだ。締めて吸って歓迎しやがれ」
「あぅ……はあ、はあ……犯罪者の巨根が、おれの中を何度も何度もッ」
逃れようと腰を振ったフレイムだが、ピストンされるにつれ、抵抗は弱くなっていく。
（うああっ、高くて分厚いカリ首で蛇腹の膣を引っ掻き回して、ウズラの卵大の子宮の入り口を、それよりもずっと大きい亀頭の先で何度もドスドス突き込んでるッ）
巨根のピストンの迫力に圧倒され、逆らう気力が萎えてしまう。
もっとも、反抗の意思を砕くのは、悪の巨根のピストンだけではなかった。
「強姦オッパイ責めであっさりイッて、それだけでマンコがグチョ濡れになって、粘膜が蕩けていたからもしやと思えば、大正解か」
「おれの小さい身体の中で……あッ……あんなに長くてぶっといのがっ」
「荒くれ者の男臭い肉体の存在感をたっぷり浴びせつつ、乱暴に犯すのの効果は抜群。ますます絡んで締めて絞ってきやがる。子宮も降りて、チンポにしゃぶりついてら」
「くぅぅ……ひぐぅっ……あっ……あっ……奥が突かれる度に、ふぐぅ、性感が迸るっ」
セックス慣れした巨根に発情済み性器を責められるのは、堪らなかった。
悪漢のドス黒い巨根の全体は、ひっきりなしに膣を広げている。高いカリ首はヌルヌルの粘膜を引っ掻き回し、分厚い亀頭の先端は子宮を突き上げた。
圧されて掻かれて突かれるという、種類の異なる刺激は目が眩むほどの性感を味わわせる。
（こんなの、男が絶対に経験できない快楽じゃないか！　しかも、ペニスで異性とセックスするときよりもずっと複雑で奥深くて濃密な性感だ……）
フレイムはまたしてもおののいた。
（これが、女の悦びというものなのか？　オッパイの件といい、女体がこんなにも貪欲でいやらしいものだったなんて知らなかった……）
女体の真価を敵に教えられれば教えられるほど、抵抗心が萎えてしまう。

すべては男の身体に戻るため……。
少女は恥辱のビキニアーマーに身を包み
欲望のはけ口となる！

ゲーム世界にTS転移

エロ装備で悶える少女

小説 NOVEL／磯貝武連（いそがいたけつら）
挿絵 ILLUSTRATION／かん奈（な）

静寂の森。この世界がゲームだった時、ここはそう呼ばれていた。

広大な森林フィールドであり、その深奥部に行けば行くほど攻略難易度は上がってゆく。

そんな森の一番深く暗い場所にある遺跡。そこが今回の目的クエスト地だった。

今回のクエストは、この遺跡を根城にする高レベルボスモンスターを退治するのが目的だ。

現実世界から転移させられてきたプレイヤー達の間で定めたクエストランクは「A」。つまりかなりの高難易度である。

それ故、遺跡前に集まっているプレイヤー達も高レベル揃いだった。それは身につけている装備からも分かる。

皆、思い思いの武器防具を身につけているが、その総てがレア装備ばかりだ。

そんな中で一人の少女が目立っていたのは、やはり装備が原因だった。集まる視線に囁き声が混ざる。

「うわ……今あれ着けるとかマジかよ……露出狂？」

「信じられない……変態なんじゃない？」

「……で、でもこの状況で見るとすげぇエロいな」

レア装備所有者ばかりが集まるこの場で、一際目を惹くその防具。それは俗にビキニアーマーと呼ばれる代物だ。

ビキニアーマー自体はそんなに珍しい装備ではない。この世界がゲームだった時から普通に存在しており、自分のアバターに装備させている者も多かった。

しかしそれは「ゲームだった時」の話である。

自らがこの世界のアバターとして転移させられてきた時点で、そんな装備を身につけて外を歩こうとする者なんているはずがなかった。

もしこれがお祭りの場や、なんらかの催し物の場であったなら話は別だろう。だが今から行われるのは元の世界への帰還……だけでなく生死を懸けた戦いなのだ。

だからこそ異様な姿で現れたその少女プレイヤーに周りの目は集まった。

白く華奢な体躯に纏うのはかろうじて腕や脚、そして肩部を守るアーマー。一番大事な胸や股間は少しでも動けばずれて中身がこぼれてしまいそうな極小のビキニとブラで覆われているだけ。

それが目に眩しいほど若く瑞々しい未成熟な肉体を惜しげもなく周囲に晒していた。

好奇や戸惑い、色々な視線の中には間違いなく劣情もある。無理もない。卑猥と言って差し支えない代物を少女が——しかも美しい少女が身につけているのだから。

この世界に転移させられてきたプレイヤー達は設定していたアバターの容姿ではなく元の世界での容姿に戻ってしまっていた。

つまり、このビキニアーマーを身につけた少女は、元の世界でも美しかったということになる。

そんな美しい少女がくびれた腰や発達途中のお尻や胸の膨らみを魅せながら立つ姿に、男性プレイヤー達の目に邪な気持ちが宿るのは当然のことだ。

視線が集まってしまう股間や胸に精神的な熱さを感じながら少女は唇を噛んで瞳を潤ませた。

〈どうして……なんでこんな目に遭わなきゃいけないんだ〉

思えばそれはこの世界に転移させられてきた時から始まった。

〈ブラッド・ロッド・オービタル〉。通称〈B.R.O〉——それは世界的な人気を誇るVRMMOゲームの名称だった。

『剣と魔法の世界』を舞台にした世界観は発売当初こそあまり注目されなかったが、その後徐々にプレイヤー数を伸ばし、今では世界シェアナンバーワンの座にまで昇り詰めている。

そんな世界的人気を誇るゲームで、ある日起こった事件。いや、それは事件などという生易しいものではなかった。

日本標準時で20XX年12月8日22時19分。その時間〈B.R.O〉にログイン中だったプレイヤーの総てが、ゲームの世界に転移してしまったのだ。

ゲームからのログアウトが不可能になり、そして自分が本当に〈B.R.O〉の世界に生きる人間になっていることが分かると、各地で悲鳴や怒号が飛び交い、混乱と絶望に支配された。

しかし冷静さを保っているプレイヤー達もまた多くいた。

彼ら彼女らは転移した後も残っているプレイヤー同士の通信機能を使い情報を共有。そして総ての転移させられてしまったプレイヤー達に訴えた。

「自分達の手でこのゲームを終わらせて、元の世界に戻ろう」と。

既存総てのクエストを制覇し、最終目標である魔王を倒したところで元の世界に戻れる保証はどこにもない。だが、それでも、何もしないよりは全然いい。

ほぼ総てのプレイヤーはそれに同意した。そしてゲームクリアを——元の世界への帰還を目指し、立ち上がったのである。

ビキニアーマーに身を包むこの少女もそんな転移してきたプレイヤーの一人で、プレイヤーネームはリンといった。自分の名前をもじってつけた物だ。

元の世界では学生で、この〈B.R.O〉はプレイし始めて数年。世界観が好きでかなりヤリ込んでいる方だった。

そんなリンが他のプレイヤーと共にゲームの世界へと飛ばされてきた時、その驚きは大きかった。

「な、なんだ、これ……え？」

思わず漏れ出た言葉は自分がゲームの世界へと飛ばされてきたこと……で

著者近況 最近よく行くスーパーで売っている惣菜のタコ焼きにハマっています。レンチンしてコーラと一緒に食べると……最高です！

はなく本来男性である自分の身体が女性の身体になってしまっていたことへの驚きに満ちていた。

元々ゲームの時に本来とは違う性別のアバターを使用するプレイヤーはいた。しかし転移してきた時、彼ら彼女らは全員本来の性別へと戻されていた。

だというのに、何故かリンだけは元の世界での性別は男で使っていたアバターも男だったのに、女として転移してしまったのだ。

「なんで……どうして!! どうしてだよ!」

散々そう叫んだリンだが、その問いかけに答える声は一切なかった。

周りに相談することも考えたが、すぐにそれは諦めた。他にも性別が変化したプレイヤーがいないか聞いて回った時に不審な目を向けられ「なに言ってるの?」「変なこと言う奴だな」という類の言葉をかけられたからだ。

これ以上聞き回って不審者扱いされ、支援職などから援助が受けられなくなれば死活問題になる。だから一人で解決策を探すべく単独行動に出るのだった。

普通なら先に攻略を急いで、そして元の世界へ戻ればいいと考えるかもしれない。しかしリンにとっては今現在が問題なのだ。

リンは元々硬派で男らしいものを好んでいて、本来使用していたアバターもゴリゴリの男性アバターだった。

だが、その実はただ女の子に慣れていないだけで、近くに来られただけで照れて赤くなってしまうようなリンだった。それを誤魔化すために硬派を気取っていた部分もあった。

クラスメイト達にはとっくにそれはバレていて、女子の中にはわざと近くに寄って行って照れるリンをからかう娘もいたほどだ。

そんなリンなので自分の身体が女性に変化したというのは一大事だった。

何せ自分の身体なのに照れてしまってまともに見ることもできず、入浴はおろかトイレさえまともに使えないのだ。日常生活が送れないのである。

だから何よりもまず男に戻る。総てはその後だと、リンは必死になって情報を集めた。そして遂にその方法を見つけ出すことができたのだ。

それはプレイヤーが集まる酒場で聞いた話だった。

「なぁ、あいつ知ってるか? コツって奴」

「ああ、攻略にも協力しないでヤバいレアアイテム集めたり、変なスキル習得ばっかりしてる変人だろ?」

「そうそう、相手の性別を変える呪いのアイテムとかさ……そんなのばっか今も集め続けてるって。相当危ない奴だよな」

〈B.R.O〉では男性と女性のアバターで装備できるアイテムが違うので、この性別を変えるというアイテムはプレイヤーキルに恐ろしい効果を持っているということになる。

使用した時点で装備品が外れてしまい、裸同然になるからだ。その隙に攻撃されたらひとたまりもない。

尤もそれはゲーム時代の話であり、皆が協力してクエストを攻略することが優先となった今では、プレイヤー同士で殺し合うことはタブーであるため、あまり使えないアイテムなのだが。

それを聞いたリンは慌てて話をするプレイヤー達に近付き、

「な、なぁ! その話、もう少し詳しく教えてくれないかな?」

そう問いかけた。その呪いのアイテムを自分に使用すれば元の性別に戻れると思ったのだ。騎士服姿の可憐な少女にいきなり話しかけられたプレイヤー達は戸惑いながらも、

「い、いや、俺も噂程度しか知らないけど……でも」

その情報に候補を絞ったリンはそのアイテムを持つであろう古参プレイヤーを懸命に探した。

「絶対……絶対戻るんだ……戻ってやる!」

そんな執念が実を結んだのは探し始めて三ヶ月近くが経った頃だった。遂にリンはコツの居場所を見つけたのだ。

そこは廃棄された城で、コツは相変わらずクエスト攻略には参加せずに一人でそこに引き籠もっているらしい。

なんとなく嫌いなタイプの人物だと思いながらその城へと向かい、実際にコツと会ったリンは、自分の予想が当たっていたのを感じた。

「誰? 忙しいんだけど」

コツは暗い感じの嫌な目つきをした男で、初対面のリンを舐め回すように見てそんな言葉をかけてきた。

女になってから感じるようになった下卑た視線に鳥肌を立てつつ、それでも元に戻るためと必死で嫌悪感を抑えるリンはコツに事情を説明した。

「あの……実は俺……本当は男なんだ」

この世界に来て誰にも言わなかった秘密を打ち明けるリンに、コツは頷くこともなく黙っていた。そしてリンが例のアイテムの話を持ち出し、

「だから、その性別が変わるアイテムってのを使って貰えたら、男に戻れる……戻れるんだ! だから、お願いします!」

そう言って頭を下げるリンにコツは「嫌だね」と答えた。

「そ、そんな」

「あれは貴重なアイテムだから。それに使用回数も限られてる。無駄にはできない」

人の必死な悩みを無駄というコツに怒りが湧くが、リンはそれを出すことはなくただ頭を下げ続けた。

奪い取るという選択肢もあったが、コツを見た時にレベルの違いが分かってそれは諦めた。廃人プレイヤーと言われるだけはある威圧感だった。

なのでただお願いすることしかできないリンは、

「お願いします。お金なら払う。欲しいアイテムがあるなら必ずそれをとっ

著者近刊 『魔王様、ヤラれる前に異世界転生!』『僕のエッチなしでは学園最強のヒロインが最弱になる件』『エルフの国の宮廷魔導師になれたので姫様に性的な悪戯をしてみた1～2巻』 好評発売中!

てきて渡す」
「金なら余るくらい持ってるからいらないよ。それにアイテムも、君に頼らなくても欲しいなら自分でどうにかできるし」
確かにそうだ。リンが用意できる対価程度ならコヅは余裕で手に入れられるだろう。完全に手詰まりだ。しかしどうしても諦めることはできなかった。折角見つけた唯一とも思える方法なのだ。
どうにかできないかと考えるリンに今まで無粋な表情をしていたコヅがフッと笑みを浮かべた。
「そんなにあのアイテムが欲しいのか……う～ん、それじゃお願いを聞いてくれる？」
「……え？」
「それを聞いてくれるなら譲ってもいいよ」
「ほ、ほんとうか!?」
確認するリンにコヅは頷いて答えた。それにリンは笑みを浮かべると、
「あ、ありがとう！　本当に、ありがとう！」
「その代わりお願いを聞いてくれたらだけどね」
何度も頷くリンにコヅは「それじゃ」と言って部屋の奥にさがった。そしてその手に持ってきたのがあのビキニアーマーだった。
そう、コヅの願いとは、リンにこれを着てクエストに向かえというものだったのだ。
驚き固まるリンにコヅは、
「これ、僕が作ったんだけど……自分じゃ試せないからさ。代わりに試してきてくれないかな」
「な……なん……そんな！　そんなの着れるかよ！　俺は……男だぞ！」
「今は違うでしょ？　っていうか別にいいよ着たくないなら。取引はなしってことで」
その言葉にリンはグッと息を呑んだ。
（嫌だ、あんなの絶対に着たくない……っていうかあのアイテムを使って自分が女になって着ればいいだろ！）
正論が口から出そうになるが、それでコヅの気分を害し念願のチャンスを逃してしまう恐れがあると思い、踏みとどまる。
他の条件をと求めてもコヅならば聞いてはくれないだろう。つまりリンにとって唯一の道はあの鎧を着るしかないのだ。
「どうするの？」と問いかけるコヅに俯くリンは、一度だけ恥をかけばいいのだと自分に言い聞かせた。一度だけ我慢すれば男に戻れる。そうすればあんな物を身につけたという事実も消えてくれる。そのはずだ。
自分を懸命に言いくるめたリンは小さく頷くとビキニアーマーを受け取り、クエストに向かう決意をした。
己の身に起きた一連の出来事を思い出し、改めて歯噛みするリンは浮かんでくる涙を堪えた。
こんな姿で泣いてしまえば本当に弱い女の子みたいだ。どんな姿でも自分は男だと必死に言い聞かせる。そしてこれが終われば総て元通りだと自分を鼓舞する。
だから今は周りの視線も、噂する声も総て気にせずに、クエスト攻略だけに意識を集中させ、一歩前に踏み出す。
そんな想いとは裏腹に、面積の少ないアーマーは動く度にリンの若く艶めかしい身体を見せつけ、より周囲の目を惹いてしまうのだった。
懸命に無視するようにして、手にした大剣を構える。それを合図にするかのように遺跡の扉が開いた。ようやく周りの視線もリンから登場したボスモンスターへと向かう。
一刻も早くこの時間を終わらせたいリンは、逸る気持ちで真っ先に突進する先陣隊に加わった。だが着慣れていないビキニで乱暴に動いたのが拙かったのだろう。ブラがずれて乳房がはみ出しかける。
「ひゃぁ！」
可愛い悲鳴を上げてしまう自分を（変な声出すなよ俺！　ふざけんな！）と心で罵り慌てて身嗜みを整える。すると周りの男達が欲情まみれの視線で見つめてきていることに気付いた。
見られたかもしれない。そんな気持ちが顔を真っ赤にさせる。羞恥に心臓が爆発しそうだ。
リンは茹で上がりそうな気持ちのまま周りの男連中を睨み付けてから、もう一度突進を始めるのだった。

§§§

「……終わった。やっと着いた……あの野郎……待ってろよ！」
コヅの居城にリンが戻って来たのは無事ボスモンスターを退治できた三日後だった。
男に戻ることを目標に旅を続けてきたため、初めての集団クエスト攻略だったが、一人旅の間に戦闘は行ってきたので問題はなかった。
唯一問題があったとすれば、それはやはりリンの目立つ姿に戦闘中にもかかわらず男性プレイヤーの視線が向かってしまうことだろう。
太腿やお臍を見せつけ、まだ成長途中だが可愛く膨らむ胸を揺らして戦う姿はどうしても目立ってしまう。
そのせいで傷を負ったプレイヤーも多く、戦闘終了後にはリンに少なからず文句を言おうとする女性プレイヤーもいたほどだ。
だが当のリンは戦闘が終わると報酬も受け取らずに早々とその場を立ち去っていた。コヅとの約束は果たしたのだから問題ないだろうと考えたのだ。
そうしてコヅの元へと戻って来たリンは、硬い口調で言った。
「約束は果たしたからな……そっちもちゃんと守れよ」
「いやいや、その前にちゃんと確認しないと、その鎧のこと。どうだった？」
どうと聞かれたリンは、確かにこれだけ肌を露出しているくせに防御機能

だけは立派だと思った。何度かモンスターの攻撃を受けたが、付与されている防護魔術のお蔭でリンには傷一つない。

だが、問題はそっちではない。

「最悪に決まってるだろ。こんなの」

胸が零れるんじゃないかと気になったり、変な部分が露出しちゃってないか気になって戦闘に集中できない。こんなの鎧として間違っている。

第一、男の自分がこんな姿になって最高だなんて言うはずがないだろう。それくらい分かれと睨み付けるリンにコツはしかし、

「最悪……ねぇ。でもさ……興奮したんじゃないの？　そんな姿の自分を見られてさ。男達にエロい視線向けられて。気持ちよくなかった？」

その言葉にリンは「ふざけんな！」と叫んだ。そして身体を震わせて言う。

「そんなわけないだろ！　バカじゃねぇのか！　俺は男だぞ!!　そ、それが、なんで見られて……」

リンの態度はあまりにも慌て焦ったものだった。それが却ってコツの言葉が真実だったのだと知らしめてしまう結果となる。

ニヤけるコツに首を左右に激しく振るリンは小さく「ちがう」と言い続けた。

そうだ。そんなはずない。男である自分があんな恥ずかしい姿を見られて変な気持ちになったなんて。そんなはずないのだ。

（た、確かに、なんか熱かったし……ドキドキしたけど、それは戦ったからで……だから）

コツの鎧を着てから感じていた変な感覚。それをリンは戦闘による昂揚だと言い聞かせていた。しかし心のどこかではそれが違うのではないかと薄々感じてはいたのだ。

裸に薄布とオマケ程度の防具。そんな際どい姿に視線が向けられる度に、男の時にはなかった場所が切なくなる。熱く疼いてしまう。

そんな事実を一番嫌な相手であるコツに言い当てられリンは慌てた。慌てながらそれは違うと、男の自分が恥ずかしい格好で、それを見られて興奮したなんて絶対に違うと思い込もうとする。

ここにやって来るまでの間もずっとそう自分に言い聞かせ続けたリンだったが、それをあっさりとコツは見抜いた。

いや、見抜いたのではない。分かっていたのだ。コツにはリンがそう感じていたであろうことは手に取るように分かっていた。

何故なら、そうなるように仕向けたのはコツだったのだから。

コツはこの世界へと転移してきた時、まずは自分の力がどれほどの物か試すことから始めた。ゲーム内で得たスキルや魔術は、実際にはどんな効果があってどの程度使える物なのかを確認したのだ。

その結果、ゲーム時代にはできなかった複数のスキルを組み合わせたり、魔術とスキルを組み合わせて新たな効果を得たりすることが可能になったことを知った。

そんな研究にのめり込んだコツは、やがてそれがモンスター相手だけではなく他のプレイヤーに対しても有効か試したくなった。

そしてどうせならそれは女相手がいいとも思っていた。相手の痛みを増幅させる魔術は組み合わせ次第で性感度を上げる魔術になるし、相手を酩酊させるスキルは流用すれば性的興奮を感じさせるスキルになる。

こんなに女相手に使って面白そうな物はないと、常々そう思っていたのだ。丁度そんな時だった。リンがやって来たのは。

元男だというリンだが、そっちの方が面白いとコツは思った。元男さえ堕とすことができれば、それは間違いなく使えるということになる。

そうしてコツは予め散々スキルや魔術を重ねがけしておいたビキニアーマーをリンに渡したのだ。

まさかそんなことになっているとは思いもしないリンは、鎧にかけられた多数の魔術やスキルのせいで無理矢理興奮状態にさせられた自分の身体に戸惑い、泣きそうになっていた。

違うと言い続けても決して消えない羞恥責めの余韻が頭に渦巻く。

良い感じに苦悩している姿にニヤけるコツの様子に、そうとは知らないながらもリンは、

「と、とにかく、約束は果たしたんだ！　もういいだろ！　アイテムよこせ!!　よこせよ!!」

言いながら伸ばしてくるその手をコツは掴んだ。リンは反射的に振り払おうとするが、大きな男の手に華奢なリンの細腕では敵わない。

大剣を振り回す時のように魔力を込めて膂力を高めようとするが、それより先にコツが引き寄せたリンの素肌の部分を撫で始めた。

「きゃぁ！　な、なにして……」

「本当に興奮しなかった？　本当？　確かめてもいい？」

「た、たしか……何言ってんだ！　やめ、き、キモいんだよ！　触るんじゃ」

そこまで言いかけて次の瞬間、リンの口からは「ひゃぁ！」と可愛い声が漏れた。それが自分の口から出た声だとリンが気付いたのはコツにそう指摘されたからだ。

「可愛い声だな……可愛くて気持ちよさそうな声だ。やっぱり感じちゃってるじゃないか」

「……ち、ちが……ちがう、いまの……は、ちが、うぅ！　う、ぃ！　いぅうう！」

否定しようとする言葉の端から甘い声が漏れる。コツの指先が背筋を撫で尾てい骨をくすぐったせいだ。

男の指先が丁寧に身体の線をなぞる。それだけでリンの中にはビリビリと電

流が走った。勿論ビキニアーマーにかけられた魔術のせいだ。
しかもそれだけではなく、コツは現在進行形でリンに魔術とスキルの混合技をかけていた。
指先を通してリンの感度を上げ、快楽係数だけを引き上げ続ける。そんな技を使われているなんて思う余裕さえないままリンは身を捩り続けた。
「や、やめ、さわ……んなぁ！　きも……いいいい！　ひぃう！　あ、あぁあ、やめろぉ!!」
口では必死に抵抗するが、身体からは徐々に力が抜けてゆく。それに比例して乳首はブラの中で痛いほど尖り始めていた。
それが性的な興奮による肉体変化だと分からないリンではない。しかし絶対にそれを認めるわけにはいかなかった。
卑猥な物を着せられて、それで興奮したと言い当てられ、さらにこうやって触られて感じてしまう。しかも男相手に。
男のはずの自分がそんなの絶対に有り得ない。何かの間違いだ。そうは思うのだが、
「あ、あぁ、あぁんん！　あ、や、め……んん！　うぅんん！　あ、ぅうう！」
コツの指が段々と身体の中心に向かう。その度に溢れる快楽に上がる甘い喘ぎ。どんなに我慢しても漏れてしまう声にリンは涙を浮かべた。
羞恥と快楽に染まり始めるリンにコツは声をかけた。
「そんな良い声出して。すっかり女の子だね……本当は男だったなんて嘘なんじゃないの？　元から可愛い女の子だったんじゃ」
「ちが、うぅう……っく！　くぅう！　お、おれ、は……おとこだ……おとこなんだぁ!!」
「へぇ、じゃあ男のくせにこんな格好をした姿を見られて興奮して、男に触られて感じてるんだ」
「ちがう……ちがぅぅう！　そんな、の……そんなの、ちが、ぁ、きゃぅぅう!!」
リンの一際高い声が漏れた。コツの指が硬質なブラとビキニの内部に入り込み乳首と陰裂を弄り始めたのだ。
モンスターの攻撃には異常なほど高い防御力をみせたビキニアーマーだが、この侵入に対しては一切の防護をしてはくれない。
アーマーの内部でモゾモゾと動き回る指先。それはリンにとって初めて知る本物の女性快楽であり、目が眩むほどの気持ちよさだった。
「ひッ！　ひぁ！　ひぁあああ！　あ、あぁあっ、きゅふ!!」
思わず漏れる少女の嬌声を聞きながら巧みに指の動きを変えるコツは、リンの尖った乳首を捏ね、火照る陰部を擦る。
楽器を奏でるようにリンの身体を撫で、奥にまで快楽を染みこませる。そうしながら自分もリンの柔らかな身体に股間を押し当て匂いを嗅いだ。
少女の快楽汗に逸物はズボンの中で膨れあがった。それを押し当てつつ、より強くリンが自分でも触れたことのない場所を弄り回す。
（おく……身体の奥から……なんか、くる……変なのくるぅぅう!?）
意味の分からない感覚が奥底から昇ってくる。それが全身を痺れさせリンの身体をさらに刺激に対して敏感にさせた。
そんな状態で硬くなった乳首とクリトリス。その両方が同時に摘まれた時、リンの奥で高まり続けた熱が弾けた。
「んぁああ！　あぁああんん！　う、うぅぅう！　うぅぅぅぅう！　んふぁうぅぅう!!」
初めてのイキ声はあまりに不様だった。しかし女として初めての絶頂なのだ。無理もない。
可愛い少女の口から出たアクメ声に満足げなコツは、腰をふらつかせるリンを床に座らせた。
イってしまった。流石に分かるその事実にリンは顔を歪ませると、
「う、うぅ……うぅぅう……うぁあ、なんで……どうしてぇ……やなのに……こんなの、ぜったい、ちがうのに……うぅう」
涙を零す姿にさえ嗜虐心を刺激されたコツは、ゆっくりとズボンを脱いだ。そしてパンパンに膨れたペニスを取り出した。
溢れる獣臭に顔を上げたリンは小さく悲鳴を上げた。目の前に突き出される肉棒を見たからだ。
元の世界で見慣れている男性器……とはいえ、その大きさはあまりにも違う。男だった時のリンのペニスとコツのそれは二回り以上の差があった。
しかも黒々としていて血管が浮かび、開いた雁首が凶悪にエラを張っている。本物の男性器といえる代物だ。
反り返っているそれが自分をどうしたいのか、元々男であるが故にそれが分かってしまうリンは首を振り逃げようとした。しかしイったばかりの身体はまともに動いてくれない。
「や、やだ……やめ、ろ……くる、なぁ……あぁあ」
「自分ばっかり興奮して気持ちよくなって……それはないだろ。今度は僕の番だ」
卑怯な手段で感じさせたくせに堂々とそう言うコツに、しかし理由を知らないリンは素直に違うとは言い返せない。ただそれだけは嫌だと繰り返すだけだ。
哀れなほど怯えるリンにコツは、
「……そんなに嫌ならせめて口でしてよ」
「く、ち……そ、んな……そんなの、おれ……できない」
「じゃあイったばかりのそのマンコ……無理矢理使わせて貰っちゃおうかな」
言葉に同意するようにヒクヒク動くペニスにリンは青ざめる。このままだ

女体化聖騎士
クリス
身代わり騎士は
孕んで堕ちる
騎士の矜持を売り、肉体を捧げ
敬愛する姫のため耐え続ける――！
小説 NOVEL／淡海翁人（おうみおうじん）
挿絵 ILLUSTRATION／むらさき朱（しゅ）

目を閉じれば浮かんでくる。
私が騎士として姫にお仕えすることになった、あの春の日のことだ。

「リシャルディス様、ここにいらっしゃったのですか」
私の言葉に、彼女は顔を上げる。
王城の庭園の中心に植えられた大樹の上で、姫は膝を抱えて座っていた。
彼女はまるで現世に降り立った迷子の天使のように見えた。
事実、彼女は天使の血を引いている。
聖王国の王族は、太古の時代に降臨した天使の血統を、聖属性への適性と共に受け継いでいる。
透けるような白い肌。絹糸のような銀の髪。神秘的で清浄な雰囲気。彼女の人間離れした美貌は、餓えた野獣も牙を納めるほどだと言われる。
しかし、その日、彼女は美しい顔を赤く腫らして涙を流していた。
「どうしてここが分かったの？　私と爺やしか知らない場所なのに」
涙を袖で拭い、彼女は私を見つめる。
爺やというのは先日腰を痛め、引退することになった老騎士のことだ。
「爺やに聞いたの？」
「いいえ。彼は国一番の騎士。姫との約束を決して破ることはありません」
「じゃあ、どうして？」
「私は城の隅から隅まで全て探し回る途中で辿り着いただけです」
姫は目を丸くし、それから少しだけ頬を緩めた。
「陛下が心配しておられます。下りましょう」
「いやよ」
彼女は絶対に動かないと言うかのように、木の幹にしがみつく。
「では、心変わりなさるまで、ここでお待ちします」
「無理矢理つれて行かないの？」
「私は今日からあなた様の騎士です。私は陛下の命令よりも何よりも、姫のお気持ちを優先します」
不安定な梯子の上で頭を下げる。
忠誠を誓う初めての礼なのに、実に不格好なものになってしまった。
「おかしな人」
姫は思わず吹き出す。
その拍子に、彼女のお腹が鳴った。
どうやら天使の腹にも人間と同じような虫が棲んでいるようだ。
「お食事をお持ちしましょうか？」
「下りるわ。私の騎士が、命令違反で罰されては困るもの」
姫の差し出した手を支える。
指の表面は冷えていたが、少し早い脈拍と温かい血の流れを感じた。
「あなた、名前は？」
「クリスと申します」
「クリス、あなたはずっと私のそばにいてね？」
「はい、リシャルディス様。この身は終生あなたと共に」
花の香りに包まれた天使を抱いて、私は地上に下りた。
春風はまだ少し冷たく、私は密かに姫君の温もりに愛しさを感じていた。
何があろうと色褪せることはない、私の一番大事な思い出だ。

◇　◇　◇

聖剣の一撃がミノタウロスの重装兵を打ち倒す。
呼吸を整えながら周りを見回す。
まだ乱戦が続いている。魔族側は先ほどのミノタウロス以外は雑兵ばかりだが、数はこちらの三倍だ。
姫を守りながらの戦いのため、部下たちは徐々に押されつつある。
私は剣に理力を込め、裂帛の気合いと共に横薙ぎの一閃を放った。
放たれた聖なる光の刃は味方を傷つけることなく、敵軍の雑兵――オーク、ゴブリンなどの魔族だけを真っ二つに斬り裂く。
「助かりました、クリス隊長！」
「さすが隊長！　あの数を一撃とは」
部下たちは安堵した様子で快哉の声をあげる。
部隊を任された最初の頃は、女顔で童顔なことや、名家の出なことを引き合いに出され「金髪の坊ちゃん」「コネ隊長」などと陰口を叩かれたものだ。
しかし、長い付き合いの中で次第に実力を認めてくれるようになった。
こんな非常時でも、頼りない容貌の私によく従ってくれる。部下たちには感謝してもしきれない。
王都のあちこちから火の手が上がり、美しかった街も魔族の手で無惨に破壊されている。
打ち捨てられた死者を見つけるたび、リシャルディス姫は悲しそうな面持ちで祈りの言葉を唱えた。
まさか聖地である王都でこのような蛮行が繰り広げられるとは、誰一人として思いもしなかっただろう。
聖王国は天使の降臨した地だ。
かつて世界が闇に覆われかけたとき、天使のもたらした聖なる光が邪悪なる力を払ったという。
聖王国には現在も聖地を守るための防衛機構が残っており、本来であれば魔族が侵入できるはずがない。
ではなぜ聖なる防衛機構が機能せず、対魔族の鍛錬を受けた守備隊も、全く機能していないのか。
私の胸中に焦燥と疑問がよぎる。
「守られるばかりで申し訳ありません。せめて私にも力があれば……」
リシャルディス様の声で、私は思索から引き戻される。
彼女はまだ天使の血の真の力に目覚めていない。だからこそ自分を責めてしまうのだろう。
「姫はこれからのお方です。あなたが生き残ることで未来に光がもたらされると、我々は信じています」
「こんなときくらい頼ってください」
「そうです。そのために俺たちがいるんですから」
私に続いて、部下たちが口々に姫へ慰めの言葉をかける。

姫の手を煩わせるのは論外としても、何か打開策が欲しいのは否めない。
連戦による消耗が激しく、部下たちの疲労が濃い。全滅する前に、どうにかして包囲を突破し、王都を脱出する必要がある。
そのとき、先行していた部下の前に何かが落ちてきた。
「敵襲、半魔兵が――ぐぁぁあっ！」
異形の魔族が、気絶した部下を軽々と投げ飛ばす。
「上からだと⁉」
「クソ、もう追いついてきやがった」
人に似ているが、ねじくれて歪んだ風貌。裸体だが、生殖器はついていないように見える。
髑髏を模した鉄仮面で頭部が覆われ、顔立ちや表情は分からない。
魔族は彼らを半魔兵と呼んでいた。おそらく新種の魔族だ。
一体目に続き、半魔兵が次々と建物の屋上から降ってくる。
「総員、盾三型の陣！　姫だけは何としてでもお守りするのだ！」
号令をかけ、陣形を組み直す。
その間にも、半魔兵は虫に似た奇妙で素早い動きで肉薄してくる。
彼らには既存の亜人型魔族に対する戦術が全く通用しない。部隊としても個人としても対応しにくい。
ほんの数十秒で、部下の半数以上が制圧されていた。辛うじて姫は守れているが、いつまで保つか分からない。
「ええい、いい加減に倒れろ！」
上級魔族もバターのように斬り裂く聖剣の力が、半魔兵には全く通用していない。
半魔兵という語感から、おぞましい想像が脳裏に浮かんでくる。
彼らが半人半魔であれば、人のために神がもたらしたとされる聖なる力が通じにくいのも納得だ。
私は理力を体内に循環させ、純粋に筋力の強化につぎ込む。
「これならどうだ⁉」
私の渾身の一撃が、鉄仮面を凹ませ、とうとう半魔兵を打ち倒した。
しかし、同時に聖剣が限界を迎え、半ばからへし折れた。
痛い損失だが、倒し方は分かった。
私は倒した半魔兵の剣を拾い、次の敵へと相対する。
「そこまでだ！」
大音声と共に、赤いローブを着た髑髏のような顔の悪魔が現れる。
彼は魔族軍の指揮官で、ゼペイルという名だった。
後方にいたはずの姫が、いつの間にか悪魔の腕に拘束されていた。
「我輩の大事な実験体を破壊するのは勘弁してくれたまえ」
「貴様っ！　姫を放せ！」
「動くな。我輩も貴重な素材を傷つけたくはないのでね、少し大人しくしてもらおうか」
「むぐぅぅッ！」
悪魔の手が姫の頸にかかる。姫の苦悶の声に、背筋が凍り付いた。
姫を人質にされてしまっては、迂闊に動けない。この場はゼペイルに従うしかない。
「なんでもする。姫には手を出すな」
「ククク、約束しよう」
私が剣を捨てたのを皮切りに、部下たちもそれに倣う。
こうして私たちは捕えられ、魔族の虜囚となったのだった。

◇　◇　◇

半魔兵に連行されながら、魔族軍に占領された王城を歩く。
美しかった王城は戦闘により荒廃し、魔族たちが我が物顔で闊歩していた。
しかし、そんな彼らも半魔兵の姿を見るとぴたりと口を閉ざし、コソコソと道を譲る。魔族たちですら半魔兵を恐れているのだろうか。
覚悟していたものの、私が連行された先は処刑場ではなく書庫だった。
魔族の指揮官ゼペイルは玉座の間や王の私室ではなく、書庫を居室に定めたようだ。
悪魔の傍らにはリシャルディス姫の姿があった。
ドレスの胸元ははだけ、控えめな乳房が露わにされていた。スカートにも乱れがある。
彼女の頬に涙の跡があるのを見て、私は脳が破裂するかと思うほど苛烈な怒りを覚えた。
私は衝動的に半魔兵から剣を奪い、ゼペイルに斬りかかっていた。
「貴様！　姫に何をした⁉」
全力の剣撃を、半魔兵が難なく受け止める。
半魔兵たちに取り押さえられながら、私はゼペイルを睨んだ。
「ふむ……魔術で理力を制限しているにも拘わらず良い動きをする。素体としても期待できそうだ」
ゼペイルは一連の騒動を気にもしていない様子で、何か呟きながら、手帳に走り書きする。
「大丈夫ですよ、クリス。何もされていません。少々……肌を見られただけですので」
姫の言葉で少し冷静になり、悪魔を睨むだけに留める。
私の殺意を受けても、ゼペイルには全く動じた様子がなかった。
「リシャルディス姫の体を調べさせてもらったが……残念ながら、半魔兵の出産には耐えられないようだな」
「な、何をする気だ⁉　姫にこれ以上の狼藉は許さんぞ‼」
「苦労して手に入れた、貴重な天使の末裔だ。我輩も無為に浪費したくはないと思っている……故に」
深い闇のような虚ろな眼窩が私を見下ろす。
ゼペイルは半魔兵に私の鎧を脱がせ、腹を撫でた。行為の得体の知れなさに、一抹の不安がよぎる。
「耐久性は充分だな。聖騎士クリス、姫の身代わりとして、魔族の子を産む

著者近況　淡海翁人です。米製女児向けアニメ My Little Pony: Friendship Is Magic の擬人化版の Equestria Girls が好きなのですが、近日終了が決定してしまいました。心を強く持って生きようと思います。ちなみに推しは Twilight Sparkle です。

つもりはないかね？」
しばらくの間、何を言われたのか分からなかった。
魔族の子を産む？
脳がその言葉を理解するのを拒んでいた。私は困惑したまま問い返す。
「何を言っている。私は男だぞ。子を産めるはずがない」
「心配無用だ。男を女に変える程度は雑作もない。種の壁を越えることに比べれば瑣末ごとだ」
「なんだと……」
「我輩が挑戦したいのは新種の創造、悪魔の力すらも及ばぬ、超越者のみに許された領域よ。我輩の理論が正しければ作れるはずなのだ。神の御業をも超える最高傑作を！」
悪魔は陶酔した様子で早口にまくしたてる。
ゼペイルという悪魔の抱える狂気の一端に触れたような気がした。
ただでさえ自然の摂理に反した邪悪な計画だ。最悪の結果に結びつくのは容易に想像できる。
少なくとも、人族にとっては害にしかならないだろう。
「断る！　誰が貴様の野望などに加担するものか」
「おや、あのときは何でもすると言っていたが、嘘だったのかね？　それなら少々もったいないが当初の予定通り、姫の子宮を使って……」
「ま、待て！　姫には手を出すな！」
表情のない髑髏のような顔に、笑みが浮かんだような気がした。
「今度こそ、なんでもするかね？」
虚空から一枚の紙が現れる。悪魔の契約書のようだ。
「聖騎士クリスが我輩の用意した全ての種族と交わり、子を孕み、産む限り、いかなる魔族もリシャルディスの命や貞操を奪うことはない。この契約に、我輩は己の命を賭けよう」
ゼペイルは己の指をナイフで傷つけ、先に血判を捺す。
私は内容をしっかり検め、ゼペイルの宣言と一言一句間違っていないのを確認する。
嘘は言っていないように感じる。
しかし、悪魔に手を貸していいのか。彼の狂気は世界に災いをもたらす類のものに違いない。
聖騎士にあるまじき行為だ。
だが、姫だけは助かる。時間を稼いでいれば、そのうち他国からの救援が訪れるかもしれない。
「いけません、クリス。そこまでする必要はありません。これまで私を守ってくれただけで充分です」
姫は私を諌めようと言葉をかける。
一見、気丈そうにしているが、手が震えている。彼女も恐ろしくてたまらないはずだ。
こんな心優しい方を見捨てることができるものか。例え人としての尊厳を残らず捨てることになろうとも、姫は私がお守りしなければ。
私は覚悟を決め、血判を捺した。
契約書は燃え上がり、一瞬だけ私とゼペイルの胸に魔法陣が輝いた。
「ククク、契約成立だな。それでは、楽しい実験の時間だ」
場違いなほど明るい声音で、悪魔はそう宣言した。
ゼペイルの指先が私の腹に触れる。
水面に波紋が広がるように、邪悪な波動が全身を駆け巡る。
「ぐ、うぅぅうッ!?　かはッ！　あ、うぅ、んン、く、うぅぅ……ッ!!」
まるで皮下の肉が全て蛆虫に変わり、その蛆虫が好き勝手にのたうち、這い回っているかのような感覚。
皮膚も筋肉も内臓も骨もグズグズに融け、全てが一緒くたにかき回され、何もかもが裏返っていく。
私は床の上を悶え転がり、歯を食いしばって耐えた。
次第に体内に渦巻いていた禍々しい力が消え、自由が戻ってくる。
「く、あ、うぅ……終わったのか？」
自分の声ではない。女の声だった。
思わず自分の喉を押さえる。そこにあるはずだった喉仏がない。
視界にチラチラと、自分と同じ色の長い髪が映る。
本当に女になったのか？
「なかなか良い仕上がりだ」
ゼペイルが虚空から姿見を取り出す。
そこには一人の乙女の姿があった。
自分の面影もあるが、若い頃の母の肖像にも似ている。
肌は透き通るように白く、きめ細かでしみ一つない。
私と同じ色合いの、意思の強そうな緑の瞳。色合いこそ同じだが、胸元に届くほど長く伸びた金色の髪。
胸は、大きく――
「くっ……」
目のやり場に困る。自分の胸なのに、視界に入れただけで気恥ずかしい。
体を調べる際に胸甲も脱がされたため、開いた襟元から谷間が覗く。
やけに大きな乳房によってシャツが引き延ばされ、今にもボタンが弾け飛びそうだ。
もっと胸筋を鍛えていたはずなのに、どこに消えたんだ。こんなに肉感的で劣情を誘うような体つきにする必要はないはずだぞ。
自分の姿だと分かっていても、鏡の中で凛々しく美しい乙女が羞恥に頬を染める姿に胸が高鳴ってしまう。
「これが……私、なのか？」
ショックから少し立ち直り、冷静に現状を分析できるようになってきた。
筋肉が失われているためか、何とも頼りない心地だ。着慣れたはずの鎧が重く感じる。
ベルトは緩くなったが、尻の辺りはやたらと窮屈だ。乳首も布地に擦れているせいで痛い。
そう思っていると、ゼペイルの手がシャツのボタンを引き千切り、ズボンを下穿きごと引き裂いた。
押し込められていた肉が解放され、少し楽になる。

著者近刊　『勇者パーティから追い出された俺は「ティンポ師」として生きることになった』　好評発売中！

ほっとしたのも束の間、悪魔の手が無遠慮に乳房を鷲掴みにし、尻に指が食い込むほどに撫で回した。

「くぅッ!?」

「ふむ、しっかりと牝の肉が定着しているな。では、内部はどうかな？」

確かに脚に力を入れたはずだった。

それなのに、あまりにもあっさりと脚を割り開かれてしまう。

「貴様、何を……ひぅッ!?」

ぬるり。

悪魔の舌がそこにある器官の入口をこじ開け、侵入を果たす。

反射的に抵抗しようとしたが、悪魔の体はびくともしない。

あまりにも非力すぎる。女の全力はこの程度なのか。

細い舌が執拗に内部を嬲るためか、否が応でも穴の存在を意識させられる。

おぞましさに鳥肌が立つ。

そこは本来、生命と愛を司る神聖な器官であるはずだ。そんな場所を悪魔の穢らわしい舌が這い回っている。

この屈辱を姫に味わわせないで済むと思わなければ、叫び出しそうだ。

私さえ耐えれば、姫は助かる。

自分の心にそう言い聞かせ、歯を食いしばる。

「んン……ッ！　く、ふぅ……、ん、ぐ、んぅぅ……ッ！」

声をあげたくはないのに。

内側から押され、肺から押し出された呼気を、女の喉は不必要に艶かしい喘ぎへと変換する。

恥ずかしい。姫の御前でこのような醜態を晒すとは。

姫の視線に堪えかねて逆を向くと、姿見に映った自分の姿があった。

「ふあっ、あ……、ああ……っ」

なんという無様な姿だろう。

悪魔に組み敷かれて、なすすべもなく秘処を蹂躙される自分は、ただの女にしか見えない。

不甲斐ない。それでもお前は騎士か。

クリス、お前の騎士道精神は、体を女にされた程度で、穴を舐め回された程度で折れるような柔なものか。

否。断じて否だ。

心を奮い立たせ、ゼペイルを睨む。

「ふ、ぐ……余計なことに、いつまで時間をかけるつもりだ。んんっ……、稚拙な舌技ごとき、いくらやっても、無駄……くぅッ！」

「急くと痛い思いをするぞ」

「私は、ンぅぅっ！　私は騎士だぞ。痛みごとき、恐れるものか。く、はぁ、苦痛には、慣れている」

「勇ましいことだ。その気質が子にも継承されればいいがな」

ずるりと舌が抜ける。

痛みのないままに内臓を抜かれるかのような、おぞましい感覚。

私は辛うじて声を堪える。

背後に回った悪魔に、子供のように抱え上げられる。なすすべもなく脚を開かされ、女性器をリシャルディス様の方に向けられる。

「クリス……ごめんなさい……」

姫は顔を背けようとするが、半魔兵はそれを許さず、私の方を向くように強制した。

見られている。吐息が触れるほどの至近距離から、秘すべき処の奥まで、姫に見られている。

彼女の呼吸によって動いた空気が、私の内側を撫でる。そのせいで、舌に抉られた痕が、未だにぱっくり開いているのが分かってしまった。

羞恥心で頬が熱くなる。

「さて、まずは悪魔の子種を受精してもらおうか」

ゼペイルの囁きで、おぞましい現実に意識を引き戻される。

見下ろすと、脚の間で長くて赤黒い肉塊が屹立していた。

見慣れた人間のそれとは違い、肋骨に似た硬質な突起で覆われている。

これが悪魔のペニスなのか。

禍々しく生理的嫌悪感を誘う形状に、強い拒否感を覚えた。

異種族のモノだからという理由もあるが、それ以上に、女の本能が恐怖を感じている。

女の目からペニスを見ると、こんなにも凶悪に感じるものなのか。

「くっ、大したことはないな。たかが陰茎ごときを見せた程度で、私が怯むと――ひぐぅぅぅぅっ？」

何の躊躇もなく、ゼペイルのペニスが女の器官に侵入してくる。

肉厚の亀頭がミチミチと膣肉をこじ開けていく。純潔を示す膜はあっさりと破られ、未踏地が穢される。

喪失の感慨に耽る間もなく、激痛が私を襲う。

「ふぐッ、う、あっ、ああ、裂け、っ、あ、ま、待ッ、ンぅぅぅッ!!」

声が抑えられない。

初めての痛みだからなのか、女の体が痛みに弱くできているのか。

遅まきながら抵抗するも、肋骨状の突起がそれを阻む。突起は返しの役目を果たし、もがけば却ってずるずるとペニスが奥へ食い込んでいく。

骨状の硬殻を纏った力強いペニスが、傷ついた弱々しい柔襞に、己の存在を刻み込んでいく。

「く、ふ……、ひ、や、ああ……!!」

軽口の一つでも言ってやりたいのに、口から漏れるのは力ない呻きばかりだ。歯の根が合わず、ガチガチと情けない音が勝手に鳴る。

覚悟していたはずなのに、体に引きずられて恐怖が湧いてくる。

抗い、耐えるどころか、取り繕うことすらできない。女の体はこんなにも無力なのか。

私の中で悪魔のペニスが暴れ回り、好き勝手に穴が拡張されていく。

「うぅぅ……、そ、それ、以上、ぐっ、あ、ああ、うぁぁあッ!?」

ズグリと、更に深くまで食い込んでペニスが止まった。

何かが受け止めている。そこが最奥部なのだと、本能で理解した。

自分の子宮の入口に悪魔の生殖器が

食い込んでいる様子を思い浮かべて、おぞましさに総身が粟立った。
「あ、ああ、あっ！　やめ……そこ、んンっ、や、やめろっ！」
「ふむ、どこの話だ？　こっちか？」
「ひぅぅうッ⁉」
ゼペイルはとぼけた口調で言って、一息に入口まで引く。
硬い返しに傷ついた内壁を抉られ、膣肉ごと引きずり出されるかのような衝撃が襲った。
激痛で視界が滲む中、カリ首だけが膣口に引っかかっている現状が、私に嫌な予感を抱かせる。
「それとも、ここか――なッ！」
「あ、やめ、いぎィいいいいッ⁉」
肉槍は裂き拡げたばかりの処女膣を一気に刺し貫き、破城鎚のように門扉ごと子宮を打ちのめした。
あまりの衝撃に、一瞬意識が飛ぶ。
やや遅れて、下腹部から脳天までを雷にも似た余波が貫いた。じんじんと痺れて体の自由が利かない。
「おや、返事がないな？　まあ良い。下の口の返事に応えるとしよう」
「や……、やぁ、もう、それ、やめッ――いぎぁぁぁぁッ⁉」
ゼペイルは勝手なことを言いながら、私の最奥を突き上げる。
ただそれだけで、私はペニスを締め付けるだけの玩具に、憐れな悲鳴をあげて蹂躙されるだけの、惨めな肉袋に成り下がる。
もういいだろう。早く終わってくれ。リシャルディス様の前でこれ以上無様な姿を晒したくない。
気づけば心の中で哀願していた。
姫がどんな表情でそこにいるのか、怖くて顔を見ることもできない。
「頑丈だな。理想的な母体だ」
「ひっ、あ、あぁ……」
「ククク、それに覚えもいい。君の下半身は、随分と我輩の生殖器を気に入ったようだな」
何の話だ。
疑問を思い浮かべてしまったせいで、意識が結合部に向いた。
肉襞は挿入に合わせてペニスを歓迎するように締め付けている。抜くときは硬殻一片一片に名残を惜しむかのように吸い付く。
いつの間にか膣内は血液以外の液体で潤い、苦痛以外の感覚を神経に乗せて伝えていた。
嫌だ。嫌だ。嫌だ。
勝手に魔族なんかに媚びるな。私の体は私のもののはずだ。
自身の意思を無視して男根に屈従し、変化していく肉体に怖気が走る。
「ひッ！　も、もう、やめ……ひっ、い、いや、いやっ！　お願い、早く、んンっ、はやく、終わって――」
悪魔の指が太腿に食い込む。
腰の動きが速くなってきた。執拗に子宮を狙うような動き。獣欲と本能に根ざした律動。
これは、この動きは、知っている。
射精される。
種付けされる。
子宮まで魔族に占領される。魔族を受け入れさせられる。
「い、いや、いやだ！　それは、それだけは！　やめろ……やめて！　いや、いや、抜いて、いや、いやあッ！」
そのために女になったはずなのに、思わず拒絶の声が喉をついて出た。
本能的な怖気に突き動かされ、私は半ばパニックになってゼペイルの体を掻きむしる。
必死の抵抗も虚しく、悪魔のペニスが子宮口に食い込んだ。
どぷっ！　びゅぐびゅぐっ！
「あ、ああ、いや……、で、出てる⁉　あ、あ、ああ、ひあぁぁ、いや、精液、中にぃ……あ、ああ……っ⁉」
私の中で忌むべき牡の器官が脈打つ。
粘つく灼熱の体液が迸り、私の無垢でか弱い場所に流れ込んでくる。
「あ、ああ――……」
穢された。じわりとその実感が湧き上がってくる。
いつしか頬を涙が伝っていた。
今更ながらに、喪失感が胸を苛んだ。
人として最も大事な場所を憎い敵に明け渡したことに、取り返しのつかない後悔が湧いてくる。
「ふう……なかなかいい具合だったぞ。これなら兵たちの子種を搾り取るのにも役に立つだろう」
最後の一滴まで私の中に注ぎ終え、役目を終えた悪魔の生殖器がずるりと引き抜かれる。
「う、うぅ……」
ようやく、終わった。
全ては悪い夢だと思いたかった。
しかし、ぽっかり開いたままの穴が、まるで永遠に癒えない呪われた傷痕であるかのように存在を主張する。
やや温くなったゼペイルの精液が、太腿に垂れてくる。
気持ち悪い。
契約さえなければ、残らず掻き出してしまうのに。
そんな私の感傷を嘲笑うかのように、私の体の中で変化が始まる。
――ドクン！
胎内で何かが脈打つ。私は震える手で下腹部に手を添えた。
受精した。そうに違いない。
孕まされたのは初めてだというのに、なぜかはっきりと分かった。
無数の精虫が卵子に群がり、膜を食い破って次々に潜り込んでくる。
神経など繋がっていないのに、吐気を催すようなおぞましい受精の疼きが鮮明に感じられる。
後戻りのできない受胎宣告を突きつけられ、決意が揺らぐ。
私は男だったのに。本当に悪魔の子を産まされてしまうのか。
「ククク、心配するな。そのうち受精が病み付きになる。我輩の精液には、そういう成分が含まれている。今までの被験体は皆とても喜んでいたよ」
体を女にし、孕ませただけでなく、心まで犯すつもりか。

イヤアーッ!!
だっ誰か助けっ…
んぶっ!
ハアッッ!!
やっ!!
影魔姫のもとへ急げ!!
好評発売中!
白う～凪いの単行本
『聖天使ユミエル エンドレスフィード』
聖天使ユミエル
カオティックロンド
第6話 穢された決意
原作/黒井弘騎
漫画/白う～凪い

くっ！
ガクッ
ガクッ
なんて事なの…っ
ハー
ハー
街中がエクリプスで溢れかえってしまっている！
ん～!!
ん～!!
ズッ
ズッ
ズッ
このままではまた恵理子が危険に…!!
一刻も早くオメガエクリプスを倒さなければ――
ピ

ズブォ
なっ!?
クッ!!
ガッ
しまっ…!!!
ガッ

くうっ！
駄目 力を消耗して振り解けないっ!?
ギチッ
もぞ
もぞ
ヤ…
何っ!?
やめ…っ
離れなさい この蛆虫！
うぞ
ハー
ハー
ひあっ！
グッ
おヘソに…
ビクッ
ビクッ
ぱぷぷ
え？
!?

イヤっ
そうかっ！こいつ等の体液には催淫効果が…
何故こんなに体が勝手に反応してしまうの!?
加えてさっきまで犯されていた疼きと相まってこんなにっ！
あ…っはふあぁっ!!♥
駄目っお尻にも別の触手がぁっっ！

やめ…ぇ お尻を揉む なぁっ!!
ふっ!
もにゅ
駄目よっ!
むにゅ
ぐっ!
お尻の穴に 粘液擦り込ま れてるっ
あくぅっ …ぁあっ
ヌリュ
ヌリュ
お尻が… あつい!
ハー
ハー
駄目!
私もう 二度と諦めたり しないの!!
あー
メギュ
メギュ
止めっ!!
びくっ
ピュッ
ひあああ あぁんっ♥♥
んひい!!

!?
触手が乳房に張り付いて！
ふあああああっ!!
ぢゅーっ
ちゅ
ちゅ
ちゅ
ちゅ
吸盤がおっぱいにぃ
んふぁ！
おっぱい弾けちゃうぅぅ♥♥
ぷるっ
ぷるっ
ぷるっ
あふぅぅぅ〜っ!!

感じちゃ駄目なのにぃ
あっ!!
ムギュ
ひっ!!
あっ♥
レギュ
あっ♥
ガク
あっ♥
ガク
ピュ
プシ
プシ
ピュッ
ギィイイ
クリトリス熱いよぉぉ
プッ
おっ…
ブルッ
ブルッ
ピュ
ククリトリスに斬り落とした触手が噛み付いてぇ…!!

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/